
パッセルベルの猫の妖精

林来栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パッセルベルの猫の妖精

【Nコード】

N2318D

【作者名】

林来栖

【あらすじ】

大きな森の奥の、大きなトネリコの木に住む、猫の妖精の子供、ハナハナ。彼女と、同じくトネリコの木に住む妖精たちの日常の出来事を描いたファンタジーです。ちよつとだけ、冒険や魔王などとの対決もできます。

・・・あ、いけない。「トネリコ」を「トリネコ」って書いてました。猫の妖精のお話だからって・・・バカ作者です（汗）

その1 村の泉（1）（前書き）

パッセルベルという小さな溪谷の村に住む動物の妖精達の日常茶飯事を描いた物語です。怖い話や不思議な話はちよつとしか入っていません。基本のんびりのほほんな物語です。

その1 村の泉（1）

緑龍溪谷の更に奥、パッセルベルという谷間に、猫の妖精とその仲間達が暮らす村がありました。

村はトネリコの大木の上、太い太い枝の上に、猫の妖精達と仲間達がそれぞれ家を作って住んでいました。

南の枝の端の方に、ハナハナという子猫の妖精が住んでいました。ハナハナは今年で十歳、元気な女の子です。

ハナハナには両親がいません。ハナハナが赤ちゃんの時に戦いに出て行って死んでしまいました。だから、ハナハナは今お姉さんのミイミとそのだんな様のティーヴ、それとミイミの子供達と一緒に暮らしています。

ハナハナはお日さまが上ると一番に起きて、お気に入りピンクのエプロンをつけます。お姉さんのお手伝いをするため、トネリコの樹の根方にある泉まで、木のバケツを銜えて一気に駆け降ります。泉にはいろんな妖精達がやって来ます。シマリスのボツへさんはおじさん妖精、毎日バケツ二つに一杯水を汲んで運び上げて行きます。木ねずみの妖精マーマおばさんは、子ねずみ三匹をお手伝いに連れて来ます。上から順番にリック、ニック、マック。三匹の子ねずみはまだ小さくて、お手伝いよりも水遊びが大好き。水の掛けっこをしておばさんにしょっちゅう怒られています。

マーマおばさんはハナハナが来るといつも目を細めて笑います。「ハナハナはお利口さんね。うちの子達もハナハナみたいになつてくれないかしら」

ハナハナはちょっと嬉しい気持ちになります。

泉には黒い妖精マーフが、半年前から住んでいます。マーフは優しい妖精ですが、最初に泉にやって来た時は大騒ぎになりました。

その1 村の泉(1)(後書き)

いかがでしたでしょうか？読んでほのぼのして頂けたら幸いです。

その1 村の泉(2)

その日も、ハナハナはピンクのエプロンをつけてバケツを銜えて、勢い良く泉に駆け降りて来ました。

でも、どうしたことが、いつもい来ている人達が誰も来ていません。

「みんな、どうしたのかな？」

ハナハナは周りを見回しました。すると、トネリコの太い幹の脇から生えた若枝の葉の陰から、子ねずみのマツクがちょこんと顔を出しました。

ハナハナは急いでそこへ行きました。

「どうしたの？」

「泉の中に、気持ちの悪いものが沈んでるの」

リックの後ろの枝から、マーマおばさんが顔を出しました。

「おばさん」

「ああハナハナ。今は泉に近付いちゃダメよ。悪いものが入ってしまったからね」

「悪いものって、なあに？」

「魔王の手下だった、黒い妖精よ」

「魔王って、だあれ？」

「魔王は昔、この世界を一人占めしようとした悪い奴よ。その手下だった黒い妖精も、私達や外の人間達を散々苦しめたのよ」

「黒い妖精って、じゃあ今も悪いの？」

「今はそんなに悪くないけど、でも昔は悪かったのよ」

「ふうん」

危ないって言われると気になります。

ハナハナは更に聞きました。

「黒い妖精は、泉の中で何をしているの？」

マーマおばさんは、真っ黒な目を二、三回ぱちぱちすると、ハナ

ハナを困ったように見上げました。

「何って…。今は寝ているわ」

「ふうん」

寝ているなら、起こさないようにすれば大丈夫じゃないのかな。

悪い妖精を少し見てみたい気になって、ハナハナはとことこと泉の方へ歩き出しました。「どこへ行くの？ ハナハナ」

「黒い妖精さんを見る」

「まあ、なんてことっ！」

おばさんは慌ててトネリコの葉の陰から飛び出して、ハナハナの手を引っ張りました。

その1 村の泉(3)

「そんなことをして、妖精が起きたら危ないでしょう?」

「でも、今はねてるんでしょ? 起こさないようにそつと見るわ」

「ダメダメ。もし起きたら危ないわ。行つてはダメよ!」

「そうだよ、ハナハナ」

マーマおばさんの後ろから、シマリスのボツへさんが顔を覗かせました。

「黒い妖精は、それはそれは恐ろしいんだ。わしやマーマおばさんでは、もし妖精が起きて、

怒り出しでもしたら戦うことは出来ない。とても適う相手じゃない。だから、今木ねずみの

子供達二人に長老を呼びに行つてもらっているんだ」

「長老さまなら、黒い妖精に勝てるの?」

ボツへさんは、自分の事のように胸を張りました。

「長老さまはその昔、悪い龍がこのパッセルベル谷を荒し回った時、たった一人でその龍と

対決なさつて勝つた方だ。黒い妖精くらい、簡単だよ」

「ふうん」

ハナハナは本当かなあ、と首を捻りました。だって長老さまは、いつもトネリコの木の一

番上のお家の前で、居眠りばかりしているからです。

こつくりこつくり眠っている長老さまは、とても強くは見えませんが。

「ねえおばさん、長老さまは何時来るの?」

マーマおばさんは目を細め、尖った鼻を上へ向けてくんくんと動かししました。

「もうそろそろじゃないかしら」

「あ、戻つて来た」

マツクが上を見上げた時、トネリコの木の上からぴょん、とリックとニツクが飛び下りて

来ました。続いてもう一匹。そして最後にのそのそと長老さまが幹から降りて来ました。

長老さまは真っ白な長いヒゲを生やした、大きな猫の妖精です。

右手に持ったトネリコの

枝で作った杖をぐつと地面に立てると、よっころしょ、とやや曲がった腰を伸ばしました。

マーマおばさんとボツへさんは、長老さまに丁寧にお辞儀をします。

「お待ちしてました」

「うむ。して黒い妖精は？ まだ泉の中かの？」

「はい。全然出て来ようとはしておりません」

長老は、ゆっくり泉の方へ向きました。

その1 村の泉(4)

「どれ。」

のそのそと、杖をつきながら歩いて行きます。

ハナハナは何だか心配になって来ました。本当に長老さまは大丈夫なんだろうか？

あんなにふらふらしているのに。

長老は泉の縁までやって来ると、杖をふつと振り上げて、先を水にちゃんと付けました。

その途端。

泉の水が大きく波打ち、真ん中が急速に凹みました。そして、凹みの中から真っ黒い塊が浮かんで来ました。

丸い塊は、次に縦に長く伸び始め、あっという間にハナハナ達猫の妖精と似たような姿に変わりました。

黒い妖精は、真っ黒な髪と焦げ茶の肌をした、若い男でした。

灰色の服を着た若者は、でも姿は猫の妖精によく似ていましたが、全く違うところがありました。

「しっぽが無い…」

パッセルベルの人々には、猫の妖精だけでなくみんなしっぽがあります。

けれど黒い妖精には、しっぽだけでなく、頭の上に耳もありません。

「変…」

思わず呟いたハナハナに、マーマおばさんが「しーっ」と人さし指を口に当てました。

長老は、現れた黒い妖精に向かって言いました。

「あなたは、どうしてこの泉に入ってしまったのかの？」

黒い妖精は小さな声で返事をしました。

「ここへ行きなさいと、言われたからです」

「ほう、ほう」

長老は大きく頷きました。

「その話を、して下さるかの？」

「はい。私はその昔、この緑龍溪谷よりずっと南の森の湖の妖精でした。

私は、魔王が現れるまでずっとそこで、仲間達と楽しく暮らしていたのですが、ある

日湖に魔王の手下が現れ、私や仲間を捕らえたのです。魔王は私達に闇の魔力を秘めた

黒い水を守るように命令しました。でも、黒い水に触れれば、私達水の妖精は黒く染ま

ってしまいます。仲間が拒否すると、魔王は拒否した者を凶暴な妖魔の巣穴へ投げ入れました」

「なんて酷い…」

マーマおばさんが恐そうに口を押さえました。

「私は、仲間が妖魔に噛み殺される悲鳴を聞いて堪えられなくなりました。私が犠牲に

なれば、仲間が助かるならと、私は黒い水を守ると、魔王に言いました。そして、黒い

水に入ったのです。その途端、私の心は凶暴なものに変わりました。…多くの人間や妖精を酷い目に遭わせました。でも、魔王が倒さ

れ黒い水が消えた途

端、私の心は元に戻ったのです。けれど…」

黒い妖精は、そこでぼろりと涙を零しました。

その1 村の泉(5)

「心が戻って、私は仲間の住む湖に帰りました。でも、仲間は私が黒く染まっているのを

見て、湖に入れてはくれなかった。私が犠牲になって、みんなを魔王から守ったのに。…」

「仕方なく、私は他の水辺を探しました。けれどもどこも皆、妖精達は黒い私を受け入れてはくれなかったのです。水の妖精は、水が無ければやがて弱って死んでしまいます。」

私は水辺を求めて放浪しました。酷い時は、雨で出来た水溜まりに何日か居たこともありました。

ある時、大きな街の裏通りのどぶ川で私は眠っていました。そこへ年寄りの魔導師がやって来て、言ったのです。

『緑龍溪谷の奥にあるパッセルベルという村の泉へ行きなさい。光の子があなたを救ってくれるでしょう』」

「私は初め、人間の魔法使いの言う事を信じていいのか迷いました。けれど、私にはもう

行くところは無かった。行って追い出されれば、今度こそ私は死ぬしかないと思いました。

でもそれでもいいと、私は思いました。一度魔王の配下になってしまった妖精には、結

局安息の地など無い…。私は覚悟を決めてここへ来ました。

もし本当に光の子という方がいて、私を救って下さるなら幸い、そうでなくとも、もうこ

こより他には当てはありません。

…長老さまは確か、悪王と呼ばれた龍の帝王と戦って勝った方だと聞いております。も

し私がこの泉に住まう事をお許し下されないのでしたら、どうか私を殺して下さい。もう、

他所をさまよう気力はありません。どうか、長老さまの強いお力で私を自然に還して下さい

さい…」

長老は少しの間、白い顎ヒゲを片手で撫でて考えていました。それからふと、ハナハナを振り返りました。

「ハナハナや」

呼ばれて、ハナハナは「はい」と返事しました。

「こつちへおいで」

「はい」

とことごと、ハナハナは長老の側へ行きました。

「この、黒い妖精をどう思うかね？」

「え…」

いきなり聞かれて、ハナハナは困りました。じっと自分を見ている黒い妖精を見返しました。

妖精の目から、また涙が零れました。赤い大きな目が涙で一杯なのを見て、ハナハナは

黒い妖精が本当に悲しい思いをしているのだと思いました。

「長老さま」

ハナハナは言いました。

「私は、黒い妖精さんが悪い人には思えません」

「まあっ」

後ろで、マーマおばさんが声を上げました。

「ハナハナ、この妖精は大勢の人間や私達の仲間を苦しめたのよ？
みんな酷い目にあつ

たのよ？」

「でも、今は悪い人ではないと思うの……」

「殺された人も、いるんだよ？」

ボツへさんも言いました。

「それでも悪い人ではないのかい？」

「うーん……」

ハナハナは考え込んでしまいました。

確かに、前はみんなを苦しめて人殺しをした人です。でも今は、その事を反省している

し、十分苦しんでもいます。

何より、黒い妖精の赤い瞳はとってもきれいで、ハナハナには嘘をついているとは、と

とも思えません。

困ってしまつて、ハナハナは長老を見上げました。長老はにっこり笑いました。

「ハナハナは、どうしてこの妖精が悪い人に思えないのだね？」

「……目が」

ハナハナは正直に言いました。

「目が、とってもきれいだから」

すると、長老は大きく頷きました。

「うむ。わしも同じ事を思ったよ。??妖精さんや」

「はい」

「あんたは、何という名前かの？」

黒い妖精は、小さいけれどはっきりとした声で、

「マーフ、と言います」

「ではマーフ、パッセルベルの長老の名において、この泉に住まう事を許そう。」

ただし、条件がある」

長老は心配そうにこちらを見ているみんなを振り返りました。

「わしとハナハナはいいんじゃないが、他の者が心配しておるのな。」

そこで、申し訳ないが、
ひとつあなたに枷を掛けさせてもらおう

その1 村の泉(6)

黒い妖精マーフは、今度はしっかりと頷きました。

「はい。ここへ住まう事が許されるのなら、なんなりと」

「うむ。では」

長老は杖の頭をすつ、とマーフの首に向けました。と、そこから金色の光が一筋発され、

真直ぐにマーフの首に飛んで巻き付きました。

マーフの首に、金色の首飾りが巻かれました。

「その首飾りは戒めじゃ。もしあんたが、今話した事や村の人々に嘘や悪さをした時には、

その首飾りがあんたの首を絞める。

ま、これは余計かもしれんが、その首飾りを外そうと魔法を使っても外れんよ。それは

龍の魔法封じに用いたものじゃからな」

「はい。絶対に外しません。：ありがとうございます」

マーフはもう一度、長老に深々と頭を下げました。

長老は「うむ、うむ」と頷くと、背後で恐ごわ様子を窺っていた村の人々に言いました。

「もうマーフは悪さは出来んよ。安心して水を汲みなさい」

「本当に、大丈夫ですか？」

「わしが、保証する。」

長老の言葉で、村の人々はほっとして泉の側へと寄って行きまし

た。
ハナハナは、まだ悲しそうな顔をしているマーフに、にっこり笑い掛けました。

「大丈夫。きつとみんな分かってくれるわ」

それから半年。

マーフは毎朝、泉に来るみんなに「おはよう」と挨拶します。

ハナハナ以外のみんなは初めは怖がって、マーフに挨拶を返しませんでした。
けれどだんだんと平気になって来て、今ではみんな挨拶するようになりました。

マーフはみんなが水を汲んでいるのを、反対側の岩に腰掛けて楽しそうに眺めています。

ハナハナは、今日も元気にバケツを銜えて泉に駆け降りて来ました。

岩に腰掛けたマーフを見つけて、大きな声で挨拶します。

「おはよう、マーフっ」

「おはよう、ハナハナ」

すると、ハナハナの後ろからも大きな挨拶の聲がしました。

「おはよう、マーフっ」

木ねずみの子供達でした。ハナハナが驚いて振り向くと、子供達はちよつと照れたように笑いました。

マーフはとっても嬉しそうに、子供達に挨拶を返します。

「おはよう、リック、ニック、マック」

ちゃんと名前を呼んで貰って、木ねずみの子供達はちよつと得意げにお互いの顔を見ました。

見ると、マーマおばさんがトネリコの木の根元で笑っています。

「今日もいい天気ね、マーフ」

「ええ。マーマおばさん」

二人の会話を聞いて、ハナハナはとっても嬉しくなりました。

ハナハナはうきうきしながら水を一杯バケツに汲んで、家へ戻りました。

その1 村の泉（6）（後書き）

「その1 村の泉」は、これで完結です。

アクションも何もない、のんきなファンタジーですが、
気に入って下さったら、ぜひご感想を下さいまし。

次は、「その2 銀の水時計」です。

いたずら子ねずみたちが、とんでもないことを！

ハナハナは子ねずみたちを庇って、ある決心を……！

「パッセルベルの猫の妖精」は、まだまだ続きます！

その2 銀の水時計(1)

木ねずみの子供達は男の子三人。上からリック、ニック、マック。とつても仲良しの三人兄弟は、揃ってとつてもいたずらっ子です。ボツへさんの仕事道具ののこぎりをこっそり持ち出して、トネリコの枝をあちこち切つ

て回つたり、長老の眼鏡をいじって壊したり(そのせいで、長老は歩く時暫く孫娘のニーヤに手を引いて貰っていました)。

その度におかあさんのマーマおばさんはご近所に謝りに飛んで行きます。

「もうっ、あんた達ときたらっ！ もうちょっという子になれないのっ？」

叱られて、それでも子ねずみ兄弟は元氣一杯、好奇心いっぱい。

春は、パッセルベルに色んなお客さまが来る季節です。

お客さまが来ればみんな嬉しいのは当たり前ですが、何と言つても一番歓迎されるのが、

妖精の旅芸一座。寒い北国の妖精達の一団で、毎年パッセルベルに春の初めから一月程滞在します。

旅芸一座には手品師やらアクロバットの人やらが居て、ハナハナを初め子供達にも大人気です。

中でも大人気なのが、トーベルさんというピエロの人。真っ赤な服に真っ赤な三角帽、鼻も真っ赤で、動きもおしゃべりも面白くて、みんなトーベルさんがステージに出て来ると大拍手です。

旅芸一座は、いつも南側の一番下の大きな枝にテントを張ります。それは物凄く太い枝で、宮殿がまるまるひとつ乗るんじゃないかと思うような大きさです。

赤青黄と、七色に塗り分けられたテントが建つと、子供達は一斉に近くまで走って行きます。

春一番の花風が吹いた日、待ちに待った一座がやっとやって来ました。

一座は早速、いつもの枝にテントを張り始めます。

子供達の中でそれを最初に見付けたのは、子ねずみ兄弟でした。

「すげえっ、妖精旅芸一座だっ」

「ハナハナ達に知らせて来ようっ！」

三人は急いでトネリコの木の中程にある、ミイミの家へ行きました。

ハナハナはちょうどお姉さんを手伝って、家の裏の小枝に洗濯物を干している最中でした。

高い枝にだんな様と子供達のシャツを干すミイミの側で、まだ背の低いハナハナは低い

枝に靴下やハンカチを掛けていました。

「ハナハナっ！」

「あ、リック、ニック、マック」

自分のピンクの靴下を干しているハナハナの所へ、兄弟は走って来ました。

「来たよっ、妖精旅芸一座っ！」

大きな声で、リックが言いました。

「えっ、ほんと？」

「うん、今南の大枝にテント張ってるっ」

「うわあっ！ 見に行きたいっ！」

ハナハナは、ちらりとお姉さんを見ました。

ミイミは、クリーム色の柔らかい毛並みをふわっと和ませて、小さな妹に笑い掛けました。

「行きたいんでしょう？」

「……うん。いい？」

「いいわよ、行つてらっしゃい」

「わあいつ、お姉さんありがとっ！」

ハナハナは飛び上がって喜んでから、でもちよつと待って、と子ねずみ達に言いました。

「これ、干しちゃうから」

許可は貰ったけれど、お手伝いは最後までちゃんとしないといけません。

それは、ミイミとの約束でした。

ハナハナは手早く洗濯物を小枝に掛けると、洗濯籠を持って家の方へ行きました。

裏口近くの木のこぶの上に洗濯籠をぽんっ、と置いた時、

「お姉ちゃん、どこに行くの？」

裏口の窓から姪のモモが顔を出しました。

「うん。妖精旅芸一座が来たの」

「あーっ、モモも行くーっ！」

窓枠を両手で掴んでぴょんぴょんと跳ねるモモに、お母さんのミイミが洗濯物を干す手を休めて言いました。

「ダメよ。モモはお風邪でしょ？ 治ってからね」

今年六歳になったばかりのモモは、身体が丈夫ではありません。生まれた時から、真冬

になると必ず一度は風邪で熱を出します。

「ずるーいつ！ ハナお姉ちゃんばっかりーっ！」

拗ねて鼻を鳴らすモモが可愛くて、ハナハナはくすつ、と笑いま
した。

「お土産話、聞かせてあげる」

チュツ、とモモのピンクの鼻の頭にキスをして、ハナハナは窓を
離れました。

「じゃあ、行つて来ますっ」

その2 銀の水時計(2)

ハナハナは子ねずみ達と一緒に勢い良く南の枝まで走って行きました。

枝へ行くと、テントはもう大体出来上がっていました。去年の春にも見た、七色に塗り

分けられた大きな八角形の布の建物の上に、金色の三角旗がはためいています。

ハナハナと子ねずみ三兄弟は、わくわくしながらもっと近くまで寄りました。

「あれ、なんだろう？」

リックが、テントの裏側、南の枝先の方を指差しました。そこには、大きなテントに隠

れるように、小さなテントが五つ、張られていました。

「ああ、あれは芸人さん達のお家よ」

ハナハナはにっこり笑って言いました。

「え？ 芸人さんのお家？」

小さいマックが、びっくりしたようにハナハナを見上げました。

「でも去年はそんなの無かったよ？」

「去年もあったわよ。きつとマックは小さかったから、気がつかなかったのよ」

「そうかなあ……」

マックは不思議そうに、二人の兄を見ました。

ニックが言いました。

「あったかもしれない。僕達ショーに夢中だったから、気が付かなかったかも」

「そうかもね」

長男リックがそう言ったので、マックも「うん」と納得しました。「ねえ、あそこに行けば芸人さんに会えるのかな？」

「会えるんじゃない？」

「行ってみようよ」

「え、でもみんなお仕事してるよ。行ったら邪魔じゃない？」

ハナハナの言葉に、三兄弟はうーん、と唸りました。

「だめかなあ」

「ダメよ」

「でも、トーベルさんのファンですって言ったら、通してくれないかな？」

「僕達、まだ子供だし」

「うーん」

今度はハナハナが唸りました。

もしかしたら、大丈夫かもしれない。リックの言う通り、自分達はまだ子供だし、トー

ベルさんに会いに来たと言えば、テント張りの職人さん達も通してくれるかな。

「……行ってみようか？」

怒られるのは嫌だけど、でもやっぱりトーベルさんに会いたいし。ハナハナが行こうと言ったので、子ねずみ三兄弟は大はしゃぎで駆け出しました。

それでもテントの側に来ると、四人は大人達の仕事の邪魔にならないよう、気を付けながらゆっくり歩きました。

色々な妖精達が作業をしていました。テントの上で太いロープを張っているのは猿の妖

精。三人居ましたが、みんな焦げ茶の毛並みで同じ顔をしています。下で荷物をあちこちに運び入れる仕事は、熊の妖精達がしていました。大きな熊の妖精

が側を通る度、ハナハナ達はときどきしました。

漸くテントの裏へ出ると、ハナハナと子ねずみ達は一度立ち止まりました。

「どれが、トーベルさんのお家だろう？」

きよろきよろと、五つの小さなテントをみんなで見比べます。でも五つのテントはみんな

同じ灰色で、どれがトーベルさんのお家だか分かりません。

そこへ、畳んだ大きな布を幾つも持った、熊の妖精のおじさんが通り掛かりました。

「あのっ」

「おっ、何だい？ 嬢ちゃん」

熊のおじさんは、とっても低い優しい声で答えました。

「あの、トーベルさんに会いたいんですけどっ」

「ああ。トーベル先生のファンかい？ 先生のテントなら、右から二番目だよ」

じゃあな、と荷物を抱えて去って行くおじさんに、ハナハナは大きな声で、

「ありがとうございます」

とお礼を言いました。

それを見ていた子ねずみ達も、一拍子遅れて「ありがとうございます」
ましたっ」と

お礼を言いました。

教えて貰った、右から二番目のテントに、四人は行きました。

テントの前で、リックが言いました。

「トーベルさんって、偉いんだね。さっきのおじさんトーベルさんの事『先生』って呼んでたよ」

「じゃあ、私達も先生って、呼ばなきゃね」

ハナハナはテントの入り口に向かって、

「トーベル先生っ、こんにちはっ」
と言いました。

でも、待っても返事がありません。

「お留守かな？」

ハナハナは子ねずみ達を顔を見合わせました。

「お留守みたい。帰ろうか？」

「もう一回、呼んでみようよ。みんなで」

ニツクの提案で、もう一回、トーベル先生こんにちは、と、今度はみんな揃って言いま

した。

でもやっぱり、中から返事はありません。

その2 銀の水時計(3)

「やっぱりお留守よ。帰りましょう」

ハナハナはそう言つて、くると後ろを向きました。

と、小さいマックがたたつ、とテントの入り口に近付きました。

「でも、ちよつとだけ」

そう言つと、マックはぱつ、とテントの入り口の布を捲り上げました。

「あ、開いてる」

「中、どんな？」と、ニック。

「暗くて見えない」

「入ってみようよ」

「え？ ダメよそんな事しちゃ」

ハナハナは止めました。けれど、好奇心一杯の子ねずみは止まりません。

三人はするするつ、とテントの中に入つてしまいました。

「リックつ、ニックつ、マックつ！」

ハナハナは仕方なく三人の後に続いて中へ入りました。

トーベルさんのテントの中は、本当に真っ暗でした。

前を歩く兄弟の姿も全く見えません。

手を伸ばすと、何かが手の甲に当たりました。ハナハナはそれがすぐ前のリックのしつ

ぽだと気が付きました。

「もうつ、こんな事しちゃいけないのよっ？」

小声で怒りながら、ハナハナはリックの細いつるつるのしつぽを掴みます。

リックはしつぽを引つたくるように取り返すと、「しいつ」とハナハナに口に指を当ててみせました。

ややあつて、先頭のマツクが何かを見付けました。

「ここ、行き止まりだ」

「入り口の反対側？」

それにしては、あまりにも短い気がします。マツクが「ううん」と言いました。

「板みたいのがある。おっきいの。それに、ドアノブが付いてる」
「回してみよ」

ニツクの声。

「ダメよっ」

何となく、その先に入ったらいけない気がしてハナハナは止めました。

でも、マツクはドアノブを回してしまいました。
ぎいっ、と、木のドアが開く音がして、扉が開きました。

ドアの向こう側から、淡い光が漏れて来ました。

「うわあ」

感嘆の声と共に、マツクがまず中へ入りました。続いて二人の兄が、そしてハナハナは恐る恐る中を覗きました。

ドアの中は、これがテントの中とは思えないような場所でした。
まず四方にはちゃんとした壁がありました。布張りテントにある筈のない土壁に、みんな目を丸くしました。

右側の壁の上半分には、丸い小さな窓が五個あり、そこから光が入っています。

窓の下には長椅子が一脚、椅子の上には、柔らかそうなキルトのカバーとクッションが三個、置かれていました。

左側の壁は一面戸棚です。一部にガラスの扉が付けられた棚には、何に使うのか分からない

複雑な形の細い管が幾つも付いた銀色の道具や、勝手にくるく

る回っている地球儀、
銀の皿の上に乗ってずっと煙りを出している透明なコップなどが置かれています。

部屋の真ん中には黒い大きな机があり、机にはきれいに丸められた羊皮紙とペン、インク壺、水晶玉などが乗っていました。

リックが、机の上の小さな砂時計を取り上げました。

それは、銀色の枠に収まったガラス容器の中に、きらきら光る半透明の砂粒が入った、

小さな時計でした。

「きれいだね」

リックは時計を丸窓の方へ高く上げ、砂粒のきらきらを透かして見ます。

「すごいっ、これ砂じゃない」

「えー？ なになに、兄ちゃん」

「僕にも見せてっ」

途端に、子ねずみ達は砂時計に似た、不思議な時計の取り合いを始めます。

きゃっきゃと喜ぶ三兄弟に、ハナハナはどきどき。

「ダメっ！ そんなことして落として壊したら、大変っ！」

「何がかな？」

唐突に大人の声がして、ハナハナはぎくつとしました。

その途端。

ぱりん。

リックが時計を床に落としてしまいました。時計はガラスが割れ、中の、砂のようなき

らきらしたものが床に散らばりました。

「おおっ」

ハナハナの側を、声の人が通り過ぎました。トーベルさんでした。

トーベルさんは床に散らばった、中身とガラスの上に屈み込みました。

そのまま、暫く動きません。

気詰まりな沈黙が続きました。

ハナハナも、落としたリックもニックもマックも、誰も喋る事も出来ません。

大変な事をしてしまったのです。きっとすぐにトーベルさんは物凄く怒るだろう。と、

ハナハナは内心どきどきしていました。

でも、トーベルさんは中々何も言いません。

その2 銀の水時計(4)

「…………あの…」

どうしていいか分からずに、ハナハナが口を開きました。

「あの、私達…」

「ごめんなさいっ!」

我慢出来なくなった子ねずみ兄弟が、ハナハナが何か言う前に大きな声で謝りました。

「壊すつもりじゃなかったんです。ただその…、すっごくきれいだったから、よく見たく

て…」

「僕も」

「ぼ、僕も」

漸く、トーベルさんが立ち上がりました。

その顔を見て、ハナハナはちょっとびっくりしました。

お姉さんのミイミから、トーベルさんはハイエルフという、人間によく似た妖精だとい

う事は教えて貰っていました。でもピエロのお化粧をしていないトーベルさんは、それとはとても美しい青年でした。

トーベルさんは、綺麗な青い目でハナハナ達四人を一人ずつじっと見ました。ハナハ

ナは、何だか恥ずかしいようなこそばゆいような気分になって、思わず俯きました。

みんなをじっくり見てから、トーベルさんはやっと口を利きました。

「…………さて、どうしたものかな」

そう言うと、机の上にあったガラスのベルを取り、ちりりん、と鳴らしました。

すぐに、部屋の外から声がしました。

それは、さつきハナハナ達にトーベルさんのテントを教えてくれた熊のおじさんでした。

「済まないけど、急いでパッセルベルの長老殿を呼んで来てくれな
いか」

「はい」

おじさんは、ちらっとだけハナハナ達を見て、すぐに部屋から出て行きました。

長老さまにお話する、という事は、これは本当に大変な事をし
てしまったのだ。ハナ

ハナは改めて青くなりました。

??どうしよう。どうしよう…

おろおろしている子供達に、トーベルさんは静かに言いました。

「これは、水時計というものだ。知っているかい？」

ハナハナも、三人の子ねずみも首を横に振ります。

リックがおずおずと言いました。

「砂じゃないっていうのは、分かったけど……」

「うん。銀色のものは、特殊な水なんだ。何から採った水か、分かるかい？」

子供達は、再び首を振ります。

トーベルさんは、ちょっと厳しい表情をして言いました。

「これは、妖精の血から水分だけ取り出して作った水なんだ。作る
のは大変難しいんだよ。

何せ、一人の妖精の身体中の血を全部抜き取って、百日以上大鍋で
ぐつぐつ煮込んで、そ
れを漉さなきゃならないんだから」

「え……」

ハナハナも子ねずみ達も、恐怖に顔が引き攣りました。

特に時計を壊してしまったリックは、がたがたと震えています。

「どうしようかなあ。この時計が無いと、季節を計る事が出来ない。

次の村や街に行くの

に、季節が分からないと動けないし。

「??そうだ、誰か時計の材料に、なつてくれないか?」

トーベルさんは、リック、ニック、マックの三人を次々に見ました。

小さなマックが、恐くてしゃつくりを始めます。

「と...、と...、時計の、材料って...、血を抜かれるってこと?」

お兄ちゃんのリックが、意を決して質問しました。

トーベルさんはこっくり頷きました。

「君達は小さいから、小さな時計しか作れないけど、それでも無いよりはいいからね」

「死んじゃうの...?」

二番目のニックが聞きました。

「ああ、そうだよ。でも悲しむ事は無い。血を抜かれた妖精は、壊れるまでは時計になつ

てずっと生きていられる。まあ、話したり動いたり出来ないけどね。それに、大好きな

お菓子も食べられないし、二度とお母さんの顔も見られない。でも...」

そこで、マックがついに泣き出しました。リックが慌てて弟を抱きかかえます。

「マック、マック」

わあわあと声を上げて泣く子ねずみに、トーベルさんは少し困った顔をしました。

「おっ、おっ、お母さんに会えないっ! お母さんっ!」

泣きながら、お母さんを繰り返すマックを見ていて、ハナハナは決心しました。

その2 銀の水時計(5)

「私が時計になりますっ。私なら、リック達より大きいから、少し大きな時計が出来るでしょ。だから…」

子ねずみ達にはお母さんがいます。マーマおばさんは、大切な大切な子供達の誰一人、時計なんかにしたくない筈。

子ねずみ兄弟だって、お母さんに二度と会えないなんてとっても嫌で、悲しいんです。

けれど、ハナハナなら大丈夫。ハナハナにはお父さんもお母さんもいません。

育ててくれた大好きなお姉さんはいるけれど、リック達を失うマーマおばさんよりは、ミイミは悲しくないかも知れません。

うつん。本当はおんなじくらい悲しいかもしれないけれど。

ハナハナは真剣な表情でトーベルさんを見詰めました。

「お願いです。どうか、私を選んで下さい。トーベル先生っ」

「……参ったなあ」

トーベルさんが、苦笑いしながら金色の頭を掻いた時。

「子供達をあんまり怖がらせるからですわい。トーベル伯爵」

ドアの方から長老の声がしました。

ハナハナ達が振り向くと、熊の妖精のおじさんに手を引かれて、長老がこちらにやって来ました。

「ごきげんよう、パッセルベルの長老殿」

「伯爵もお元気そうで、何よりですわい。??とところで、お仕置きはそのくらいにして、

そろそろ子供達を安心させてやってくれませんかの?」

「…お仕置き？」

ハナハナは目を丸くしました。

と、トーベルさんが青い目を優しく細めて、ハナハナの白い頭をふわり、と撫でました。

「だって君達と来たら、僕の書斎に勝手に入って遊んでいたからね」

「……ごめんなさい」

少し泣き止んだマツクが、小さな声で謝りました。

「あの、お仕置きって…？」

おずおずと聞いたハナハナに、長老がほっほつと笑いました。

「その水時計の水は、ここの泉の水じゃよ」

「え…？ 妖精の血じゃないの？」

「あつはつは」

トーベルさんが、それまでと打って変わって朗らかに笑いました。

「ごめんごめん。そんなものは使ってないよ。長老のおっしゃる通り、水時計の水にはこ

この泉の水と、少しトネリコの木の皮のエキスを入るんだ。すぐに出て来るから、後で見

せてあげるよ」

聞いた途端、子ねずみ三兄弟が揃って大きく溜め息を付きました。そのままずると

脱力して床に座り込んだ三人に、長老とトーベルさん、それに熊のおじさんはもう一度大

笑いしました。

その後、ハナハナと子ねずみ達はトーベルさんと長老と一緒に、泉へ行きました。

トーベルさんは泉の縁に立つと、上着の内ポケットから細い小枝を一本出しました。

右手に小枝を持つと、トーベルさんは屈んで左手で水を掬い、そ

つと小枝に掛けて行きます。

「何をしているの？」

尋ねたハナハナに、長老は「しい」と口に人さし指を当てました。そして、小声で言いました。

「トーベル伯爵は、妖精の中でも一番身分の高い、ハイエルフなんじゃ。ハイエルフは色

んな魔法を操る事が出来る。あの水時計は、この世界中のあちこちに封印されている魔王

の黒い水を監視するための道具で、ハイエルフの魔法でしか作る事が出来ん」

「ふうん」

ハナハナが頷いた時、トーベルさんが立ち上がるました。たつぷり水を掛けた小枝に、

今度は外側のポケットから取り出した茶色い小瓶の中身を振り掛けながら、小さく呪文を唱えます。

すると、小枝がぱあつ、と光り出し、見る間に真ん中にくびれのある時計の形に変わりました。

完全に時計の形が出来上がると、光はすうっと消えました。

トーベルさんはハナハナ達を振り向くと、

「出来たよ」と笑いました。

その時。ぱしゃん、と水面が波打って、泉からマーフが顔を出しました。

「あ、マーフ」

水の妖精は、ハナハナの呼び掛けにこちらへ来掛かりましたが、トーベルさんを見付け

ると、「あ」と声を上げて再び水の底へと姿を隠してしまいました。「あれ、どうしたんだろ、マーフ」

「今は、この泉の妖精だね？」

その2 銀の水時計(6)

マーフがこっちへ来なかったので、何でだろうと首を捻ったりツクに、トーベルさんが

聞きました。

「うん」

「あれは、黒い妖精だね」

「でもつ、もう悪い妖精じゃないんですつ。ね、長老さま？」

せつかく泉に落ち着いたのに、またマーフが追い出されるような事になつては大変と、

ハナハナは慌てて長老に助けを求めます。

でも長老は、ただにっこりと笑っただけでした。

トーベルさんが言いました。

「でも、彼はもう魔王の影響は全く受けていないようだね。……やはりここには『光の子』

が居るからかな。

泉はよくなつたね。やっと命が入ったようだ」

「え……？」

何の事が分からずに、ハナハナはもう一度長老を見ました。

「マーフが来て、この泉の水は更に良くなった、という事じゃ。トーベル伯爵の折り紙が

ついたのだから、マーフにとっても良いことじゃな」

「そーなんだ？」

子ねずみ三兄弟も、何だか意味が分からなくてみんなで顔を見合わせます。

ハナハナは、分かったような分からないような。でも悪い事では無さそうなので、取り

あえず「うん」と頷きました。

トーベルさんは出来たばかりの水時計を子供達に見せてくれまし

た。

リック、ニック、マックは、今度は絶対落とさないようにと、そうつと持ちながら三人仲良く眺めていました。

帰り着いた時には、もう西の空が茜色になっていました。

お土産話をする約束していたモモに、ハナハナは今日の出来事を話して聞かせました。

すると。

「ずっるーいつ！ モモもトーベルさんに会いたかったーっ！ 銀の水時計見たかったー」

っ！ トーベルさんのお部屋に入りたかったーっ！」

次には絶対一緒に行く、と言い張るモモに、ハナハナはちょっと困ってしまいました。

「でも本当は入っちゃいけないお部屋だったのよ。だからもう二度とは行かないよ」

「いやーっ、モモも今度行くーっ！」

あんまり駄々をこねるので、モモは最後にはミイミに怒られてしまいました。

ベソを掻いたモモを慰めながら、ハナハナは気になる言葉を思い出していました。

?? 『光の子』って、何だろう？

前にも長老にそう言われました。

『光の子』。

言葉からいい事を言われているのだろうと、ハナハナは勝手に思っていました。が、本当にそうなのでしょうか？

お姉さんは、その事知っているのかな？

今度ちゃんと聞いてみよう、ハナハナは泣き疲れて自分に寄り掛かり、半分寝こけているモモの頭を撫でながら、決心しました。

その2 銀の水時計 完

その2 銀の水時計(6) (後書き)

「その2 銀の水時計」は、これで終わりです。

いかがでしたでしょうか？

今回初登場したトーベルさんは、また別のお話でも登場します。

次は「その3 命の水」です。

大工の頭領、シマリスの妖精ボツへさんは、隣村へ嫁ぐ娘さんのことと、跡継ぎのことで、現在頭を悩ましています。

そんなボツへさんに、一大事が……！

どうぞ、ご期待下さい。

その3 命の水(1)

シマリスの妖精ボツへさんの仕事は大工さんです。

ボツへさんのお父さんも、そのお父さんも大工さんで、パッセルベルの村で、家を作つ

たり橋を作つたりして来ました。

でもボツへさんには跡継ぎがいません。子供は娘さんが一人だけ。ミントさんというそ

の娘さんは、近々隣村の同じシマリスの妖精の若者と結婚します。

嬉しい事の筈なのですが、ここのところボツへさんは何故か元気がありません。

長老の家はトネリコの木が一番上、三つ又になった枝の根元に作られています。建つて

から百年にはなるかもしれない家は、ここところよく雨漏りがしていました。

「こりやもう寿命かのう」

雨が上がった翌日。長老は孫娘のニーニヤを呼んで言いました。

「ボツへさんに、手が空いたら見に来てくれと、言いに行ってくるか」

ニーニヤが行くと、ボツへさんはすぐに長老の家へとやって来ました。屋根へ上がり、

様子を見ました。

「どうだね？」

「こりやあ、屋根の板だけじゃあなくて、屋根裏の支えの木もダメですわ」

「そうか。じゃあついでに屋根裏も直して貰おうかのう」

ボツへさんは早速、仲間の大工さん達と家の中と外を調べて回り

ます。

その結果。

「長老さま、申し上げにくいんですが…」

「なんじゃね？」

「床下の支えも腐っていました」

長老は翌日、引つ越しすることになりました。

話を聞いた村の人達が、大勢手伝いにやって来ました。

もちろん、ハナハナもミイミと一緒に手伝いに来ました。

「おおハナハナ。手伝いに来てくれたのか。ありがとう」

食器を片付けるニーニヤを手伝っていたハナハナに、長老が言いました。

「はい。お引越し大変ですね」

「うむ。暫くニーニヤの両親の、わしの息子の家に同居じゃよ」

「空き部屋があるから」と、ニーニヤは嬉しそうに言いました。

ニーニヤの家は、北の枝の、上から二番目です。大きな家で、お手伝いさんも来ています。

大好きなおじいさんと少しの間でも一緒に暮らせるのでうきうきしているニーニヤに、

ハナハナも嬉しくなつてにつこり笑いました。

その間にも、村の人達はせっせと仕事をこなします。

しばらくすると、南の大枝の旅芸一座の団員さん達も手伝いに来ました。

「毎年、ここの人達にはお世話になっているからね」

トーベルさんも白いシャツを腕まくりをして、重い木箱をひよいと担ぎ上げました。

そうやって女の人達が荷造りした品物を、男達がどんどん運び出します。遅れて手伝

いに来たミイミのどんな様ティーヴも、団員さんや村のみんなと一緒に木箱を担いで下の

枝へと降りて行きました。

引越しは、みんなの手伝いで半日で終わりました。

お昼を少し過ぎた頃、マーマおばさんが子ねずみ達を手伝わせて、サンドイッチとお茶

を運んで来ました。

「さあさあ、みんなお腹が空いたでしょ。食べて下さいな」

「さて、これからが大変だね、ボツへさん」

木こりの木ねずみルーラさんが、隣に座ったボツへさんに言いました。

「解体して、使える柱は残そうと思うんだがね」

「そうかい。なら新しいのを何本切り出すか、早いとこ調べてしまおう」

ハナハナは、そんな話をしているおじさん達に、紅茶のお代わりを注いで上げました。

と、ルーラさんがボツへさんに言いました。

「ときに、ボツへさん、跡継ぎはどうなさるんだい？」

ボツへさんはちょっと困った顔になって、ふうむ、と唸りました。

「隣村の親戚の子を養子にしないかと言われてるんだが……。どうも、本人が大工は嫌だ

と言っていてね。どうしたもんかと皆で思案しているよ」

「婿どのは、どうなんだい？」

「トッドは絨毯織りの仕事をしている。筋はいいようだが、今は兄貴のところで作られて

いるんだ。……あの子に大工は、どうだかね……」

「そうかい」

ルーラさんはティーカップを持ち上げて、一口お茶を飲みました。そして、側で話を聞

いていたハナハナに、

「難しいね」

と笑いました。

引っ越しも無事に終わり、これから家は建て直します。

その3 命の水(2)

ボツへさんは仲間の大工さん達と、家の解体に掛かりました。トネリコの木の皮で葺い

た屋根を取り外し、壁も床も剥がします。

ばりばりべりべりという凄いい音に、興味津々の子供達が現場を見にやって来ます。

「危ないから、寄っちゃダメだぞ」

大工さん達は、下の枝から面白そうに見ている子供達に注意しました。

「楽しそうだね」

ハナハナと一緒に見ていた木ねずみのリックが言いました。

「僕、大きくなったら大工さんになろうかな」

「えっ？ 木ねずみさんって、大工になれるの？」

ニーニヤが不審そうにリックを見ます。

「ボツへさんも、他の大工さんも、みんなシマリスさんだよ？」

「そーだね……。ダメなのかなあ？」

「ダメなんじゃない？」

リックの弟ニックが言います。

「ボツへさんに聞いてみれば？」

ハナハナが言ったのに、みんなは「そうだよね」と頷きました。

何日かして解体は終わり、ボツへさんは使える柱と使えない柱を

見分けて、ルーラさん

と相談したようです。

朝。

ハナハナがいつものようにマーフの泉に水を汲みに行くと、近くの森から斧を使う音が

していました。

「大変だね、長老さまのお家の修理」

マーフは、いつも朝座っている岩に腰掛けて、ハナハナに言いました。

「うん」

「今日はルーラさん達が、柱の木を切ってるみたいだね」

「朝早くからやってるの？」

「そうみたいだよ」

マーフは微笑みました。

「みんながいい家を作ろうとしているね。楽しみだね」

「うんっ」

どんな家が出来るんだろう？

マーフと話して、何だかハナハナは自分の家の事のようにわくわくして来ました。

そして何日か経って。

一度壊された長老の家は、柱と屋根の梁が出来て、ちょっと家らしくなって来ました。

その日、屋根の板を張る仕事をしていたボツへさんの所に、ミントさんのお嬢さんがやって来ました。

トッドさんというお嬢さんは、ミントさんがその日向こうの親戚にご挨拶に行くのを迎えて来たのです。

出かける前にボツへさんに挨拶して行こうと、トッドさんはミントさんと連れ立って長老の家へやって来ました。

「お父さん、これから行って来ます」

屋根の上のボツへさんに、ミントさんが言いました。

飽きもせずに大工さんの働くのを見に来たハナハナは、ミントさんがいつもと違った綺

麗なピンクのドレスを着ているのを、驚いて眺めていました。

「そそのの無いようにな」

「はい」

ミントさんはぺこりと頭を下げると、トッドさんと一緒に下へと降りて行きます。

娘の姿が小さくなるのを、ボツへさんは屋根から首を伸ばして見ていました。

ハナハナも、ボツへさんが仕事の手を止めて首だけミントさんを追い掛けるのを見ていました。

と、その時。

ボツへさんがバランスを崩しました。あっと言う間に、ころころと屋根を転がって、下へ落ちます。

長老の家は三叉にあって、入り口の反対側はもう枝がありません。すぐ下の枝までは十数メートル。

「ボツへさんっ！」

仲間の大工さん達も、ハナハナ達も慌てて下の枝へと走りました。ボツへさんは、すぐ下の枝も通過して、更にその下の枝で止まっていました。

ハナハナ達子供が追い付くと、大人達は右往左往していました。

「いけねえっ、全身を強く打ってるっ」

「誰か長老を呼んで来てくれっ！」

どうなったのか、子供達が側へ行こうとすると、

「子供は来るんじゃないっ！」

若い大工さんに怒られました。

仕方なく、ハナハナ達は近くの枝に上がって様子を眺めました。高い枝の上から見ると、大人達がボツへさんを真ん中に、輪になつて集まっています。

その3 命の水(3)

「ボツへさん、大丈夫かなあ」

「ずいぶん、落ちたもんねえ」

「……あ、ミントさん達戻って来た」

リックが指差したのでそちらを見ると、ミントさんとトッドさんが急いで上がって来る
ところでした。

「おいっ、娘さんが来たぞっ」

「通してやれっ！」

「行ってみよう」

ハナハナは思い切って、現場の枝に降りました。

「寄っっちゃいけないって、言われたよっ」

「大丈夫っ」

ハナハナと子ねずみ三人、それとモモと近所の子供達は、ミントさん達のために大人が

開けた隙間からすると中へ潜り込みました。

人の輪の中で、ボツへさんは倒れていました。

「お父さんっ！」

目を瞑ったまま動かないボツへさんの側に、ミントさんは泣きながら座り込みました。

「どうしてっ！」

肩を掴んで揺するうとしたミントさんを、仲間の大工さんが止めます。

「揺すっちゃだめだっ。今長老を呼びにやってるから」

ミントさんは手を放しました。そして、顔を両手で覆います。

「どうして、足なんか滑らせたの？ いつもなら大丈夫なのに……」

「そりゃ嬢ちゃん、親方あ、あんたの嫁入りが気になってたのさ。
早くにおかみさんを亡

くしてる親方は、人一倍、嬢ちゃん大事だからよ。無事に婿さんの家族に気に入られるか

どうか、片親だって、いじめられやしないか、心配でしょうがなかったんだよ」

年輩のシマリスの大工さんが言いました。

「だから、ここんとこずつと心ここにあらず、でさ。ときどきばーつと手を止めたりして

たもんよなあ」

ミントさんが、ボツへさんの身体に縋ります。

「そんなことつ。大丈夫に決まってるのに……」

「分かつてるんだよ。それでも気になるのが親つてもんだ」

「そうそう。幾つになつても子供は子供。嫁に行く、婿になるつても、嬉しい反面、心配

なんだよ、親つて奴は」

そういうもんなんだ、と、大人に混じつて聞きながらハナハナは思いました。

お嫁に行つて幸せになれるのか、そういう心配を、お父さんやお母さんはするものなんだ。

羨ましいな、と思いました。

だって、ハナハナにはお父さんお母さんはいません。

もし居たら、ハナハナがお嫁に行く時、ボツへさんみたいに心配するのかな。

ハナハナがそんな事を考えていた時。

「おおいつ、長老さまがおいでになつたぞ〜っ！」

上の枝から声がしました。

見上げると、若い逞しい猿の妖精の大工さんが、長老をおんぶして掛け降りて来ます。

その後ろに、トーベルさんが付いて来ます。

あつという間に、大工さんとトーベルさんはみんなの居る枝へ

と降りて来ました。

大工さんの背から降りた長老は、急いで輪の中へとやって来ました。

「ボツへさんが足を滑らしたとなっ」

「はい。上の三叉枝から、ここまでまっ逆さまに」

長老はミントさん達の反対側へ行き、屈んでボツへさんの様子を看ます。動かない手を

取って調べ、胸に耳を当てて心臓の音を確認していました。

「うつむ。まだ生きておる」

「ほんとですかっ！」

みんなの顔がぱっと明るくなりました。

しかし、長老は難しい顔で先を続けました。

「じゃが、このままでは危険じゃ。一刻も早くしかるべき処置をせんと」

「『王の葉』は、今の季節じゃ生えてないしなあ」

大工さんが残念そうに言いました。

「『命の水』があれば一発で解決なんだけどね」

トーベルさんの言葉に、長老が、

「おお、そうじゃった」と顔を上げました。

「伯爵、お持ちではないのかな？」

「残念ながら。去年うちの団員が興行中に大怪我をして、それで使い切ってしまったので

すよ。後は何処かで分けて貰うしか……」

「それは、何処にあるのですかっ？」

訊いたのは、トッドさんでした。

「取りに行く必要があるのなら、僕が行きますっ！ 教えて下さい

長老さまっ！」

「私も行きますっ！」

ミントさんも言いました。

長老は、二人の必死な顔を交互に見ました。

「うむ……。隣村の村長が持つておつたのだが、この間話した時には、今は切らしてしまつていふと言つとつたな。あとは、あるとすれば、山向こつゝの緑龍平野の真ん中の街リーリスの長老のところじゃ。……じゃが、あそこから分けて貰つても戻るまでは、ボツへさん保たんじやろつ」

その3 命の水(4)

「じゃあ……」

トッドさんが、言葉を詰まらせます。ミントさんが再び顔を手で覆いました。

「何とかなんないのかよつ、長老さまっ」

「お願いですつ、他の方法は無いのですかつ？」

それまで輪の中で黙って様子を見ていたミイミが言いました。
ハナハナも釣られて、

「他のお薬は無いんですか？」

「そうじゃのう……」

長老は考え込みました。その時。

「あのう」

人の輪の外から、マーフの声がしました。

みんなが一斉に振り向きます。

と、枝の上十センチ程の所に、マーフが浮いていました。

「長老さま、『命の水』なら、多分私は作れます」

「なんとっ！」

長老は驚いて細い目を大きく開けました。

「あれは上級の魔導師でも難しい薬じゃよ。確かに、水の妖精の中でも魔力の強い者は作れるという話じゃが……。あんたは、その……」

「長老さまがご心配になるのも、分かります。私は、何と言っても過去は魔王の手下です。

一度魔の洗礼を受けた者が、聖なる魔法で作る『命の水』を作れるのか。……正直申し上げ

れば、私にも分かりません。でも、一刻を争うのなら、全力を賭してやります」

「長老殿」

トーベルさんが言いました。

「彼に任せてみませんか？ 私が見るところ、彼は元は水の妖精の上位者のようです。魔

王の魔力から離れて久しいでしょうし、力が戻っていれば難無く作れるでしょう」

長老は目を閉じてしばらく考えた後に、言いました。

「分かった。マーフに頼もう」

マーフはぱつと顔を輝かせて、

「ありがとうございます」

と深々と頭を下げました。

「では早速作ります。ハナハナとリック、ニック、マック、それに他の子供達、手伝ってくれますか？」

「え？ 私達が？」

ハナハナはびっくりしました。ボツへさんを治す大切な薬を作るのに、自分達が手伝えるなんて。

「お願いします」

マーフはにつこり笑いました。

ハナハナは緊張とわくわくが一緒くたになった気分で、「はい」と答えました。

ハナハナ達は、泉に戻ったマーフを追って下へ駆け降りました。

その後を、大人達の何人かが続けました。

泉に行くと、マーフは泉の真ん中にふわり、と浮いていました。

「ハナハナ、泉に手を入れていて下さい。他の子供達も、ハナハナと一緒に泉に手を入れて下さい」

「こお？」

ハナハナは屈んでちゃぽん、と水に手を浸けました。子ねずみ三人とモモ、近所の子供達もそれに習います。

みんなが手を入れたのを見届けると、マーフは目を閉じて小さな声で呪文を唱え始めました。

するとすぐに、マーフの身体が真っ白な眩い光に包まれました。きらきら輝く白い光はマーフの身体をくるくると回りながら、下の泉に吸い込まれて行きます。

やがて、マーフの身体を覆っていた光が全部水の方へと移りました。

光は水の中で固まって、きらきらと輝いています。

マーフは目を開けて光の様子を確かめると、素早く右手の人さし指を下へ向けました。

「ハナハナ、両手で水を掬って下さい」

「……こお？」

言われた通り、ハナハナは水を手で掬いました。すると、手の中の水が光り始めました。

「あ……」

「それが、『命の水』です」

「えっ、でもこれどうやって上まで持つていけば……？」

手で掬った水では、ボツへさんが倒れている上の枝まで運ぶ間に零れて無くなってしまう。

と、見ていた大人の中からマーマおばさんが言いました。

「私、お鍋を取って来ますっ」

「それじゃダメよっ」

その3 命の水(5)

他の女の人が言いました。

「コップがいいわっ。私の家は近くだから、コップ、持って来るわねっ」

「いえ」

マーフが首を振りました。

「何も要りません。ハナハナ、手の中の水を、ボツへさんに届けと祈りながら上に放り投げて下さい」

「えっ？ 放っちゃっていいの？」

「はい。トーベルさんが受け取ってくれます」

マーフが強く言うので、ハナハナは言われた通りにしようと思いましたが。

ボツへさんに届け。

そう強く念じながら、ハナハナは両手を勢い良く上へ振りまわすと。

水が、まるで生きているもののように細い糸になって、上へと昇って行きます。

ハナハナ達は後で聞いたのですが、上へと昇った『命の水』は、トーベルさんが魔法で

作った小瓶に収め、すぐにボツへさんに振り掛けました。

ボツへさんは、『命の水』を振り掛けられると、たちまち意識を取り戻しました。

ハナハナ達が急いで上上がった時には、ミントさんと抱き合っていて泣いていました。

「おとうさんっ！ よかったっ！」

「おお、ミントっ」

喜ぶボツへさん父子の側に立っていたトッドさんが、不意に大き

な声で言いました。

「お父さんっ！ 僕を弟子にして下さいっ！」

村の人も、長老も、旅芸の団員さん達も、みんなトッドさんを見ました。

「絨毯織りの仕事は、嫌いじゃありません。子供の頃からやっていて……。でも兄さんよ

りも上手くはなれないんです。だから、僕は兄さんとは違う仕事をずっとしたかった。

お願いです。お父さんの仕事を、教えて下さいっ！」

深々と頭を下げるトッドさんに、ボツへさんは言いました。

「うちに婿に来るといいう事になるが、それでいいんだね？」

「はいっ」

トッドさんは、きっぱり返事をしました。

ボツへさんはにつこり笑うと、

「分かった。君を弟子にしよう。ただし、わしは厳しいぞ。でも自分で言い出したんだか

ら、逃げ出すのは許さんからな」

「はいっ、よろしく願いますっ」

もう一度頭を下げたトッドさんに、周りで様子を見ていた人達からわつと拍手が送られました。

ました。

「よかったねえっ、ボツへさんっ！」

「いい跡継ぎが出来たじゃねえかつ」

「ミントちゃんも、お父さんと離れなくてよくなつてっ」

はい、と頷いたミントさんは、またうつすらと泣いていました。

嬉し泣きするボツへさん一家に、ハナハナもついもらい泣きしてしまいました。

トッドさんは大工見習いとしてボツへさんの所に弟子入りしました。

最初の仕事は、もちろん長老の家造りです。

木を運んだり、削ったり、慣れない仕事ですがトッドさんは大工仲間のみんなに励まされ

て一生懸命働いています。

ボツへさんは、そんなトッドさんを本当の息子のように見守っています。

ハナハナ達は、相変わらず大工さんの働くのが面白くて現場に行っていました。

近くの細い枝に並んで座りながら、リックが溜め息をつきました。
「いいなあ、トッドさん。やっぱり僕も大工さんになりたいなあ」
羨ましそうに足をぶらぶらさせて言うので、ハナハナは言いました。

「だから、木ねずみさんは大工さんになれるの？」

「……わかんない」

「やっぱりダメなんじゃないの？」

モモに言われて、リックはしょぼんと下を向きました。

その様子があんまり情けなかったので、逆にハナハナは可笑しくなって吹き出してしまいました。

「何が可笑しいんだよっ」

「あはは。ごめんごめん。でも、本当にダメかどうか分からないん

なら、思い切ってボツ

へさんに聞いてみたら？」

「あ、そっか」

何で今まで気が付かなかったんだろうと、リックは自分の頭をこ

つんと叩くと、小枝か

ら飛び下りました。

「ボツへおじさ〜ん」

一目散に建てかけの長老の家へ駆け寄って行きます。

その後ろ姿を見ながら、ハナハナは、

「夢が適うといいね」

と心から呟きました。

その3 命の水 完

その3 命の水(5) (後書き)

いかかでしたでしょうか？

次は「その4 キツパとルウ」です。

ハナハナと同じ、子猫の妖精キツパは、お母さんが病気のために、遊びたいのも我慢して働いています。

働き先は、薬師の、妖魔のモルガナ婆さんのところです。

そこで、キツパは父親について重大なことを教えてもらいました……

小さな子供たちのお話です。ご期待下さい。

その4 キツパとルウ(1)

北の中枝に、キツパとルウという、猫の妖精の兄弟が住んでいます。

お兄さんのキツパは今年で10歳。ハナハナと同じ年です。弟のルウは8歳。

二人はお母さんの二ニイと一緒に暮らしていました。

キツパとルウも、他の男の子達と一緒に遊びに行きたい年頃です。でも二人はそんなことをしてられない事情がありました。

お母さんの二ニイは病気がちで、ずっと寝たり起きたりです。なので、二人は家の用事を

すべてやらなければなりません。

それに、二人にはお父さんがいません。

二ニイは、お父さんのキールについて子供達には、

「お父さんは遠い国へお仕事に出掛けているの」と教えています。

でも、キツパは本当の事を知っています。

キールは、魔王が倒れた後もあちこちで悪い事をしていた魔王の配下の妖魔に、殺されたのです。

それを教えてくれたのは、西の下枝に住んでいる、蛇の妖魔モルガナでした。

魔王が力を振るっていた時代でも、妖魔が全てその配下になった訳ではありませんでした。モルガナ婆さんの種族は何故か魔王には従わず、各地の村や集落を他の妖精達と守りました。

そういった意味ではいい人なのですが、やっぱり妖魔は妖魔、他

の妖精達のように優しくはありません。

皮肉屋で偏屈なモルガナ婆さんは、あまり村の人達から好かれてはいません。

でも大変腕のいい薬師なので、村にはなくてはならない人です。

キツパがモルガナ婆さんからお父さんの話を聞いたのは、去年の春でした。

お母さんが働けないので、兄弟はあちこちでお手伝いの仕事を貰い、家計の足しにしています。

モルガナ婆さんは二ニイの主治医でもあり、お手伝いは薬代を割り引いてもらっている分でもありました。

婆さんは結構人使いが荒く、その時は弟のルウは薬を煮込む鍋を掻き回す仕事、キツパ

は婆さんに付いて谷底の荒れ地へ香草を取りに行く仕事を命じられました。

谷底の荒れ地とは、パッセルベルと隣村のパッセルトーンの丁度中間にある場所です。

パッセルベルからは約2キロ、ちょっと遠いので、子供達だけで来たりはしません。

荒れ地は、名前の通り荒れた土地で、周囲は森の木が密生しているのに、何故かそこだけには生えていません。

まるで円形脱毛症のような場所です。でもそれだけで、恐いところではありません。

キツパは荒れ地へ来るのは、その時が初めてでした。

荒れ地の草は皆背が低く、中には春半ばだというのに枯れている

ような、茶色の草もあります。

大きな石がごろごろしていて、その間から香草の黄色の花が顔を出していました。

上半身は人間の姿、下半身は大蛇というモルガナ婆さんは、荒地に着くと、

「やれやれ」と、寸胴の腰に手を当てて溜め息をつきました。

「今時分は、ここにしか摘める香草は生えてないからね、仕方ないんだけど。……ここは

あんまり来たい場所じゃないね」

いつもは、聞き返すと怒鳴られるので、キツパはモルガナ婆さんの独り言は無視しています。

でも、この時の独り言は、何故かとっても気になりました。

「……どうして？」

怒鳴られるの覚悟で尋ねた子猫に、婆さんは予想に反して静かな声で言いました。

「ここは昔。パッセルベルの若者と、魔王の手下の残党だった、一つ目の巨人の妖魔が戦

った場所さ。あんたのお父さんのキールも勇敢に戦ったんだよ。…

…死んじまったがね」

「???え? 嘘だよ。お母さんはお父さんは遠い国に働きに行ってるって…」

「それは、おまえ達を安心させるためさ。あたしは目の前でキールがここで巨人に殺られるのを見てるんだ。??信じないかえ?」

モルガナ婆さんは、いい人ではありませんが嘘は付きません。

キツパはとてもシヨックでした。

お父さんは死んでいる。

病気のお母さんにその事を訊く事もできず、キツパはその後ずっ

と一人でその重大な事
実を抱え込んでいました。

そんな、大変な思いをしているキツパとルウですが、たまには普通の
子供と同じく1日
遊べる日もあります。

二人が好きな遊びは、ブランコ。
パッセルベルの子供達の好きな遊びは色々あります。
女の子は花摘みやままごと遊び、男の子は魚釣りや竹とんぼ、剣
士ごっこ。

でも、子供達みんなが一番好きなのは、ブランコです。

その4 キツパとルウ(2)

ブランコは南の大枝の反対側、北側の若い枝に作られています、地面からは何と5メートル以上。落ちたら大変です。

でも大丈夫。下はマーフの泉なので誰も怪我なんかしません。

ただ、晩秋から初春までは寒くて、泉の水が冷たく落ちると死んでしまう危険があるため、ブランコは取り外されています。

冬もやれたらいいのに、と子供達は言いますが、大人達は絶対に許可してはくれません。

久し振りに遊べる時間が出来たキツパとルウは、ブランコが無いのは分かっていますが、

北の若い枝付近に行ってみました。

と、そこに何と、誰かが掛けたブランコが残っています。

「このブランコ、村長の家の物置きにしまっただあるはずだよな？

誰が持つて来たんだ？」

「……今つて、やつちやいけないんだよね。兄ちゃん」

ルウは、さも乗ったそうな顔でブランコを見上げて言いました。

「うん……」

キツパも、乗りたいのを我慢してブランコを見上げます。

「でも、誰かが掛けて、乗ったんだよね？」

「兄ちゃん」と、ルウが、キツパの服の袖を引っ張りました。

弟だけでも乗せてやりたい。ふと、キツパは思いました。

泉の水は冷たいけれど、落ちなければ大丈夫じゃないのか？

うんと勢い良く漕がなければ、危険じゃないかもしれない。

そうだ、少し揺らさだけなら。

それに、今は喧嘩相手の木ねずみ兄弟も居ません。

両親のこともあり、ちょっとひねっていて態度の大きいキツパを、

リック達は嫌っていつも喧嘩を仕掛けます。

でもキツパの方が大きいので、殴り合いになるとどうしてもリック達は負けます。

だから、キツパの嫌な事をたくさん言っ、遊び場から追い出そうとするのです。

それに他の子供達も、貧しくていつも同じ格好をしているキツパ達をあまり好きではありませんでした。

自分達を嫌いな村の子達も、今ならブランコには近付かない。

そう考えて、キツパはルウに言いました。

「ちよつとだけ、乗ろうか？」

「え？ いいの？」

「大きく揺らさなければ、きっと大丈夫だ」

「うんっ！」

兄の言う事を素直に信じて、ルウは嬉しそうにブランコに飛び乗りました。

すこーしずつ漕いで、あまり揺れが大きくならないように。

「ルウ、楽しい？」

「うんっ！」

ぶらあんぶらあんと揺れるブランコの木の腰掛けの上に立って、ルウは笑顔でキツパに

答えました。

「兄ちゃんも乗ろうよっ！」

「うん、そうだな」

兄と二人乗りしようと、ルウが少し揺れる幅を小さくしようとしたりした時。

「あーっ！ ブランコ乗ってるっ、いけないんだっ！」

魚釣りを止めて上へ上がって来たリック達三兄弟が、彼等を見付けて言いました。

「長老さまや大人の人達が、あつたかくなるまで危ないからダメって言ってるのにつ」

「何でブランコ乗ってるんだよっ！」

ぶつぶつ怒る木ねずみ達に、キツパは後ろ頭の毛を逆立てて言い返します。

「うるせえなっ！ 俺ら乗りたいから乗ってるんだっ、つべこべ言うなっ！」

「なんだとっ！ 約束破りのくせして威張るなっ！」

リックが大きなキツパを睨み上げ、キツパは小さなリックを睨み下ろします。

どっちも引きません。

「ちびの癖につ、うるせえってんだっ！」

「嘘つきキツパっ！ 親無しのくせにつ！」

「おまえん家だつて父ちゃんいないじゃねえかつ！」

「俺んちの父ちゃんは緑龍平野の港町で働いてんだっ！ ちゃんと年に1回帰って来るっ。」

「おまえんちは全然、帰って来ないじゃないかつ！」

「きつと死んじやってるんだっ！」

「マックが兄を加勢して言った言葉に、キツパはぎくつとしました。
「な……、何でっ！ 死んでなんかねえよっ！ 俺の父ちゃんは死んでないっ！」

「だったら何で帰って来ないんだよっ？」

「やっぱり死んじやってるんだっ！」

ニックも囁し立てます。

「やーいつ、やっぱり親無しなんだっ！」
「違っって言ってんだろっ！」

キツパは真っ赤になつて怒りました。大きな拳で、リックに殴り掛かります。

すばしこいリックは、それをひょいと避けました。
後ろの若い枝に飛び乗ると、

「嘘つきキツパッ！ 父ちゃん死んでるのに生きてるっ」と嘘付いてるっ！」

その4 キツパとルウ(3)

「嘘つきっ、嘘つきっ！」

「おっ、俺はっ、嘘なんか、ついて、ないっ！」

キツパは泣きそうになりながら、怒鳴りました。
拳を振り回し、子ねずみ達を追いつきました。

小さなマツクが、逃げ回りながらぴょん、とブランコの片方の綱に飛び乗りました。

その途端。

降りずに様子を見ていたルウがバランスを崩し、あっという間に
ブランコから落ちました。

「きゃあっ！」

「ルウっ！」

普通、子猫の妖精は身軽なので、落っこちても怪我をしたりはしないものです。

でもルウは、不意の事だったので安全な体制が取れなかったでしょう。

小さな灰色の身体は、一度下の若い枝にぶつかり、それから泉に落ちました。

キツパは慌てて下へと駆け降りました。

その後を、真っ青になった木ねずみ兄弟が追います。

泉に降りて行くと、下から見ていたマーフが、丁度ルウを抱いて岸へ上げたところでした。

「ルウっ！」

抱き着こうとしたキツパを、マーフが止めます。

「ダメです。どうやら首の骨を折っています。動かしたら危ない」「どうすれば…」

泣きそうな顔でキツパが言った時。

「おや、こんなところで大勢で、何をしているんだえ？」

薬草を摘んで森から戻って来たモルガナ婆さんが、子供達に声を掛けました。

キツパは振り向くと、大声で言いました。

「ルウがつ！ ブランコから落ちて……っ！」

「おやおや」

婆さんは持っていた籐の籠をその場に下ろすと、くねくねと泉に近付いて来ました。

マーフにルウの身体を下へ降ろすように言うと、ゆっくりと様子をみました。

「ああこりゃ……。私の仕事じゃないね」

「どうしてっ！ だってお婆さんは薬師でしょうっ？」

モルガナ婆さんの冷たい言い方に、リックが思わず噛み付きました。

「治し方、知らないのっ？」

「バカお言いでないよ、子ねずみが」

婆さんはじろり、とリックを睨みました。金色の、縦虹彩の目に睨まれて、リックは背中

中がぞつとして黙りました。

「私は病を治すのが専門だ。こういった怪我は『命の水』が一番早い。長老がお持ちだろ

うから、さっさと呼んで来た方がいいね」

「ぽ、僕が行くっ」

マックが、ルウを落つことした責任を感じて言いました。

けれどモルガナ婆さんは、

「あんたが走ったって、遅いよ」

小馬鹿にしたように言うと、婆さんはすつと尻尾を上げました。

モルガナ婆さんの蛇の尻尾の先には、がらがらと音がする殻がついています。

それを、大きく振りました。

途端。耳をつんざくような音がして、子供達は思わず自分の耳を両手で被いました。

「これで、すぐに誰かが来るだろう。マーフ」

「はい」

「その子を自宅まで運んでやつとくれ。その方が長老の家から近い。それから子ねずみ共」

リック、ニック、マックはモルガナ婆さんを見ました。

「誰かが来たら、怪我人はニニイの家の子だと言いなさい。いいね？」

三人はこくこくと頷きました。

マーフは泉からふわりと浮き上がると、ルウを抱いたまま木の上まで飛んで行きました。

「ルウっ！」

キツパはマーフを追い掛けて、木を駆け上がって行きます。

「やれやれ、厄介な事に巻き込まれちゃったね」

モルガナ婆さんは文句を言いつつ、置いた箆を手にとると、キツパを追うようになく

ねと木を昇って行きました。

マーフはキツパ達の家に着くと、ニニイの世話をしに来ていたミイミに事情を話し急い

でベッドへルウを寝かせました。

「ニニイに言った方がいいわね」

ミイミがそう言って子供部屋を出て行こうとした時。

ニニイが部屋の扉を開けました。

「何かあったの？」

体調がすぐれず寝ていたニニイでしたが、ただ事ではない気配を察して起きて来たので

す。

その4 キツパとルウ(4)

「ニニイ、落ち着いて聞いてね。ルウが……」

ミイミがみなまで言い終わる前に、ニニイはベッドでぐったりしている我が子を見付けてしまいました。

「ルウっ、ルウっ！ 一体どうしたのっ？」

ニニイは半狂乱になってベッドに駆け寄ろうとします。

それを優しく押さえて、マーフは言いました。

「すぐに長老さまが来て下さいます。『命の水』があれば、大丈夫です」

「助かるのっ？ 助かるわよねっ？」

「はい」とマーフが言った時。

ドアが開いて、長老と村の人達がやって来ました。

ニニイは入って来た長老に縋って泣きました。

「ああ、どうかこの子を助けて下さいっ！ お願いしますっ！」

「うむ、分かっておるよ」

長老はニニイの肩をぽんぽんと叩くと、ルウの寝ているベッドへと向かいました。

そして、上着のポケットに入れた小瓶を取り出し、一滴、二滴、ルウの額に振り掛けます。

と。

それまで真っ青だったルウの顔色が、みるみるバラ色に変わりました。

長老は顔色の良くなったルウの頬に手を当てて、ふむ、と唸りました。

「怪我は、もう大丈夫じゃ。じゃが??」

「ルウっ！」

長老が先を話そうとした時、キツパが部屋の中に飛び込んで来ました。

ベッドに駆け寄ると、弟を覗き込みます。

「母さんっ、ルウはっ？」

「大丈夫よ、でも今長老さまが……」

キツパは、傍らの長老を睨み上げました。

「ルウは、もう大丈夫なんですねっ？」

「うむ。怪我は今、『命の水』で治したがの。ただ……」

「ただ？」

「落ちたショックじゃろう。眠り病になったようじゃ」

「眠り、病」

それは、子供の妖精にたまに起こる病気です。何か強いショックを受けた時、びっくり

した魂が身体の奥に小さく丸まって引っ込んでしまい、そのために身体が起きなくなってしまう。

ルウは、普通猫の妖精なら高いところから落ちても大丈夫なのですが、自分が予期しない格好で、しかも予想外の場所に枝があってそれにぶつかってしまったので、魂がびっくりしてしまったようです。

眠り病と聞いて、ニニイはふらふらとルウのベッドへと寄りました。

まるで幽霊のような様子で、ぼうつと息子を見下ろしています。

「ニニイ」心配したミイミが、彼女の寝巻きの肩にそっとカーディガンを掛けました。

「もう、目覚めないの？」

ニニイは呟きました。

「ルウはもう、治らないの？ …… 治す方法は無いんですか？」

一変して、ニニイはきつと長老を睨みました。

「長老さまっ！ 教えて下さいっ！ ルウが助かるなら私、どんなことでも致しますっ！」

「ニニイっ」

「母さんっ、無茶だよっ。母さんだっって病氣じゃないかっ！」

「そうよニニイ。無茶をしたらいけないわっ。まずあなたが病氣を治さなければ」

「そんなんっ！ でもルウがっ！」

「助かる方法はあるよ？」

「噎れた声が、その時玄関の方から聞こえて来ました。

中には入らず玄関から様子を窺っていた村人達を押し分けて入って来たのは、モルガナ

婆さんでした。

婆さんは、驚いて見ているキツパ達をひと渡り見回すと、どこにいしょ、と手近の椅子に腰掛けました。

「眠り病は、身体の芯に魂が引っ込みまう病氣だ。だから呼び戻してやれば治るのさ」

「呼び戻し……」

ニニイが呟きます。

それを聞いた長老が、はっとしてニニイを見ました。

「いかんよ、ニニイ。その身体で『呼び戻し』の術など。無茶すぎるぞい」

それを聞いて、ミイミもはっとしました。

「ダメよニニイっ！ あの術は大変に体力を使うわ。今のあなたには無理よっ！」

「……でも、それしか無いのなら……」

ニニイは決心した表情でルウを見下ろします。

その肩を、マーフが掴みました。

その4 キツパとルウ(5)

「いけません。みなさんが心配しているのにつ」

「やらせておやり」

モルガナ婆さんが言いました。

「いいんだよ、やらせておやり。それが、二ニイへのはなむけつてもんだ」

「どうしてそんなことをっ！」

ミイミはきつ、とモルガナ婆さんを睨みました。

「はなむけなんてっ。まるで二ニイが今にも……」

「あたしはねえ、二ニイの主治医として言ってるんだ。この人はもう長くない。自分でも知ってるんだよ」

キツパは驚いて母親を見上げます。

二ニイは長男の顔を、微笑んで見返し頷きました。

「母さん……っ！」

「……ごめんね、キツパ。お母さん、おまえ達に何にもしてやれなかった。でも……。だからせめて、ルウだけは……」

「母さんっ！ 嫌だよっ！ 死んじゃ嫌だっ！」

「そうよ二ニイっ！ いくら魔の毒に冒されていても、まだ二ニイが死ぬなんて……っ！」

「魔の毒って？」

キツパは、不安そうにミイミに聞き返しました。

ミイミは、しまったという表情でキツパを見、それから長老を見ました。

「……魔の毒とは、魔王の武器全てに塗られておった毒じゃ。9年前このパッセルベルを襲った一つ目の巨人が持っていた槍が、魔王から貰ったものだった

のじゃ」

「あんたの父さんが、その時の戦いで死んだっていう話を、前に聞かせたね？」

モルガナ婆さんがいました。

キツパは黙って頷きました。その事で、キツパはずっと悩んでいたのですから。

「一つ目の巨人と戦った若者達の中に、実はニニイも居たんだ。魔法で随分勇敢に戦って

たんだが、ひよいとした拍子に、槍の先で肩を突かれてしまった。

それで転んだ所へ、更

に巨人が襲って来てね。その時、ニニイを身を呈して庇ったのが、旦那のキールだった。

キールは巨人とニニイの間に飛び込んだ。それで、槍がキールの腹に刺さってしまったんだ」

「そんな……」

聞いているうちに涙が溢れてきたキツパは、首を振って下を向きました。

その肩に、ニニイがそつと手を置きます。

「父さんは、立派な戦士だったの。母さんがあの時、油断さえしなければ……。ごめんね、

キツパ」

「母さん……」

そんなことない、と言い掛けた言葉は、でも涙に詰まって出て来ません。

ニニイはもう一度息子に優しい目で頷くと、ルウのベッドへふらふらと寄りました。

「父さんの最後の言葉はね、キツパとルウを頼む、だったの。だから、私は、命に替えても、ルウを助ける」

ニニイは静かに跪くと、両手の指をを組んで祈るように目を閉じました。

と、ニニイの身体から真つ白な光が溢れ出しました。光はきらきら輝きながら、ルウの方へと流れて行きます。

見る間に、ニニイの光がルウを包みました。

「母さんっ!」

キツパがニニイの方へ行こうと身を乗り出します。それを、マーフがはつしと抱き止めました。

きらきら輝く光は、やがてすうっと消えて行きました。
その途端。

ニニイがぱたりと床に倒れました。

「ニニイっ!」

「母さんっ!」

キツパとミイミ、それに長老が側に寄りました。長老が、ニニイの身体を静かに抱き上げました。

「命を、使い切ってしまった。」

キツパは呆然とニニイを見ました。ミイミは、泣き出しました。
その時。

「うーん……」

ベッドで、ルウが唸りました。キツパは弾かれたように弟の顔を見ました。

ルウは、うつすら目を開けると、兄をぼんやり見上げて言いました。

「兄ちゃん?」

ルウは、母の最後の命を受け取って、目を覚ましましたでした。

そのいきさつをハナハナが聞いたのは、ミイミが帰って来てからでした。

ミイミが手伝いに出ていたので、ハナハナはその日は一日モモ達のお守でした。

「そっか。大変だったね、キツパ」

夕食の片付けを手伝いながら、ハナハナはちよつと涙ぐみました。

「そうね……。それで、明日はニイのお葬式なのよ。ハナハナもお手伝いに行つてね」

ミイミに言われ、ハナハナは「うん」と大きく頷きました。

その4 キツパとルウ(6)

翌日、ニニイのお葬式が村の人の手で行われました。

お葬式、と言っても、妖精にはお墓はありません。何故なら、妖精達は死ぬと一時間も

しないうちに身体は光になって消えてしまうからです。

妖精達にとってお葬式は、身体から離れた魂を慰めるための儀式でした。

ニニイが使っていたベッドを祭壇にして、たくさんの春の花を飾りました。

もちろん、花を摘んで来たのは村の女の子達です。

男の子達は大人と一緒に、家具を動かして大勢の人が入れるようにしました。

ミイミ達奥さんは、家から持ち寄った食べ物で、祭壇のお供えと、みんなが少しずつ食べる料理を作りました。

普通は祭壇に、生前その人が大事にしていたものなどを飾るのですが、今回、旅芸一座

のトーベルさんが特別にニニイの似顔絵を描いてくれました。

器用なトーベルさんは、キツパとルウの話だけで、ニニイにそっくりな似顔絵を描いてくれました。

それをボツへさんが急ごしらえした額縁に入れ、祭壇に飾りました。額の周りにはトネ

リコの白い花をたくさん飾りました。

「ニニイは、トネリコの花が昔からよく似合ったわ」

ミイミが、似顔絵のちよっと笑った感じのニニイを見ながら、また涙ぐみました。

お葬式も終わり掛けた午後。

帰ろうとしたトーベルさんをキツパが呼び止めました。

「あのっ」

「何だい？」

「俺達を、旅芸の一座に入れて下さいっ」

いきなり言い出したキツパに、トーベルさんはもちろん、長老も、ハナハナ達も驚きました。

「どうしてまた？」トーベルさんは、キツパの目の高さにしゃがんで訊きました。

「俺達、母さんが死んじゃったんで、もう他に身寄りがありません。もうここにも居られないし……。だからっ、旅芸の一座に入って、色んなところに行っ

てみたいんです」

「なるほどね」

トーベルさんにはにつこり笑いました。

「でも、一座の仕事は大変だよ？ 入ったら毎日、水汲みと掃除だよ？ それもテント全部」

「それでもいいですっ」

今度はルウが言いました。

「今までだって、モルガナさんとの手伝いとか、大変な仕事一杯した来ましたっ」

「おやおや」

傍で聞いていたモルガナ婆さんが、心外という表情で言いました。

「あたしとこの仕事の、何処が大変だったって言うのかえ？ あんなに優しい仕事ばかりさせてやったのに」

「そうかねえ？ モルガナ婆さんの人使いは、俺らでも有名だぜ？」
言ったのは、ボツヘさんの同僚の大工の若いシマリスの妖精でした。

彼の言葉に、周囲の人達も「そうだそうだ」と囁します。

モルガナ婆さんは「バカお言いでないよ」と眉を釣り上げましたが、その声は酷く優しいものでした。

みんなのやり取りを見ていたトーベルさんは、あははと笑いました。

「それはさておき、キツパ、ルウ、本当に一座で働きたいんだね？」

念を押されて、兄弟は「はいっ」と大声で返事をしました。

「ふうむ、決心は固いようだね。??どうです？ 長老殿。本当に私がこの子達を預かってよろしいか？」

長老は「ふむ」と唸ると、モルガナ婆さんを見ました。
すると婆さんは、これまで見た事がない優しい顔で笑いました。

「いいんじゃないのかえ？ 確かに、猫の妖精はパッセルベルに居た方がいいに決まってるけれど、この子達はまだ若いのだし。旅させるのもひとつの勉強だよ。何より伯爵が

連れて行きなさんなら、安心だしねえ」

「……そうじゃな。ふむ。??と、いう事で、伯爵、すまんが二人をお預かり下され」

「分かりました。では責任を持って引き受けましょう」

キツパとルウは、旅芸一座に入れると聞いて、ぱあっと顔を輝かせました。

「よかったね」

ハナハナはキツパにお茶を持って行って、言いました。

「でも、キツパ達がいなくなると、寂しくなっちゃうね」

「……ハナハナは、俺らによくしてくれたし。ありがとうな」
うつん、とハナハナは首を振りました。

「友達なら、当然よ」

キツパは照れたように笑いました。ハナハナも微笑みました。

そして、春の終わりに。

旅芸一座は次の街に移動することになり、興行を終えました。

ハナハナと子ねずみ三兄弟は、一座が行ってしまふ前にと
急いで南の大枝へ降り

て来ました。

その4 キツパとルウ(7)

大枝の上では、すっかりテントが片付けられていました。

玉乗りの玉も空中ブランコの大道具も、みんな大きな荷馬車の中に収められて、何にも

ありません。

少し前から今まで住んでいた家を引き払ってテントに移っていたキツパとルウも、もう

すっかり荷造りして旅支度を整えていました。

トーベルさんが長老に挨拶に行っているということで、一座の人は荷物番をしながら

帰りを待っていました。そこへ、ハナハナ達は行きました。

「キツパ」

荷馬車の後ろに居たキツパとルウを見付けて、ハナハナが声を掛けました。

「よお」

「いよいよ、出発だね」

「ああ。??なんだ、小ちびねずみみつつも一緒かよ」

ハナハナの後から来たリック達兄弟を見付けて、キツパはいつもの調子で悪口を言いました。

「なんだとっ！ でくのぼーバカ猫っ！」

「言っただなっ！」

「もうっ、キツパもリックも喧嘩しないのっ。リック、そんなことで来たんじゃないでしょ？」

ハナハナが止めると、リックはふて腐れた顔で「うん」と頷きました。

「キツパ、弟のマックがおまえとルウに謝りたいって」

言つと、リックは一番後ろに隠れるように立っている末っ子を見ました。

マックは兄に見られて、もじもじと後ずさりしました。それを、2番目のニックが腕を掴んで前へ押しやります。

マックは怯えたように顔を上げると、また俯いてしまいました。

「ほら、ちゃんと自分で言え」

「う……、うん」

頷くと、マックは覚悟を決めたように、大きく息を吸い込みました。そして、

「ごめんなさいっ!」

勢い良く頭を下げました。

「あの時……、僕がルウをブランコから落とさなかったら、ニニイおばさんは死ななかつ

たかもしれないって……。お葬式の時からずっと考えてて……。だから、絶対キツパとルウに謝らなくちゃって、僕……」

最後の方は、マックは涙声になってしまいました。

ぐすぐすと鼻を鳴らし始めた子ねずみの肩に、ハナハナはそっと手を置きました。

「マックね、ずっと落ち込んでたんだって。だから……」

「???ああ」

キツパはがりがり頭を掻きました。

「それ、違うつて。モルガナ婆さんが言ってたけど、母さんは昔魔物と戦った時に毒が身

体に入つて、もう助からなかったんだ。だから、おまえのせいじゃない。ルウの怪我がな

くつても、きつと、もう……」

「キツパ」

ハナハナには、キツパが精一杯悲しいのを堪えてしゃべっている

のが分かりました。

ハナハナは、思わずキツパの手を握りました。

「キツパって、大人だね」

「よせやい」

キツパはちよつと赤くなりました。

「他所の街へ行っても、元気だね」

「おう」

じゃあな、と、キツパがルウを促して、荷物番に戻ろうとしました。

「おい、キツパ」

リックが呼び止めました。

「なんだよ、まだ喧嘩してえのか？」

「ちげーよつ。??これ」

リックは、だぶだぶの胸当て付きズボンのポケットから小さな木彫りを出しました。

それは、猫の妖精の人形でした。よく見ると、どことなくニニイに似ています。

「これ……?」

「トーベルさんに習って彫った。おまえにやる」

キツパはリックの手から人形を受け取ると、じっと見詰めました。そして不意に後ろを向くと、片手で顔をこしこしと擦りました。

「兄ちゃん……」

ルウが、ぐすつ、と鼻を嚙りました。

キツパはうん、と頷くと、くるりとリックに向き直りました。

「有り難く、貰っというてやるよ」

強がって言った目が真っ赤だったのを、ハナハナは見ました。

「今度こそじゃあな」

そう言つと、キツパはルウの手を取って、荷馬車の方へ戻って行きました。

「行こう」

リックはハナハナと弟達にそう言つて、歩き出しました。でも、南の大枝の根元まで来

た時、リックはふと足を止めて振り返りました。

「キツパっ！」

リックが大声で呼ぶと、キツパとルウが荷馬車の陰から出て来ました。

「もう二度とパッセルベル戻って来んなっ！」

「うるせえっ！　だーれがバカねずみの居る村なんかに戻って来るかつ！」

「もうっ、二人ともっ！」

ハナハナは怒りました。でもキツパとリックには聞こえていません。

普段の喧嘩の時のように、お互い「べーっ」と舌を出しましたが、キツパもリックも、

すぐに手を上げて振り合いました。

「たまには、手紙寄せよっ！」

「おまえもっ、返事出せよっ！」

キツパは再び馬車の陰に隠れました。リックはゆっくり手を下ろすと、ほうつと大きく

息をつきました。

「さあ、帰ろう」

弟達の背中を叩き、ハナハナにっこり笑い掛けました。

ハナハナは家に帰つてその話をミイミにしました。

「ほんと、男の子つてわかんない」

ハナハナはぶつと膨れて言いました。

「だって、友達と離れるのが悲しいならそう言えばいいのに。なんで素直に言えないの？」

ミイミはうふふと笑いました。

「そうねえ。……そう言えばティーヴにもそんな喧嘩仲間が居たわ。スティンキーって言

う、イタチの妖精の子だった」

ミイミは、さやえんどうの筋を剥きながら、懐かしそうに言いました。

「へええ。イタチの妖精って、珍しいね？」

「ええ。緑龍溪谷には少ないわね。スティンキーも11歳くらいまでパッセルベルにお父さ

んと住んでいて、で、お父さんのお仕事の都合で遠い街へ行ってしまったのよ」

「ふうん。でやっぱりティーヴもリックとキツパみたいな事したの？」

「やってたわよ」

ミイミはまったくずっと笑いました。

「やっぱり派手に『べーっ』って舌出して。でもほんとに別れる時にはお互い抱き合っ

泣いてたの」

「ふうん」

ハナハナも、さやえんどうの筋剥きを始めました。

「やっぱり、男の子ってわかんない」

口を尖らせたハナハナに、ミイミは「そうね」と微笑みました。

その4 キツパとルウ 完

その4 キツパとルウ(7) (後書き)

その4 キツパとルウは、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

次は、ちよつと息抜き。

パッセルベル村の、ご近所案内です。
いろんな村人(村妖精?)がいます。

その5 エトセトラ1(1)(前書き)

ここでちょっと、ひと休み。

パッセルベルの住人の一部を、ご紹介します。

その5 エトセトラ1(1)

パッセルベルの村は全部で27丁目まで。

1丁目はトネリコの梢に近い枝で、そこは長老の家だけがあります。代々の長老が住ん

でいた家は、現在改築中。近く完成予定です。

2丁目は、ここも1軒だけで、長老の孫ニーニヤと両親の家です。ニーニヤの父サウル

は長老の息子で村長さん。でもみんなが何かと長老を頼ってしまうので、自分は存在感が薄いと、日々嘆いています。

ニーニヤのお母さんマラーニヤは、サウルとはお見合い結婚です。仲人は何とトーベル

さん。マラーニヤは緑龍溪谷からは遠く離れた西の谷、赤龍山脈の妖精の村からお嫁に来ました。

赤龍山脈の村では、マラーニヤの一家しかもう猫の妖精は居なくなってしまうていて、彼女の両親は仕方なく娘の結婚相手を遠い緑龍溪谷に求めたのでした。

そのせいで、ニーニヤは母方の祖父母には一度しか会った事がありません。

手紙のやり取りは頻繁にしています。でも綺麗な絵葉書が来たりすると、もう一度おじいちゃんおばあちゃんに会いたいと思うニーニヤでした。

くくくくく

ハナハナの家は4丁目。ここの枝には、他に3軒あります。

オットーさんはあなぐまの妖精で、鍛冶屋さん。仕事場はもつと下の枝で、こっちは自宅です。奥さんのネルさんとの間には子供がいません。

そのせいか、ハナハナやミイミの二人の子供達、モモとフレイをとつても可愛がつてくれず。

もう1軒はネービルさんという、おばあさんの猫の妖精が一人で暮らしています。

ネービルさんは足が悪いので、時々ミイミや他の奥さん達が家事のお手伝いに行つています。

ネービルさんは近所の奥さん達が来るとたいそう喜んで、行く度に、お茶をごちそうしてくれます。そのせいで、ネービルさんの家は奥さん達のちょっとしたサロンになっています。

）　　）　　）　　）　　）

パッセルベルの子供達は、週に二、三回村長の家に勉強に行きます。教わるのは、主に読み書きと算数です。

特に算数は、将来人間の住む街で働くのを希望している子供にはとっても重要です。

これが出来なければ、お給料がちゃんと貰えませんから。

子供達を教えるのは、村長のサウルとふくろうの妖精のアルベルトさんです。

アルベルトさんはふくろうの妖精としてはまだ若い三十三歳です。でも頭が凄く良くて、人間の学校へ入り先生の資格まで取りました。

優しくて、教え方も上手です。子供達は『若先生』と呼んで、親しんでいます。

子供達が勉強を教わる曜日は、その子の家の都合もあるのでまちまちです。

教室は月曜日から土曜日まで、毎日午前九時から十一時半までやっていて、子供達は都合のついた日にやって来ます。

アルベルトさんも村長も、読み書きも算数もどちらも教えられませんが、どちらかというと

と子供達は、若先生に算数を教わる方が、優しいので好きです。いえ、村長が優しく無い、というのではないのですが……

）
）
）
）
）

その5 エトセトラ1(2)

リック、ニック、マックの三兄弟のお父さんは、緑龍山脈からずっと南のベラスという港町で働いています。

船乗りで、港の中で大きな船から荷物を受け取って港まで運搬する仕事をしています。

人間の街であるベラスでは、妖精達は人間に化けて、自分達の本当の姿を隠します。なので、手紙に時々添えられる絵にも、お父さんは木ねずみではなく人間の格好で描かれています。

その他、街や海の風景の絵も入っていたりします。今回入っていたのは、細長い塔に大きな羽が横に四枚くっついた、不思議な形の建物の絵でした。

「これ、何だと思う？」

リックに絵を見せられて、ハナハナも思わず首を捻ってしまいました。

「お家の飾り？ にしては、ずいぶんおっきいね」

「これ、動くの？」とマック。

「わあかったっ！」

ニックが大声で言いました。あまり大きな声だったので、周りのトネリコの若葉がざわざわ動きました。

「物干竿だっ。これ、回しながら洗濯物乾かすんだっ！」

「ちがーっっ」

お兄ちゃんリックが偉そうに胸を反らします。

「これはあ、風車っていうんだ。風の力でこの大きな羽をぐるぐる

回すんだ」

「……それだけ？」

「……うん」

実は、風車は風の力を利用して水を汲んだり穀物を粉に挽いたりするものですが、リック

クはそこまでは知りませんでした。

ただ回るだけなら面白くないなあ、とハナハナは思いましたが、男の子達は違ったようです。

「すつげえっ！ これ回るんだっ！」

「おつきいんだよねえ、こんなのが本当に風で回るの？」

木ねずみの弟達は夢中です。絵に見入っていたマックが、ふと言いました。

「ねえ兄ちゃん、風車作れない？」

「えっ？ 無理だよこんなでっかいもの」

「作れるよ。兄ちゃん器用だから」

「無理だっつー！」でもそう言いながら、リックはちよつと作ってみたい気持ちになりました。

そうだ、ボツへの親方に聞けば、作り方が分かるかもしれない。今度聞いてみよう、と、リックは心密かに決心しました。

その5 エトセトラ1 完

その5 エトセトラ1(2)(後書き)

その5 エトセトラ1は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

今回登場した住人以外にも、これからもいろいろな妖精たちが
お話に出てきます。

そして。

次は、リックの一大決心、です。

わんぱく小僧のリックですが、お母さんは恐い。

そんなリックが、ある決意をお母さんに打ち明けます。

でも、お母さんは大反対！

さて、リックの決心は実るでしょうか？

楽しみに。

その6 リックの一大決心(1)

長老の家の改築は順調に進み、秋までには完成の目処がようやく立ちました。

解体した時は見た目より更に痛みが酷く、どうしようかと大工のボツへさん、木こりのルーラさん、長老が何度も話し合っていました。

都合三回、ボツへさんが図面を引き直し、やっとのことでみんなの了解が採れたのは、春も半ばになつてから。夏の大雨が来る前に、何とか屋根までは作らなければなりません。

図面が決まつてから毎日、ボツへさんは仲間の人達と、朝から晩までノミを振るいました。

そんな忙しいボツへさんのところにリックが弟子のお願いに行つたのは、喧嘩友達のキツパが村から出て行つて少しした頃でした。

「大工になりたいって？」

ボツへさんは木を加工する手を止めて、小さな子ねずみをまじまじと見ました。リック

はどきどきしながら、ボツへさんの次の言葉を待ちました。

「……そう言や、前に『木ねずみは大工になれるか』って聞いて来たな？」

「……はい」

その時は、仕事と種族は関係ないと、ボツへさんはリックに教えました。

ただ、郵便屋さんのような空を飛べなければ出来ない仕事は別で

すが。

「僕、本気でなりたいんですつ。ですから、親方のお弟子にして下さいっ！」

リックはもう一度深々と頭を下げました。ボツへさんは困ったように、ふくむ、と唸りました。

「坊主、幾つになった？」

「十歳ですっ！」

「ちつと早いねえ」

「早いつて……？」

ボツへさんは、作業台の側の椅子代わりにしている切り株に腰を下ろしました。

「普通、弟子にするのは十二歳の誕生日を過ぎたらだ。??父さん母さんの了解は、貰ってるのか？」

リックはどきっとしました。まだお母さんに何も言っていないせん。
「……いいえ」

「それじゃあ、ダメだな」

よっこらしよ、と、ボツへさんは立ち上がりました。

「弟子には取れないよ」

「母さんがいいって言ったら、大丈夫ですかっ？」

リックは必死に聞きました。

「ああ」簡単に返事をすると、ボツへさんはリックに背を向けて仕事を再開しました。

「それで、どうしたの？」

洗濯干しを手伝いながら、ハナハナはリックに聞きました。

ボツへさんをお願いに行つた翌日。

村長の家で勉強をして来た帰りに、リックはしょんぼりした様子で一人でハナハナの家へ来たのです。

お天気は上昇、五人分のたくさんの洗濯物はトネリコの枝一杯に干されて、はたはたと風にはためいています。

「マーマおばさんに、大工さんになりたいってボツへさんに話した事、言っただの？」

洗濯物の間から顔を出したハナハナに、リックは俯けていた顔をますます俯けて

「うん」と言いました。

「それで？」

「……ダメだって」

「まあ」

「母さんは、父さんが船乗りなのに、なんで俺が大工になるんだって……」

遠い港町で働いているリック達三兄弟のお父さんを、奥さんのマーマおばさんとはとって

も尊敬して感謝しています。

だから、息子達、それも長男のリックには、父親と同じ職についてももらいたいのです。

リックは、ミイミの家の物干し場の近くの枝に腰掛け、はあ、と大きく溜め息をつきま

した。

「それに、将来のこと決めるのは、まだ早いつて……」

「そっか……」

「僕、船乗りも好きだけど、大工の方がもつとやってみたいんだ」
ハナハナはモモのシャツをぱんぱんつ、と叩き、ぱつと枝に引っ掛けました。

「ねえ、お母さんに、それちゃんと話してみたら？」

「言っただよ」リックはきつ、と顔を上げました。

「けど、全然聞いてくれないんだ。絶対ダメだって、そればかり」
「私が、話してみましようか？」

子供達の話で、それまで黙って聞いていたミイミが言いました。

「リックは、どうしても大工さんになりたいのでしょ？」

「うん……」

その6 リックの一大決心(2)

リックは、歯切れ悪く頷きました。でも、少しして、思い直したようにきつぱりと言いました。

「うん。でも俺、もう一回母さんに自分で話す。それでダメだったら、ミイミおばさんに応援頼みます」

そう、とミイミは笑いました。

ハナハナも「頑張って」と言いました。

「じゃ、俺早速言ってくるっ！」

リックは勢い良く枝から降りると、自分の家へ向かって走り出しました。

「上手く話せるといいね」

勢い良く走って行くリックを見ながら言ったハナハナに、ミイミは「そうね」と微笑みました。

自分の家の前まで全速力で走ったリックは、玄関の前で止まると大きく深呼吸しました。

「よしっ」気合いを入れて、扉を開けました。

「ただいまっ！」

パッセルベルの住人の家は、たいがい玄関ドアを開けるとすぐ台所です。板張りの部屋の真ん中に、これも近くの森の木を使って作った食卓が置かれています。

リックの家は五人家族なので、食卓も大きめ。その前に、お母さんのマーマおばさんと、

第二人が座っていました。

マーマおばさんは入って来たリックを振り返って、きつ、と眉毛を逆立てました。

「ただいまじゃないでしょ。もうお昼ですよ。何処に行ってたのっ？」

「あ……」怒られて、リックは慌てて台所の柱に掛かっている時計を見ました。針は、十二時少し前です。

「村長さんのところの勉強が終わって、まっすぐ帰って来ると思ったら。第二人に道具を

持たせて、何処か一人で遊びに行ってしまうなんて。母さんは、そんな無責任な子にお

まえを育てた覚えはありませんっ」

「……ごめんなさい」

走って来た勢いは何処へやら、リックはしょぼんとして謝りました。

マーマおばさんは溜め息をつく、「とにかく、お昼にします。お座りなさい」

リックは、手を洗って自分の席に座りました。

待たされていた弟達が、ちらつと兄の顔を見ます。

マーマおばさんは、食卓にお昼のメニューを並べながらリックに聞きました。

「で、何処へ行っていたの？」

「……ハナハナのところへ」

「何で？」

「ボッへおじさんの弟子になりたいって話をしに」

「リック」おばさんは、オートミールをよそう手を止めました。

「その話なら、この間したわよね？ 母さんは反対だって」

「……どうして？」リックは、俯いたまま聞き返しました。

「どうしてって……。この間も言ったでしょ、母さんは、リックに

はなるべくなら父さん

の跡を継いで船乗りになってもらいたって。それより、おまえはまだ十歳だし、将来の事を決めるのは早いって」

「それは、分かってるけど……」

リックはもごもご言いました。

「分かってるなら、この話はお終い。もうちょっと先になったら、父さんとも話して港で

船乗りの勉強をしなけりゃならないけど、おまえはまだ十歳だし、今はまだ考えなくてもいいでしょう」

決めるのは早いと言いながら、マーマおばさんは、将来何としてモリックを船乗りにする積もりです。

「……どうしても、船乗りじゃなきゃいけないの？」

リックは食い下がりました。今抵抗しなければ、どんどん母の言いなりになってしまいます。

「僕は、どうしても大工になりたい。船乗りはやだっ」

「リックっ！」マーマおばさんは、怒ってばんっ、と机を叩きました。

ニックとマックがびっくりして、つまみ食いしていた手を引っ込めました。

「おまえはっ、父さんの仕事が嫌だって言うのっ？ 父さんは、遠い港でおまえ達を大きくするために一生懸命働いてらっしゃるのよっ。それを……」

「父さんを嫌だって言うてる訳じゃ無いよっ！」

リックは立ち上がりました。

「父さんが船乗りで働いているのは、大好きだし尊敬してる。でも、僕がなりたいのは船

乗りじゃないっ。僕は、家やものを作ったりする仕事がいんだっ

「おまえは長男でしょう？ 長男は父親の仕事を継ぐものですっ」

「何でだよっ！ 僕には船乗りなんて、きつと無理だよっ！」

「リックっ！」

「船乗りには僕がなるよ」

不意に、ニックが二人の話に割って入りました。

その6 リックの一大決心(3)

「ねえ母さん、何で長男じゃなきゃ父さんの仕事を継げないの？
僕、船乗りになりたい。」

僕じゃだめなの？」

マーマおばさんもリックも、びっくりしてニックの顔を見ました。

「だって、ニック……」

「無理して言ってるなら、止めるよ？」

「無理じゃねえよっ」ニックはふて腐れたように言いました。

「だって、父さんも母さんも、兄ちゃんばかりにそんな話して……」

……。僕やマックには何

にも聞かないじゃないか。僕は船乗りになりたい。父さんと一緒に
仕事したい。ずっと、

そう思ってた」

マーマおばさんは、言葉がありません。

リックはじっと、ひとつ違いの弟を見ました。

と、一番下のマックが言いました。

「リック兄ちゃんは器用だもん。釣り竿とか竹とんぼとか、みんな
作ってくれるし。作る

の好きなんだから大工さんに向いてるよ？ ねえ、母さん」

マーマおばさんは、詰めていた息をはあ、と吐き出しました。

「……分かったわ。今度父さんに手紙で話してみます。ただし、父
さんの返事が来るまで

は、ボツへさんへお弟子にして下さい、というのはお預けです」

「やったっ！」リックはぱっと顔を明るくしました。

どうしてもやりたいと言えば、子供想いの父はダメとはいいいま
せん。

これで、ボツへさんがいいと言えば晴れて大工見習いです。

「ありがと、母さん」

リックはつきつきと言って、椅子に座り直しました。

「お礼なら、ニックに言いなさい。ほんと、あんた達はお兄ちゃん
想いね」

マーマおばさんは、二人の小さな息子につこり笑いました。

ニックとマックは顔を見合わせて笑い、そしてリックを見ました。

「ありがとな」

「頑張つてね、兄ちゃん」

「さあさあ、本当にお昼にしましょう。リック、みんなの分のスプ
ーンを取つて」

リックは「はい」と立ち上がり、流し台の引き出しからスプーン
を出しました。

「あ、僕も手伝う」

ニックは椅子から飛び下りて、母の手からサラダボールを受け取
り配ります。

「じゃ僕もっ」

マックも椅子から降りハムの皿を取りました。

「まあまあ、今日はみんないい子なこと」

マーマおばさんは、いつもはお手伝いなど何処吹く風の息子達の
孝行振りに大仰に驚き、

三兄弟は盛大に吹き出しました。

父さんの返事を待つように言われましたが、リックは結局我慢出
来ませんでした。

翌日には、ボツへさんの仕事場にすつ飛んで行って、母の許可が
採れたと言いました。

ですが。

「でもなあ、君はまだ十歳だからなあ」

渋い顔のボツへさんに、リックは言いました。

「でも親方、この間、母さんの許可を貰ったら、お弟子にしてくれるって言いましたっ」

「ああ、確かに言っただけだな……」

ボツへさんにしてみれば、リックが粘ってこんなに早く親の許可を取り付けるとは、思ってもみなかったのです。

「前にも言ったが、弟子はたいがい、十二歳からだ。あと二年、我慢出来ないか？」

リックはむっ、と膨れました。

だって、親方はこの間、確かに母さんの許可を取ればいいって、言ってたじゃないか。

心の中で文句を言っ、でもリックは辛抱強く聞き返しました。

「……じゃあ、二年経ったら、絶対お弟子にしてくれますかっ？」

きつ、と睨み上げた小さな木ねずみを、ボツへさんはじつと見返しました。

リックは、何故かここで目を反らしたらお終いな気がして、ボツへさんの目を見据えました。

睨み合っ、数秒。ボツへさんはふっと、微笑みました。

「分かったよ。けどな、おまえはまだ十歳だ。これから先もしかしたら、大工よりもつと

やりたい仕事が出て来るかもしれん。だから、今は本格的な弟子にはせん」

「え？　じゃあ……？」

やっぱりダメなのかと、リックは顔を歪ませました。今にも泣きそうな子ねずみに、ボ

ツへさんは思わず吹き出しました。

その6 リックの一大決心(4)

「違う。ダメとは言つとらんよ。ただ、そうだな、今のところは見習いの見習いつて事だ」

「本当ですかっ?」

リックは、嬉しいよりもびっくりして、目を見張って聞き返しました。

ボツへさんは大きく頷いて、言いました。

「ああ。とにかく、決まりもあるから十二歳までは本格的な見習いには出来ん。何より坊主の身体がまだ小さ過ぎるしな。でも、簡単な手伝いならやらせられるから、そうだな、

週に一、二回、ここへ来て手伝いなさい」

「はいっ!」ありがとうございます、と、リックは大声でお礼を言つて、深く頭を下げました。

もう嬉しくて、仕方ありません。リックはボツへさんの仕事を後にすると、一目散に家へ飛んで帰りました。

「母さんっ! 親方が弟子にしてくれたよっ!」

玄関を開けるなり、約束を破つて頼みに行つた事も忘れて、リックは大声で言いました。

丁度居間で縫い物をしていたマーマおばさんは、息子の声に驚いて食堂へと出て来ました。

「まあっ、おまえ、父さんの返事の前に頼みに行つてはいけないつていったのにっ」

「あ……」その時になって、リックは漸く約束を破つた事を思い出しました。

「ごめんなさい……」

急にしゅんとなったリックに、マーマおばさんは言いました。

「しょうがないわね。でも、ボツへさんはいっておっしゃったのね？」

「……うん。でも、十二歳までは正式に見習いには出来ないって。簡単な手伝いならさせ

られるから、週一、二回仕事場においでって……」

マーマおばさんは、それを聞いてボツへ親方の優しい配慮を改めて感じました。更に、

それでも大工になりたいという息子の強い気持ちも、改めて認識しました。

「……分かりました。おやりなさい。その代わり、母さんの反対を押し切ってやるのだから、途中で止めるなんて許しませんよ。分かったわね？」

リックは顔を輝かせて、大きく「うんっ！」と頷きました。

「ありがとう、母さんっ」

「父さんには、母さんから言っておきます」

リックはもう一度お母さんに「ありがとう」と言いました。

と、居間で二人の話を聞いていた弟達が、食堂に飛び出して来ました。

「よかったね、兄ちゃんっ！」

「おめでとうっ！」

マックがリックに飛び付きました。リックは小さな弟の身体をぎゅっと抱いて、

「ありがとうっ」と、強く言いました。

「でもこれからだ。僕、絶対一人前の大工になるっ。頑張るよ」

「うんっ」

「応援してっから、兄貴」

二番目のリックに初めて『兄貴』と呼ばれて、リックはちょっと照れくさそうに笑いま

した。

「じゃあ、決まったんだ？」

村長の家からの帰り道。

ちよつと寄り道した三丁目の小枝の腰掛けのところで、ハナハナはリックから大工見習

いの許可が降りた話を聞きました。

「うんつ。だから今週からもう、手伝いに行くんだ」

すっかり濃くなったトネリコの若葉が、晩春の風にさわさわとそよぐ中、リックは得意

満面に胸を張りました。

ハナハナは、座つててもまだ自分より頭半分ちびのリックを見下ろしながら、につこり

笑いました。

「おめでとう。これから大変かもしれないけど、頑張つてね」

「おうつ。僕は絶対大工になるつ。キツパになんか負けねえんだつ」

その言葉で、ハナハナはどうしてリックが大工という『仕事』にこだわったのか、漸く

解りました。

リックは、喧嘩仲間のキツパに、負けたく無かったのです。

キツパは旅芸一座の一員として、この村を出て行きました。一員となった、ということ

は、キツパは『仕事』をするために一座に加わったという事です。

そう言えば別れる時には既に、軽い荷物の運搬や荷造りを任せられて、弟のルウと共に忙しくテントの外で働いていました。

もっとも、キツパとルウはお母さんの具合がずっと悪かったのです。それ以前から働いてはいましたが、『仕事』を意識したのは、多分キツパが旅芸

一座に入ってからでしょう。

荷造りをしているキツパの姿を見て、リックは働くという行為を初めて自分の事として考えたのです。

嬉しそうに話すリックを見ながら、ふと、ハナハナは考えました。

自分は、将来何をしたいのだろう……？

その6 リックの一大決心(5)

もちろん、ハナハナは女の子ですから、男の子達のように色々な仕事の選択がある訳ではありません。

それに、ある程度の歳になったら、お嫁に行かなければならないでしょう。

それまで、というより、それでも、自分に出来る仕事ってあるかしら？

漠然とそんな事を考えていたハナハナに、リックが言いました。

「僕、絶対風車を作るんだっ」

「え……？」唐突に言われて、ハナハナは一瞬、それが何だか解りませんでした。

ぽかんとしたハナハナに、リックが「ほら」と言いました。

「この間見せたる？ 父さんが手紙と一緒に送って来た絵」

「ああ、あの……」

大きな四枚の羽を横に付けた、不思議な建物。

「あれを、パッセルベルにも作りたいんだっ。仕事を早く覚えて、絶対風車を作るっ」

「でもあれって、大工さんが作るものなの？」

大工さんはお家を作るものだ、と、ハナハナは思っています。風車は大工さんの仕事ではないのでは。

ハナハナにそう言われて、リックはうーん、と腕組みして唸りました。

「でも、一応建物だし……。建物なら、大工が作るんじゃないのかなあ」

「でも、風で回るのよね？ 回る仕掛けも、大工さんが作るの？」

「……？」リックは黙って考え込んでしまいました。

ハナハナも解らなくて、黙りました。

家に帰って、ハナハナはその話をミイミにしました。

「そうねえ、どうなのかしら？」

食卓に座ってモモの上着を縫いながら、ミイミは首を傾げました。

「私も、パッセルベルを出た事がないから、風車を見た事が無いわだから、誰が作って

るのか知らないけど……」

「そっかー。そうだよ。村の人で風車を見た事ある人って、そんなにいないよね」

「そうね、多分。……ああ、アルベルトさんなら知ってるかも知れないわね」

ハナハナ達の先生、ふくろうつの妖精アルベルトさんは、昔人間の街で暮らしていました。

それに、色々な事をとてよく知っているので、もしかしたら風車についても知ってるかもしれない。リツクに言ってあげようって

「そうだよねっ、アルベルト先生なら知ってるかもしれない。リツクに言ってあげようって」

お姉さんありがとう、と言うと、ハナハナは足下に放り出していた鞆を置きに、自分の部屋へと向かいました。

その背へ、ミイミが言いました。

「もうすぐお昼だから、モモとフレイを呼んで来て」

「はい」

ハナハナは鞆を部屋の入り口に置き、急いで外へと出ました。

お日さまはトネリコの木の真上、風がそよそよ枝と葉っぱを揺らしています。

お昼を食べたらリツクに会いに行こうと思しながら、ハナハナは元気に裏で遊んでいる

モモと、フレイを呼びに行きました。

その6 リックの一大決心 完

その6 リックの一大決心(5) (後書き)

その6 リックの一大決心は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

この次のお話は、「ウェディング・ドレス」です。

大工の親方ボツへさんの一人娘、ミントさんの結婚式が、
予定より大幅に繰り上がってしまいました。
ドレスを縫ってあげるマーマおばさんは大慌て！

さて、どうなりますか・・・？

お楽しみに！

その7 ウエディング・ドレス(1)

長老の家があと少しで完成という頃。

木ねずみ三兄弟のおかあさん、マーマおばさんがミイミのところへやって来ました。

午前中の仕事が一通り終わり、どこの家の奥さん達もほっと一息つく時間です。

ミイミのお手伝いしていたハナハナも、お姉さんと一緒にお茶を飲んでいました。

「どうしましょう、困ったわ」

家へ入って勧めた椅子に座るなり、マーマおばさんは言いました。「昨日ミントちゃんがウエディング・ドレスを頼みたいって家に来たのよ」

パッセルベルでは昔から、先輩主婦が新婦のウエディング・ドレスを縫う習わしになっています。

結婚する娘さんは、村の中で一番お裁縫の上手な主婦に頼んで、自分のドレスを作って貰うのです。

マーマおばさんはパッセルベルで一番の裁縫上手です。これまでお嫁に行った女の子達

は、みんなマーマおばさんにウエディング・ドレスを縫って貰いました。

「でもねえ、お式の日取りがもう迫ってるのよ」
「何時なの？」

ミイミは聞きながら、マーマおばさんにお茶とお菓子を出しました。

おばさんはお礼を言って紅茶のカップを手に取りました。

「それが、長老のお宅が完成したらってことなの。で、ボツへさん

にさつき聞いたら、お

宅はもう来週には出来上がるって」

「まあ、それは大変」

「完成記念にお式をって言ったのは、長老さまなんですって。ボツへさんもかなり慌ててたわ」

「そうよねえ。そんなに急じゃね」

上手というのは、作るのが早いというのもあります。でもそのママおばさんが『時間

が無い』と慌てているということは、よっぽど時間が無いんだな、と、ハナハナは思いました。

溜め息をつく二人を交互に見て、ハナハナも一緒に溜め息をつきました。

「とにかく途方に暮れてしまつて。それで、ミイミに知恵を借りに来たの」

「私に？」ミイミは、綺麗な目をくると動かししました。

「私の知恵なんて……。そうだわ、ネービルさんに聞いてみましょう。こういう時は先輩

のお知恵をお借りするのが一番よ」

「そうね。ああやっぱりミイミを尋ねてよかったわ」

「ハナハナ」ミイミは、黙って大人の話を聞いていた小さな妹に言いました。

「私はこれからネービルさんのところへママさんに行って来ます。すぐ帰って来るけれど、お家の事よろしくね」

「はい！」ハナハナは元気に返事をしました。

二人を窓から見送って、ハナハナは食卓に戻ると、食器棚の上の時計を見上げました。

時計の針は、ちょうど10時。

おっとりしているけれど、おしゃべりが大好きなネービルさんに捕まったら、多分お昼

まで帰れないかな、と、ハナハナはお茶を飲みながら予想しました。お昼ご飯の支度を、ミイミに代わってしておこうかな、と、ハナハナは思いました。

「でも、もう一杯、お茶を飲んでから」

ハナハナは空になった自分のティー・カップにお茶を注いで、もうちょっと待ってみよう、と座り直しました。

ミイミとマーマおばさんは、ハナハナの予想に反して、お昼前にネービルさんの家から帰って来ました。

戸口で話している二人は、先ほどの心配そうな様子とは変わって、何やら上機嫌でした。

「それじゃ夕方に」

マーマおばさんはそう言うと、にっこり笑って帰りました。

「ねえ、どうなったの？」

気になって訊いたハナハナに、ミイミはふわりと笑いました。

「ハナハナ。あなたにもお手伝いしてもらいます。忙しくなるわよ？」

何だか楽しそうなミイミに、ハナハナもつきうきしてきました。

「はいっ」にこにこと返事をしたハナハナの頭をそつと撫でて、ミイミはお昼ご飯を作り
に台所へと向かいました。

それから、本当に忙しくなりました。

その日の夕食後に、ミイミとマーマおばさんが声を掛けた女の人達がネービルさんの家に集まり緊急会議になりました。

議題はもちろん、ミントさんのウェディング・ドレス製作です。

今回は時間が無いので、ちょっと異例ですが、一人の人が全部作るのではなく、みんなで協力して作る事になりました。

そこでネービルさんが勧めたのは、セパレーツ型のドレスでした。これならみんなが分けて縫う事が可能です。

ミントさんも呼ばれて、早速採寸しました。

後は布は誰が何処で仕入れるか、誰がどのパーツを縫うか、みんな話して決めました。

その結果。

スカートはミイミとマラーニャ。ニーニャとハナハナもお手伝いします。

その7 ウェディング・ドレス(2)

ブラウスベストはネルさん。そしてチュニック風の上着はマーマおばさんに縫って貰うことになりました。

ベールのレースはネービルさんが担当します。

さて。

翌日には早速、買い出し班が出動しました。

布は、パッセルベルでは売っていません。隣村のパッセルトーンの布屋さんまで行きます。

買い出し班はネルさんとマーマおばさん、それにミイミです。ハナハナとニーニヤもついて行きました。

「久し振りだね。隣村に行くの」

「ねっ」

パッセルトーンまでは約5キロ。ピクニック気分の二人を、ミイミは諭します。

「お遊びに行くんじゃないの？ ミントさんの大事なドレスの生地を買うために行くんです」

「はい、と返事する二人を見るミイミの目も、でもとっても楽しそうです。」

トネリコの木からマーフの泉の脇を抜け、谷底への道を歩きます。今は夏の花があちこちに咲いていて、特にユリは、そこにいい匂いを振りまいています。

ハナハナとニーニヤはユリを一輪ずつ摘もうと、大人達の前へ走って出ました。

「何だねばたばたとみっともない。女の子ががさつに走るんじゃないよ」

谷底の、背の高い草の陰からいきなり声がして、二人はびっくりして足を止めました。

ひょいと現れたのは、薬草採りに来ていた、モルガナ婆さんでした。

「あらモルガナさん、ご精が出ますね」

マーマおばさんが話し掛けると、モルガナ婆さんはふん、と鼻を鳴らしました。

「薬草は商売道具だからね。ところであんた達、ミントのドレスの生地を買いに行くんだろ？」

ミイミが「ええ」と頷くと、モルガナ婆さんはスカートのポケットからハンカチを一枚、出しました。

「これを持って、パッセルトーンのラーラっていう猫の妖精の生地屋のところへお行き。

『モルガナ婆さんが、フリルに使うレース糸を欲しがってます』って言うんだよ」

「え？ それって…？」

ネルさんが驚いて聞き返しました。モルガナ婆さんは、金色の縦虹彩の目でぎろり、と

あなぐまの妖精の気のいい女性を睨みました。

「あたしが、ドレスを飾るレースを編んでやるよ。なに、材料が揃えば二日もあれば出来

る。上がったら教えるから、糸を買って来ておくれ」

受け取ったハンカチのレースの見事さに、マーマおばさんは感激しました。

「ありがとうございます、モルガナさん。これで素敵なドレスが出来るわっ」

みんなはモルガナ婆さんにお礼をいい、谷底を後にパッセルトーンへと急ぎました。

ユリを摘み損なったハナハナとニーニヤはちょっぴり残念でしたが、代わりにドレスに素敵なレースが使えるとなってわくわくして来ました。

「きつと素敵になるねっ」

「そうだね」

お昼少し前に、みんなはパッセルトーン村に着きました。ここはパッセルベルとは違い、

幾つかの大きなトチの木が林立していて、上に住んでいる住民は木の間に橋を掛けて行き来しています。

みんなは一番西の木に上りました。

そこは、露天のお店が大半の枝を占める、デパートのようなところでした。

大勢の人が買い物に来了います。妖精達は人間と違い、自分の体重を変えられるので、枝に大人数が乗っても折れる事はありません。

でも、すれ違うのが大変なくらいの人混みで、さすがにトチの枝もしなっています。

「すごい人手だね」

ハナハナは目を丸くして言いました。

「前に来た時も一杯人が居たけど、何だかあの時より多いみたい」

ニーニヤも、声を上ずらせます。

二人はきよろきよろと、通路を挟んで両脇に並ぶ露天を見回しました。

「こつちよ」先を歩いているマーマおばさんが、遅れがちな子供二人に声を掛けました。

人混みを分けてみんながやって来たのは、色々な布の並んだ大きな露天のお店でした。

露天と言っても、テント張りというだけで、中はちゃんとした商店です。奥行きもあり、

奥には高級そうな綺麗な布がたくさん並べられていました。

「こんにちは」マーマおばさんが声を掛けると、中から店主らしい女の人が出て来ました。

「あら、マーマさんいらっしやい」

でっぷり太った猫の妖精の女の方は、赤茶の毛並みに埋まった小さな緑の目を細めてにっこり笑いました。

その7 ウエディング・ドレス(3)

「今日はどんなご用？」

「ウエディング・ドレスの生地が見たいのだけれど」

「ああ、それなら丁度いいのがあるわ。つい昨日、緑龍平野のリースからいい絹が入ったの」

「マーマおばさんは、早速その絹を見せて貰いました。」

それは、大繭という特殊なかいこで、緑龍平野の桑だけしか食べないという不思議な虫から採れる糸です。

大繭の糸は初めから少し金色をしていて、織物にすると表面がきらきらと金色に輝きます。

「いいわねえ」

「マーマおばさんとネルさんは、手に取ってうっとりと言いました。」

「これなら、いいドレスが出来るけど……。高いでしょ？」

「そうねえ、普通のドレス生地の三倍、かな」

店主の言葉に、みんなはがっかりしました。

「それじゃ、無理ねえ」

「あ、でも、マーマさんなら特別にうんと割り引きしますよ。ただし……」

もう一着、この生地でドレスを作って欲しいと、店主は言いました。

「近頃ではドレスを上手に縫える人が減って来ててね、だから生地も中々売れないの。な」

「ので、いいドレスをマーマさんに作って貰って、うちで貸し出ししようかと思ってね」

「まあ、それはいいわね。是非作らせて頂くわ。でも、頼まれてる

ドレスが急ぎなので…

…」

店主は、ミントさんの結婚式が終わってからでいいと言ってくれました。

みんなは大繭の絹地を買うつと、次にレースの糸を買いにモルガナ婆さんが言っていたラーラの店へ行きました。

ラーラの店は、大繭の生地のお店から更に枝先へ行ったところにありました。

そこは小さなお店でした。中へ入ると、キルト用の小さく切られた布が、幾つもの引き出しにびっしりと入れられていました。

マーマお婆さんは、所狭しと並んだ引き出しの間に置かれた椅子にちょこんと腰掛けた、

年老いた猫の妖精の女性に話し掛けました。

「あの、ラーラさん？」

お婆さん妖精は、顔を上げました。

「はいな。私はラーラですが？」

「パッセルベルのモルガナさんのご紹介でこちらに参りました」

「まあまあ」

ラーラお婆さんは、白髪の間違った灰色の長い毛並みの顔を上げて、みんなを見ました。

「モルガナさんは、お元気ですか？」

「はい。……お知り合いなのですか？」

ミイミが聞くと、ラーラお婆さんは「はいな」と頷きました。

「私がまだ若い頃に、母が大変お世話になりましたね。もう亡くなりましたが、モルガナ

さんのお薬でずいぶん楽に逝ってくれました」

「そう、だったんですか」

「あの方は、蛇の妖魔ということもあって、周囲からはあまりいい

様には見られませんが、根はとっても優しい方です。母のことも、それはそれは親身に診て下さいました」

ハナハナとニーニヤは、さっきモルガナ婆さんがマーマおばさんに手渡したレースのハンカチを思い出しました。

「おばさん」ハナハナは、小声でマーマおばさんにハンカチの事を伝えました。

「ああそうだったわ」

マーマおばさんは、モルガナ婆さんから預かったハンカチを、ラーお婆さんに見せました。

「まあまあ、このハンカチは……」

ラーお婆さんは、本当に驚いたという声を上げました。

「これを、モルガナさんが？」

「はい。ラーさんに見せて、ドレスのレースにする糸を売って貰って来るようにと」

ラーお婆さんは、手にしたハンカチを大事そうに撫でました。

「そうですね……。そう、モルガナさんが……。実はね、このレースは、私の姉の結婚式

にモルガナさんが作って下さったドレス用のレースの余りでこさえたものなんです。私が、モルガナさんにお礼にと渡しました。

ところが、そのお式があった一週間後に、村で一人の若い妖精が亡くなったんです。毒

草を食べての自殺でした。……でも、当時の村の人々は、妖精が自殺なんて考えられない、

きっと誰かが毒を食べさせたのだと騒ぎました。毒を扱うのに慣れていた薬師のモルガナ

さんが、まっ先に疑われました。蛇の妖魔ですし、当時はまだ魔王

が生きていた時代でし

たから、モルガナさんがいくら無実だと言っても、誰も信用しなかつたんです。

それでとうとう、モルガナさんはパッセルトーンを出て行くことになりました。もちろん

ん、私と姉は最後までモルガナさんがそんなことをする人だとは思っていませんでしたか

ら、見送りに行きました。その時、このハンカチを渡したのです」「そうだったのですか……」

その7 ウェディング・ドレス(4)

初めて聞いたモルガナ婆さんの昔の話に、大人達も、ハナハナとニーニヤも驚きました。

と同時に、ちよつとモルガナ婆さんが気の毒になりました。

ラーラお婆さんは話を続けました。

「その後で、若い人は自殺だったと解りました。遺書が、見つかったんです。村長さんら

はモルガナさんに済まないとおっしゃってました。……まあ、言っても後の祭りだったんですけどねえ」

ラーラお婆さんはしみじみ言つて、またハンカチを撫でました。ややあつて、思い出したように顔を上げました。

「ああそうそう。みなさんはこんな昔話を聞きにいらしたんじゃないわよね。レース用

の糸ね。はいはい、今お出ししますね」

どっこいしょ、と椅子から立ち上がると、お婆さんは奥の引き出しを引っ張りました。

大きな引き出しで、中には玉に巻かれた細い糸が、何十個も入っていました。

いかにも重そうな引き出しをこちらへ持って来ようとしているお婆さんに、ハナハナと

ニーニヤは慌てて手を出しました。

「お婆さん、私達が持ちますっ」

「あああ、ありがとう」

二人は、お婆さんが出した引き出しをマーマお婆さん達の前へ置きました。

「綺麗ね」

「あ、この色なら買った生地に合うわ」

ネルさんが取り上げた玉を見て、ラーラお婆さんが言いました。
「それは、大繭の糸ですよ。大繭は糸が細いので、とっても綺麗な
レースが出来ます」

「偶然だわ。さつき私達、他のお店で大繭の生地を買ったんです」
マーマお婆さんは、その店主と貸し出し用のドレスを作る約束
をしたことを、ラーラ
お婆さんに話しました。

ラーラお婆さんはその店主もよく知っており、それならと糸を
大変安く譲ってくれました。

とてもいい材料が安い値段で手に入り、ついにとってもいいお
話を聞く事が出来て、
みんなは優しい気持ちで帰り道を歩きました。

パッセルベルへ戻ると、みんなは早速仕事に取りかかりました。
ハナハナはモルガナ婆さんにレース糸を届けに行きました。

西の下枝に着くと、婆さんの家からつん、と薬草を煎じるにおい
がしました。

「こんにちは」ハナハナはドアをノックして開けました。婆さんは
台所のかまどの前に立
って大鍋を掻き回しているところでした。

「あの、レース糸、買つて来ました」

「そうかい。ありがとうよ」

そこへ置いて、と、モルガナ婆さんは木杓子で食卓を指しました。
ハナハナは籐の籠に

入ったレース糸を卓へ置きました。

「それじゃ、」帰ります、と言い掛けた時。

「……ラーラは、元気だったかい？」

「あ、はい」ハナハナは少しどきどきしました。

実はマーマおばさんやミイミ達と話合って、ラーラお婆さんから聞いた話はモルガナ

婆さんには内緒にしよう、という事になっていたのです。

??下手に話したら、昔の事を聞いたのがばれちゃうなあ。

これ以上何か聞かれる前に帰ろうと、もう一度ハナハナが「帰ります」と言うと、モル

ガナ婆さんがぐるりとこちらを向きました。

「ラーラから、パッセルトーンでの話を聞いたんだね?」

ハナハナは、咄嗟に「いいえ」と言いました。

モルガナ婆さんは金色の目を細めて、ハナハナを見ました。

「いいよ、嘘付かなくても。……まあ、色々あったけど、今は単に昔の話。もう魔王もないし、私やなんにも気にしてないよ」

「……ごめんなさい」

モルガナ婆さんは、謝ったハナハナに一瞬きよとんしました。それから大声で笑い出しました。

「あつはつは。おかしな子だねえ。どうしてあんたが謝るのさ。ま、いいか。??どれ、

糸を見てみようか」

婆さんは食卓の籠から糸玉を一個、取り出しました。

「大繭だね。いい糸だ。ネービルさんもこれでベールを作るんだろ? なら私もうんとい

い飾りレースを作らなきゃね」

二日後には出来上がるから、またおいで、と、モルガナ婆さんは言いました。

ハナハナはもう一度ぺこりと頭を下げて、モルガナ婆さんの家を出ました。

家へ帰って、ハナハナはその話をミイミにしました。
「そう……。モルガナさん、気にしないで言ったの」

その7 ウェディング・ドレス(5)

「うん」

ミイミは夕食の下拵えをしながら、につこりハナハナに笑い掛けました。

「ほんと、ラーラさんが言った通り、モルガナさんはいい人ね」

「ちよつと、恐いけどね」

肩を竦めるハナハナに、ミイミはあははと笑いました。

その晩、ミイミはティーヴに訳を言つて、次の日から二日間、ハナハナと一緒に村長の家へ泊まり込みました。

スカート部分を担当するのはミイミとマラーニヤの二人なので、どちらかの家で一緒に

やらなければなりません。

それに村長の家は部屋が大きいので、長いスカート生地を広げたりするのに場所がいいのです。

朝早くから、ミイミとハナハナは村長の家へ行きました。

着くなり早速マーマおばさんが引いた図面を、裏地はマラーニヤが、表はミイミが裁断して縫い始めました。

ニーニヤとハナハナは、仮縫いのための針に糸を通したり、待ち針を抜いたり揃えたりする役目です。

こんなに大変な仕事のお手伝いは初めての上に、夜も友達と一緒に居られるというので、

ハナハナもニーニヤもうきうきわくわくしていました。

10時になった頃、仕事をしている奥さん達のために、村長のサウルがお茶やお菓子を持

つて来てくれました。

勉強を教わっている時は、ちょっと恐い先生の村長がにこにこしながらお茶を運んで来てくれるのに、ハナハナはなんだか妙な気分になりました。

お昼ご飯と夕食は、ミントさんとお友達のリリイさんが作りに来てくれました。

「すみません、私のために……」

お昼ご飯と一緒に食べる時、ミントさんはとっても濟まなさそうにミイミとマラーニヤに言いました。

「いいのよ。パッセルベルでは先輩主婦が新婦のドレスを縫うのは昔からのことなのだから」

ミイミはそう言つて笑いました。マラーニヤも、

「そうそう。これは先輩からの激励と、これからのミントちゃんの幸せを祈るって意味があるんだからね」

ミイミとマラーニヤは頑張つて、二日間表裏のかなりのところを仕上げました。

「さて、じゃあ全部縫つてしまふ前に、モルガナさんのレースを合わせてみないとね」

翌日、ハナハナはニヤと一緒にモルガナ婆さんの家へレースを受け取りに行きました。

家の前まで来ると、またつんと薬草を煮るにおいがしました。

「こんにちは」ハナハナはドアをノックして、声を掛けました。中からモルガナ婆さんの

声で、「お入り」返つて来ました。

ハナハナとニヤは、そつとドアを開けて家の中へ入りました。モルガナ婆さんは、二日前と同じようにかまどの前に立っていました。

した。かまどには、大きな鍋が掛けられていて、中身がぐつぐつ音を立てています。

モルガナ婆さんは、鍋を掻き回していた木杓子をかまどの脇の調理台に置くと、二人を振り返りました。

「レースを取りに来たんだろ。出来てるよ」

婆さんは前掛けで手を拭きながら、長い胴体をくねくねくねらせて隣の部屋へ入って行きました。

ハナハナとニーニヤは、どうしていいか分からず、じつと息を殺して薬臭い台所で待っていました。

モルガナ婆さんは、すぐに台所へ戻って来ました。

「ほら」渡されたのは、ハナハナが二日前大繭の糸玉を入れて持ってきた籐籠でした。

ピンクの小花模様の、大判のハンカチが掛けられた籐籠を、ハナハナは手に取りました。

「あの……、中見てもいいですか？」

聞いたハナハナに、モルガナ婆さんは素っ気無く「ああ」と、頷きました。

ニーニヤとハナハナは、こわごわ、ハンカチを外しました。

そこには、大繭のつやつやした糸で出来た、素晴らしく綺麗なレースが、きちんと畳まれて入っていました。

「うわあ……」思わず感動の声を上げたハナハナ達に、モルガナ婆さんは言いました。

「スカートとベストに付けて、少し余ると思うよ。余ったらブーケの飾りにでも使いなさいと、ミイミとマラーニヤに言っとくれ」

「はい」

二人は笑顔で挨拶し、婆さんの家を出ようと思いました。すると、婆さんが二人を呼び止めました。

「その柄は、昔ラーラの姉さんのウェディング・ドレスにも使った柄だ。豆の花とポピー。」

「どちらも幸福の象徴だよ」

私には縁が無かったけど、と呟いた婆さんの声を、ハナハナはそっと胸に仕舞って玄関を出ました。

モルガナ婆さんのレースは、それは見事にドレスを飾りました。偶然にも、ネービルさんが作ったベールも同じ花の柄で、仕上がったドレスを着たミントさんは、とっても嬉しそうでした。

そして。

長老の家が完成した二日後、トッドさんとミントさんの結婚式が、完成した長老の家で行われました。

村中の人が集まって、二人をお祝しました。もちろん、ハナハナとニーニヤも出席しました。

「とっても綺麗なお嫁さんね」

ニーニヤは、飲み物を運ぶお手伝いをしながら、すれ違ったハナハナに言いました。

ハナハナは、おつまみを乗せたトレイを持って頷きました。

「私達も、お嫁に行く時にはみんなにドレス作ってもらえるのかな」「きつと作ってもらえるよ。そうだ、今からマーマおばさんに頼んでおこうよ」

二人は話し合って、ふふ、と笑いました。

夏は真つ盛り。トネリコの木の葉はますます緑を濃くしています。きいちご酒で真つ赤な顔になった村長が、同じく真つ赤な顔のボツへさんにお祝を言っ

ています。ボツへさんは、もう泣きそうな顔で頷いていました。

大きな声で歌を歌う人、それに手拍子をする人。みんな嬉しそうです。

そんな様子を、モルガナ婆さんが少し離れた所から、ぶどう酒を飲みながら見ているの

に、ハナハナは気が付きました。

声を掛けようかと思いましたが、レースを取りに行った時の婆さんの眩きが、ふっと思

い出されました。

きつと、モルガナ婆さんは今はまだ一人でいたいんだ。

そつとしておいてあげようと、ハナハナは木陰でくつろぐ婆さんから静かに目を逸らしました。

その7 ウエディング・ドレス 完

その7 ウェディング・ドレス(5) (後書き)

その7 ウェディング・ドレスはこれで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

次は、その8 風車小屋 です。

どうしても風車作りを諦め切れないリックは、ボツへ親方に
直談判！

さて、どうなりますことか？

お楽しみに。

その8 風車小屋（1）

長老の家が完成したのは、夏もそろそろ終わりに近付いた頃です。パッセルベルの村では珍しい二階建ての家は、長老の希望で1階は村の集会所になりました。

もちろん、最初に使ったのはボツへさんの娘ミントさんと大工見習いのトッドさんの結婚式でした。

その前日に、ボツへさん達大工さんと長老と村長の家族だけで、簡単な完成式をやりました。

結婚式のために用意したワインと果実のジュースをちょっとだけ貰い、マラーニヤが作ったオードブルで乾杯しました。木ねずみ三兄弟の長男リックも、ボツへ親方の許しが出て出席しました。

「いやー、やっと完成したのお」

長老は嬉しそうに、ワイングラスを片手に部屋中を見回します。ボツへ親方は得意げに長老に話しました。

「特に、壁の収納棚に工夫を凝らしたんですよ。あれなら人の邪魔にならずに色んなものを片付けておけます」

「そうそう。集会所ってんで親方、どうやってみんなが便利で広く使えるか、一生懸命考えていなすったものな」

大工仲間も、みんな出来上がりに上機嫌です。長老はますます満足な顔で、

「うむ、うむ」と頷きました。

大人達がやつと出来た家を誉めている中、リックは一人で不満でした。

とっても綺麗に出来た家ですが、彼にはどうしてももうひとつ、付けたかったものがあったのです。

それは、風車でした。

お父さんの手紙で風車を見て以来、リックはどうしてもそれを自分で作ってみたくて仕方無かったのです。

難しいのは百も承知しています。だから、ボツへ親方にも相談しました。

でも。

「風車あ？ そんなもの取り付けて、何になるんだ？」

検討さえされずに却下されました。

それもそうです。風車は元々、海辺や水辺の水面より低い場所の水を掻き出したり、ま

たは水の少ない農地で小麦の精製をしたりするのに使われます。

森に囲まれたパッセルベルは、農地にする土地がありません。水汲みなどにも風車は使

いますが、マーフの泉があるのにわざわざ地下水を汲む人はいません。

まして、長老の家はトネリコの最頂上。そんなところに風車を作っても、何にもなりません。

「でも、あつた方がかつこいいと思うんだよな」

葡萄のジュースをなめながら、リックはひとり呟きました。

「どうしたんだい？ 難しい顔をして」

お酒を飲んで歌い騒ぐ大人達から少し離れて立っていたリックに、トッドさんが寄って

来ました。

親方のお弟子の中で一番若いトッドさんは、リックの面倒もよく見てくれます。

明日はミントさんとの結婚式で忙しいので来なくていいとボツへ親方に言われていまし

たが、兄弟子や仲間の大工さんがお祝に行くのに、一番下っ端の自分が私事で行かないと

いうのは失礼だと、完成式に出ました。

それでも明日のことを考えてワインは遠慮したトッドさんは、リックと同じ、葡萄ジュースの入ったカップを持っています。

リックは言いました。

「トッドさん、パッセルベルの家に風車があつたら、やっぱりおかしいですか？」

「ははあ、やっぱりまだその事を考えてたんだ」

ボツへ親方に風車の話をした時、側にいたトッドさんも聞いていました。

「おかしいっていうよりか……。必要ないからなあ。第一、トネリコの枝が伸びたら風車の羽が邪魔になるよ？」

言われて、リックはなるほど、と思いました。

確かに、木の上で暮らすパッセルベルでは大きな風車の羽は邪魔です。

「風車つてさ、山とか遮るものがあんまりない場所に建ってるのがかっこいいんじゃないのかな」

「……そうかも」トッドさんの言う事には一理ありました。リックは真面目な顔で頷きます。

その様子に、トッドさんはくすつと笑いました。

「それでも、風車を作ってみたいんだ？」

「だって……」 凶星を言われて、リックはちよつと恥ずかしくなつて下を向きました。

「まあ、気持ちは分かるけどね。僕も、早く仕事を覚えて、親方みたいにこんな素敵な家

を作つてみたいもの。でも、風車は難しいよ、きっと。僕も実物は見たこと無いけど、確

か建物はレンガで円形に作るんだつたよね。だとしたら、やっぱりパッセルベルでは無理

だよ」

レンガはしつくないなどで止めねばならず、トネリコの枝の上では土台を組む事が難しいのです。

「それに、この辺りの森の木に比べたら、レンガは積むと重くなるし。大きな風車小屋は

絶対作れないよ」

その8 風車小屋(2)

「じゃあ、木の風車小屋だったら大丈夫ですか？」

「え？ ……うーん、それは親方と話してみるしかないかな。そもそもリック、何処に風車を作ろうと思ってたの？」

リックはちよつと考えて、答えました。

「長老の家の脇の……、空き地に……」

本当は、長老の家の屋根に付けたかったのですが、トッドさんの話から、それは無理

だとリックにも分かりました。なので、「空き地」と答えたのです。トッドさんは少しびっくりしたような顔をして、それから優しく微笑みました。

「そつか。なら長老のご許可も必要だね。……そうだな、今は無理だけど、リックが一人

前になった頃、もう一度親方に話してみなよ。それまでに、パッセルベルで風車がどんな

利用法があるのか、考えておいてごらん」

どんな利用法、と言われても、リックにはすぐには思い付きません。

風車は風の力で羽を回し、水を汲んだり粉を挽いたりするもの。

他にどんな使い道があるのでしょうか？

リックは、完成式でみんなが楽しくおしゃべりしている間中、ずっと風車の利用法を考えていました。

翌日の、トッドさんとミントさんの結婚式の最中も、ずっと一人で黙り込んでそのことを考えていました。

「どうしたの？」みんなが集まる賑やかな場でいつも人一倍元気なリックが大人しいのに、

ハナハナは不思議に思っ て声を掛けました。

「うつわっ！」

普段は着ない、ピンクのワンピースを着たハナハナは、覗き込まれてびっくりにして飛び

上がったリックに、くすくすと笑いました。

「なあに、そんなに驚いて」

「ああ、ハナハナ。あ、うん、ちょっと考え事」

「もしかして、風車？」

リックが風車を作りたいと最初に話したのは、弟達とハナハナにでした。

リックは、照れくさそうに「うん」と言いました。

「でも、ボツへさんにはダメって言われたんでしょ？」

「親方はダメだとは言っ てないんだ。ただ、作っ ても無駄なんじゃないかっ て……」

「それっ て、ダメっ てことなんじゃないの？」

「うーん……」

リックは、ぽりぽりと薄茶の毛並みの頭を掻きました。

「昨日、トッドさんと話したんだけど、パッセルベルで風車が利用出来るっ ていうのを考

えれば、親方も話を聞いてくれるかもしれないっ て」

「ふうん？」ハナハナは、持っ ていたお皿からオードブルをひとつ、摘んで口に入れまし

た。

「だから、何かそういう、風車を使っ てする方が便利な仕事がないかなっ て……」

「風車っ て、お水汲んだりも出来るのよね？」

「あと、小麦や豆を粉にしたりね」

「お水汲みっ て、村では毎日下のマーフの泉にまで行かなきゃなら

ないでしょ？ お母さ

ん達は大変だよね」

ハナハナの言葉に、リックははっと気が付きました。

「そかつ！ 長老や村長さんの家から泉までは遠いもんなんつ、風車で泉からここまで水を

汲み上げる事が出来れば……」

「それ、いいアイデアじゃない？」

「ありがとつ、ハナハナつ。これで親方に許可貰えるかもしれないっ」

リックは早速、ボツへさんのところへ飛んで行きました。

ボツへさんは丁度、結婚式の場所を貸してくれたお礼を長老に言っているところでした。

「本当に、この度はありがとうございました」

「なんの、わしはみんなにこの家を利用してもらおうと思ってな」

「親方っ！」リックに大声で呼ばれ、ボツへさんは何事かと振り向ききました。

「何だ？ どうした？」

「風車の利用の仕方、思い付きましたっ！」

「風車あ？」こんな時に、なんだ、とボツへさんは呆れました。

「あのなリック、今は忙しいんだ。その話は後で……」

「いやいやボツへさん、面白そうな話じゃないか？」

長老が、助け舟を出してくれました。リックはぱつと顔を輝かせ、話し出しました。

「あのっ、風車って粉を挽いたり水を汲んだりするんですけど、村の水汲みって大変ですよ、だから、風車の力でトネリコの上まで水を汲み上げたらどうかなって」

一瞬、長老とボツへさんは顔を見合わせました。リックは、何か変なことを言ったかな、と不安になりました。

と、長老がにっこり笑いました。

「リック、考えはよいがの、水は溜めるとかなり重くなる。このトネリコの枝が、溜めた

水の重みで折れはせんかの？」

その8 風車小屋(3)

リックは「あ」と思いました。

確かに、水はたくさん溜めると重くなります。トネリコの木がいくら丈夫でも、水を溜めておく程ではないでしょう。

また考え込んでしまったリックに、ボツへさんは小さく溜め息を付きました。

「まあ、どうしても作りたいっていうなら、まずはちっちゃい模型を作ってごらん。それがよく出来たら、考えてみよう」

親方の提案に、「はいっ」と、リックは顔を上げました。

結婚式から三日後。

リックは親方に言われた模型作りに夢中になっていました。

外遊びもせずに工作をしているお兄ちゃんを、応援している弟達は静かに見守っていました。

「すっごい真面目に作ってる」

良く晴れた午前中、ミイミの家の裏の物干し場へ来たニックとマツクは、兄の近況をハナハナに報告しました。

「設計図とかもちゃんと引いて、木切れをいっぱい親方のところから貰って来て、いろんな

長さに切って貼って……。兄ちゃん夢中で作ってる」

「そう。そんなに頑張ってるんだ。楽しみだね」

モモのエプロンを枝に掛けながら、ハナハナはにっこり笑いました。

「うんっ」ニックとマックも、自慢げににつこり笑いました。
「頑張ってる兄ちゃんは、僕達の誇りだから」
「そうだね」

ニックが言った時、表の方からそのリックの声がしました。

「おおいつ、ハナハナっ！」

「あ、兄ちゃんだっ」

「うわさをすれば、ね」

ばたばたと、リックが走って物干し場へやって来ました。

「出来たっ」

「え、模型完成したの？」ハナハナは洗濯物を干す手を止めて、リックの側へ寄りました。

「うんっ。??ほらっ」

リックは、大事に持って来たものを、近くの平らな枝の切り口の上に乗せました。

それは、ハナハナが両手にもって丁度いいくらいの大きさの風車小屋でした。

小屋は普通の家の形で、ちゃんと窓も扉もあります。

「うわあ、よく出来てる」

「ほんとだ」

子供達が輪になっているのに気が付いて、ミイミも寄って来ました。

「あらリック、風車の模型、出来たのね」

「うんっ。でね、羽が回るようにしたんだ。……ほらね」

リックは指で風車の羽を軽く突きました。言った通り、羽はくるつと軽く回りました。

「すっごい」

「大したものねえ」

「やっぱり兄ちゃんだっ」

マックが嬉しそうに言いました。

「これを実物にしたら、すっごいかっこいいね」

ハナハナは、模型に顔を近付けて言いました。リックは「うーん」と頭を掻きました。

「でも、まだ親方に見せてないし……。何に使うか決まってないし」「風車って、粉を挽くのに使うのよね?」「ミイミが言いました。」「野菜とかの皮向きに使えるのかな?」

「それは無理でしょ。でも、潰したりするには使えるかも」「そっかつ!」

リックはぴょんつ、と飛び跳ねました。

「粉にするんじゃないかって、野菜潰したりするのに使えるんだっ」「親方に言ってくる、とリックは駆け出して行きました。

「あ、風車小屋っ!」

ハナハナは、呼び止めて忘れ物を指差しました。

「僕が持つてくっ!」マックがさつと模型を抱え、兄の後を追って駆け出しました。

「じゃまた後でっ!」

その後を、ニックが追い掛けて行きました。

「……忙しいね」あっという間に三人居なくなつて、ハナハナは茫然として言いました。

「許可が出ればいいわね」

ミイミはくすつと笑いました。

その8 風車小屋（4）

ハナハナの家を飛び出したリックと弟達は、全速力でボツへ親方の仕事場へ向かいました。

ボツへ親方は、自宅のある枝と同じところに仕事場を作っていました。

いつも開いている仕事場の玄関に、三兄弟は息を切らしながら入りました。

「親方っ！」

「お、どうしたリック」

親方は、丁度25丁目のムササビの妖精から頼まれた家の図面を引いているところでした。

「あのっ、風車小屋なんですけどっ」

「うん？」

「じゃがいもとか、パンの実を潰すのに使えるんじゃないかって」

「ほお？」ボツへ親方は、仕事の手を止めリックを見ました。

リックの後ろにいたマックが、小さな声で「兄ちゃん」と呼び掛けました。

「模型っ」

「あ、そだっ」

リックは慌ててマックから模型を受け取り、親方に見せました。

「おお、よく出来たじゃないか」

ボツへ親方は模型を手に取ると、側の丸木のテーブルに乗せました。

「こうして見ると、木の風車小屋も悪くないな。で、野菜を潰すのに使ったって？」

「あ、はい。中に臼を取り付けて、杵を風車の力で動かせば簡単に野菜を潰せるかなって」

「ふうむ……。けどそれだけじゃあ、利用価値は低いかなあ」

「……ダメ、ですか？」

またもやの親方のダメ出しに、リックはもう泣きそうな声で聞きました。

「……いや。まあ、おまえがこんなに熱心にやってるんだ、ひとつ長老と相談してみよう」

「やったあつ！」リックは元より、ニックとマックもその場でぴよんぴよん跳ねて喜びました。

親方が長老に相談すると、「面白いかもしれんの」という返事でした。

親方の許しも貰い、長老も隣に立てていいと許可を出してくれて、いよいよリックは風車小屋作りに乗り出しました。

ただし、

「あんまり大きいのはダメだぞ。そうだな、おまえ達がしゃがんで入ってやつとくらいのからだな」

というのも、大きな材木はまだまだリックの手には負えないからです。

親方にそう言い渡されてちょっと悔しいリックでしたがそれは仕方ありません。

図面はボツへ親方が、仕事の合間を見て引いてくれました。練習になるからと、監督にトッドさんが付きました。

リックは木の釘の打ち方や、木材の簡単な組み方をトッドさんに習いながら、作業を進

めました。毎日毎日、弟達と一緒に長老の家の隣の空き地に通い、一生懸命材木にかんな

を掛けたりのこで切ったりしました。

始めてから一週間。

ある程度小屋の方も出来上がり、親方が用意した小さな臼と杵、それに風車の力を杵に

伝える心棒が、取り付けられました。

「あとは本体の風車だねっ」

帰り道、毎日兄の作業を見ていた弟達は、嬉しそうに言いました。

「うーん……」

「どしたの？ あと少しじゃない」

あんまり気が乗らない風のリックの返事に、ニックとマックは兄の顔を覗きました。

「ちよつとな、困ったことがあるんだ」

「なに？」

「風車の羽つて、木の骨組みの上に布を被せて風を受けるようにしてあるんだ。その、布

がさ、無いんだ」

あ、そっか、と弟達は顔を見合わせました。

「結構、おつきな布が要るよね？」

「どうするの？」

「うーん……。一応親方に相談してみるけどさ……」

困った顔をしたまま、リックは家に戻りました。

「ただいま」

家に着くと、珍しいことにマーマおばさんは何処かに出掛けてまだ戻っていませんでした。

「おかあさん、何処行つたのかな？」

マックが、隣の部屋へ見に行きました。

「珍しいね、こんな時間に出かけるなんて」

そうだね、とニックが言った時。

その8 風車小屋(5)

「兄ちゃんっ！ ニック兄ちゃんっ！ ちょっと来てっ！」

隣室からマックが大声で二人を呼びました。

何事かと、兄二人は隣室へ向かいました。

マックはマーマおばさんのベッドの下から、なにやら白い布を引っ張り出していました。

「この布、すごくでつかいよっ！」

「こらマックっ、それはお母さんが何か頼まれて作る時のやつだろ？ ダメだよ」

「でも、お母さん頼まれものの洋服の生地は、そっちのタンスにいつも終うよ？ これは

余ったのじゃないの？」

マックの言葉に、リックとニックは顔を見合わせました。

「でも……、これ、ずいぶんおつきいし」

「これから何か作るんじゃないの？」

「違うよきつとつ。元々もつと大きくて、余ったんだよっ！」

「……そうかなあ」何だかとっても綺麗な布を、リックはマックから受け取りました。

「すごく光ってる」

「これで風車の羽の布を作ったら、すごく綺麗だと思っただけど」

三人は、大きな布をじつと見詰めました。

リックが、言いました。

「これだけあるんだから……。ちよつとくらい貰っても大丈夫かな？」

「うん……、多分」とニック。

「絶対大丈夫だよっ！」マックは大きく頷きました。

そうだよ、と二人の言葉に納得して、リックは布を大きく広げました。

「マーマおばさんの裁縫箱を探し、中から布鋏を取り出すと、
「ちよつと貰うね」と言つて、四分の一程を鋏で切り取りました。
「足りる？」

心配そうに聞いたマツクに、「多分ね」とリックはにっこり笑い
ました。

布も見付けて、風車小屋はいよいよ完成です。

リックはマーマおばさんのベッド下から失敬した布を、ボツへ親
方の工房の隅でちくち

くと縫いました。

縫い物は、お母さんのを見ているせいか、リックは結構得意です。
「ずいぶん綺麗な布を持つて来たなあ」

作業を覗きに来たトッドさんは、布を見るなり言いました。

「何かこれ、どっかで見た事ある布だね？」

「そうですね？」

「うん。このとっても光沢のある感じって……。ああそうだ、ミン
トが結婚式に着たドレ
スっ！」

「え？」

それで初めて、リックはその生地がウェディング・ドレスのもの
であるのに気が着きま
した。

「立派な生地だものねえ。これって、もしかしたら、もう一着分な
んじゃないのかな？」

「だとしたら……」かなりまずい、とリックが青くなった時。

「リックっ！」

マーマおばさんが工房の前に現れました。

「おっ、お母さん……」

「あんたったらっ！ ドレス用の布を切ってしまったんですってっ

？」

「マーマおばさんは工房へ入って来て、リックの持っている布を見るなり真っ赤な顔になりました。」

「なんて事をしたのっ！ これはっ、パッセルトーンの生地屋さん頼まれて作るドレス用のもののよっ！ それを、あんたって子があっ！」

「ごっ、ごめんなさいっ！」

「ごめんなさいも何ありませんっ！ …… ああああっ、こんな変な大きさに切ってしまっ！ これじゃあもう、ドレスに出来ないじゃないのっ！」

「おばさんは厳しい顔で、大鹵の大事な絹地をそっと持ち上げました。」

「もう……。これがいくらするものだと思ってるのっ？ これはねえ、あんたの作った粗

末な風車小屋なんかの部品にするような布じゃないのっ！ とって

も高価なものなのよっ！ それを……」

「ごめっ、ごめんなさいっ！」

「何時に無くすごい剣幕のお母さんに、これは本当に大変なことをしてしまったと、リックは改めて思いました。」

「僕……、どうしたら……」

「半分泣きべそになりながら、リックはおろおろとお母さんとトッドさんを見ました。」

「マーマさん」

「トッドさんが言いました。」

その8 風車小屋(6)

「それは、ミントのウェディング・ドレスと同じ生地ですよ？

それを、もう一着作る

予定だったんですか？」

「ええ。実は、この大繭の生地を安くしてもらう代わりに、その生地屋さんが貸し出し用

のドレスを作って欲しいと言うのを引き受けたんです。……ああでもっ、これじゃもうち

やんとした形に縫う事も出来ないわ……」

「弁償したら、いくらくらい？」

「マーマおばさんは、トッドさんを見上げました。

「ああ、いえ……。トッドさん達にはお話し出来ませんよ。これは、頼まれた私の失敗だもの」

「でも、ミントのドレスを縫うために、工面して頂いた訳ですから……」

トッドさんは済まなさそうに言いました。マーマおばさんは、律儀な若者につこり笑いました。

「いいえ。これはパッセルベルの昔からの伝統ですから。ウェディング・ドレスは頼まれ

た先輩主婦だけが負担するのじゃなて、村の主婦みんなが新婦にお祝として送るのよ。だ

から、ご亭主のあなたは気にしなくていいの」

言つて、マーマおばさんはリックを見ました。泣きじゃくっている息子にひとつ溜め息をついて、微笑みました。

「……しちゃったことは、仕方ないわね。しょうがない、生地屋さ

んに謝って、なんとか方法を考えてみましょう」

「ご……、ごめ、んなさい……」涙と鼻水ぐしょぐしょになりながら、リックはまた謝りました。

翌日、リックはマーマおばさんと共にパッセルトーンの生地屋を尋ねました。

訳を話して謝ると、生地屋の赤猫の妖精の店主は分かってくれ、快く新しい布を出してくれました。

切ってしまった布の方は、改めて売り物の服を一着作ること話が決まりました。

「それから、これは私からリックくんへのお祝」

そう言って、店主は少し古ばけた厚地の麻布を一反、奥から出しました。

「実はこれ、だいぶ以前に炭屋の旦那さんから注文されたんですけど、生地が良すぎて高
いって、納品を断られてしまったものの。ずっとあっても売れないし、風車の羽になら
びったりだと思うから」

「いいんですか？　こんなに？」

驚くマーマおばさんとリックに、店主はにっこり笑いました。

「いいのよ。その代わり、と言っては何だけど、これから少し出来た服を置こうと思うの。」

前にも言っただけど、最近の若い娘さんは仕立物が下手だから、生地が売れないし。その出

来合いの服の仕立てを定期的にマーマさんに頼みたいのよ」

「まあ、ありがとございます。是非やらせて頂きます」

「仕立て代なんかは、後で話し合いましょう」
マーマおばさんとリックは改めて店主に礼を言い、お店を出ました。

パッセルトーンの生地屋から貰った麻布は、とても丈夫で風車の羽にぴったりでした。

完成した風車小屋は、大人が一人やつと入れる大きさでしたが、杵は風車の力で ちゃんと動きました。

「すつごい、じゃがいもがみるみる潰れてくつ」

窓から白の中身を覗いたニツクとマツクは、お兄ちゃんの初仕事の出来栄えにニコニコです。

「いいねこれ。お豆とか、たくさん潰さないといけない時に便利」
じゃがいもをふかして持ってきたハナハナも、とん、とん、とゆつくり動きながら中身を潰して行く杵の動きに、につこりしました。

「やったねリック。上出来だね」

「まあね」リックはトネリコの梢を吹き抜ける風にゆったり回る風車を見ながら、えっへん、と胸を張りました。

「でも、ほんととは親方の図面がいいからなんだ。羽がよく回るように工夫してあって、さすがだよ」

「お、よく回ってるな」

リックが誉めた所へ、ボツへ親方と長老がやって来ました。

「中々いい出来じゃないか。初めてにしちゃ立派なもんだ」

「いえっ、親方の図面のお陰と、トッドさんの助言のお陰です」

真面目に答えたリックに、ボツへ親方はあっはっは、と大声で笑

いました。

「なあに、リックが強情に言い続けなけりや出来無かった代物だ。うん、中々いい腕している」

「ほんとにの。こりや面白いもんだわい」

風車の羽を見上げ、長老も、目を細めて微笑みました。照れくさそうに鼻を頭を掻くと、リックは

「ありがとうございます」と二人にお礼を言いました。

「これからももっと勉強して、いい大工になるんじゃよ」

「はいっ」

ややあつて、朝の仕事がひと段落したお母さん達がやって来ました。

風車小屋の窓から杵の動きを覗いて、みんな感心していました。

「これならパンの粉も挽けるかもねえ」

「それなら、村でパンが焼けるかもねえ」

「あら、それいいわね」

口々に風車を誉めるお母さん達に、リックも弟二人も得意気ででした。

「そう言えば、ママおばさんのドレスも出来上がったって？」

ハナハナが聞くと、リックは「うん」と頷きました。

「タベ縫い上がって、今日パッセルトーンに持ってた。すっごくいい出来だって」

「そう、よかったね」

少し強い風が吹いて来て、風車が少しだけ早く回りました。

ハナハナは、ごんごんという杵の音を聞きながら、リックはきつといい大工さんにな

るね、と微笑みました。

その8 風車小屋 完

その8 風車小屋(6) (後書き)

その8 風車小屋は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

次は『わがままエマ』。

パッセルベルの子猫の妖精の中でも、お嬢様気質で
わがままなエマ。

ハナハナは、エマが苦手です。

さて、どんなことが起きますか……？

楽しみに！

その9 わがままエマ(1)(前書き)

今回は、新しい友達、子猫の妖精エマの登場です。

でも、このエマ、ちょっと困ったさんで、ハナハナも手を焼いています。

さてさて……

その9 わがままエマ(1)

パッセルベルのトネリコ枝3丁目に、エマという子猫の妖精が両親と一緒に住んでいます。

エマは9歳、銀色の毛がふわふわした、とっても可愛い女の子です。

お母さんのナニイも娘の可愛いのが自慢で、周囲の人もそう言います。でもそうやって誉められる事が、ちょっとエマをわがままな子にしています。

いつものように洗濯物を干しているミイミとハナハナの側で、その日は珍しくモモがお人形遊びをしていました。

「……そうしたら、うさちゃんが遊びに来ました。『まあモモチゃん、今日はとっても可

愛いわね』『まあありがとう、うさちゃん』」

モモが持っているお人形は、ふたつともミイミが作ってあげたものです。そのうちひと

つは、モモに似せて、クリーム色の毛をした子猫の妖精の人形でした。

「モモはそのお人形、大好きね?」

靴下を干す手を止めて、ハナハナはモモの仕種に笑いました。

モモは大きく「うんっ」と頷き、子猫の人形を抱き締めました。

「モモね、モーちゃんがお人形の中でいちばん好きっ」

「モーちゃん?」

「うん。モモの妹だから、モーちゃん」

なるほどね、とハナハナはまた笑いました。

「ハナハナ、悪いけど薪の側にあるあのもうひと籠、こつちへ運んでくれる？」

ミイミに頼まれて、ハナハナは「はい」と洗濯籠を取りに行きました。

「あつ、モモもお手伝いするっ」

モモがふたつの人形を座っていた枝に置いて、ハナハナの後を追いついて来た時。

「こんにちは」

可愛い声と共に、エマが家の横からひょっこり顔を出しました。

「まあエマ、いらっしやい」

ミイミが微笑みました。それに対して、エマはスカートの裾をちよつと摘んで膝を折る、

人間の女の子がするお辞儀をしてみました。

とっても可愛い笑顔でしたが、ハナハナは少し嫌な気分になりました。

エマが大人にはいい子振るのは、パッセルベルの子供達はみんな知ってる事です。

?? 何しに来たのかなあ。

ハナハナがそんな気分にいるのもお構いなく、エマはどんどん裏庭に入って来ました。

見ると、左腕に大きめのバスケットを下げています。

「あのね、昨日父様がお仕事からお帰りになって、エマにお土産をたくさん下さったの。

人間の街の珍しいおもちゃなんかがあるから、ハナハナとモモにも見せたくって」

「あらそう」どうせ自慢したいだけなのは分かってるんだ、などと思いつながら、ハナハナ

はわざとにつこり笑いました。

エマはさっきまでモモがお人形遊びをしていた枝へ、さつさと座りました。

モモが大事に置いておいたふたつのお人形を乱暴に横へ退かすと、自分が下げていたバスケットを、そこへどん、と置きました。

「あー……！」

モモは怒った顔をして、小枝の方へ退かされた自分のお人形を取りに行きました。

ハナハナは洗濯籠をミイミの側へ運ぶと、モモのところへ行きました。

「大丈夫？」

「うん」お人形を抱えたモモは、ハナハナに頭をそつと撫でられ悔しそうな顔で頷きました。

そんな二人の様子など全く目に入っていないエマは、いそいそとバスケットの中から自

慢のおもちやを出して並べています。

「ねえつ、これ可愛いでしょ？ ガラスのネックレス。こっちは指輪。この小さいのは粘土のうさぎのお人形。とってもきれいでしょ？」

「……そうだね」

得意になって説明するエマに、ハナハナは気の無い返事をしました。

「それからこれはね……」

「私、まだお姉さんのお手伝いが残ってるから」

ハナハナはモモの肩をぽんと叩いて、ミイミのところへ戻りました。

モモは、どうしようかな、と一瞬迷いましたが、エマのおもちやにも興味があつて、その場に残りました。

「ふうん、母様のいない子は大変ね」

ハナハナは瞬間、エマをひっぱたきたい気持ちになりました。く

るりと向きを変えて歩

き出そうとする妹を、ミイミが止めました。

「だめよハナハナ。喧嘩はダメ。笑って『そうね』って言うっておきなさい」

ハナハナは姉の言葉に怒りをどうやら堪えました。

と、モモが言いました。

その9 わがままエマ(2)

「なんでそんなこと言うの？ お姉ちゃんは一生涯懸命お母さんのお手伝いしてるのよ」

「あら、ハナハナはモモのお姉さんじゃないでしょ？ お母さんの妹だから、モモにはお

ばさんよ？ そんなことも知らないの？」

「知ってるよっ！」

エマは、膨れっ面になったモモをふふん、と笑いました。

「うそ。知らないからお姉ちゃんって呼ぶんでしょ。母様がいつも言ってるわ。この村の

子はみんなおらかで天真爛漫だって。でも、天真爛漫って、別の言い方するとバカって

ことだって」

「お姉ちゃんもモモも、バカじゃないもんっ！」

怒って興奮したモモは、右手に持っていた子猫のモーちゃんのお人形を振り回しました。

エマは、それに目が行きました。

「あっ、ねえっ、そのお人形、見せてっ」

エマはさっと立ち上がると、自分より小さなモモからお人形を取り上げました。

「可愛いっ！ これどうしたの？ パッセルトーンで買ったの？」

人が怒っている事なんか関係なく、エマは自分の興味を引いたお人形に夢中です。

さっきまで口喧嘩していた筈なのにいきなりお人形を誉められて、モモは何がなんだか

分からなくてぽかんとしました。

わがままお嬢様エマは、答えなんかどうでもよく、気に入ったものを撫で回しています。

そして。

「ねえっ、これちょうだいっ！」

「……え？」

「このお人形、エマにちょうだいっ」

モモは、何を言ってるだという表情になりました。

「だって、それ、モモのだよっ？」

「だからちょうだいってっ！」

「やだ」

「なんで？　ちょうだいよ」

「やだっ」

「じゃあ、エマのこのおもちゃ、全部上げるから」

エマは、持って来たおもちゃとバスケットを指差しました。

「知らない、そんなもの」

「どうして？　人間の街の珍しいおもちゃよ？　こんなお人形よりよっぽどいいものよ？」

漸くお手伝いが終わり洗濯籠を家へ入れようとしていたハナハナ

は、エマのその言葉を

聞いてむっとしました。

やだ以外言い返せない姪の側へ行くと、ハナハナはエマに言いま

した。

「そんなに珍しくっていいものなら、エマが持っていればいいでしょ？　モモのお人形なん

か欲しがらないで」

エマは初めて怒った顔になり、言い返しました。

「違うのっ。エマはこんなのたくさん持ってるもの、これくらいモモに上げたってどうっ

てことないのよ。でも、モモは持ってないでしょう？　お人形と取

り替えて上げるって言

ってるんだから、貰っておきなさいって言ったの」

「やだっ！　そのお人形はモモのっ！」

モモは我慢し切れなくなつて、エマの持っているお人形を掴みま
した。

「返してっ！」

「ダメっ！ これはエマが貰ったのよっ！ 離してっ！」

「あけてないっ！」

「貰ったのっ！」

二人はお人形を、力任せに引っ張り合いました。小さな子猫の妖
精のお人形は行ったり

来たり、エマのモモの間でぶらぶらしています。

このままでは壊れてしまいます。

「エマっ！ モモのお人形を離してっ！」

見兼ねて、ハナハナはエマの手を叩きました。

「痛いっ！」

エマは顔を顰めてお人形を離しました。しかし数秒遅く、二人に
引っ張られていたお人

形は、右手がもげてしまいました。

「あーっ！ モーちゃんが……っ！」

モモは、腕が取れてしまったお人形を見て半分泣き顔になりまし
た。

一方エマは、

「いたあいつ！ ハナハナがぶったあつ！」

わあん、と大袈裟に泣き出すと、自分のおもちゃを終いもせずに
走って出て行ってしま

いました。

「どうしたの？」

先に家に籠を入れに行っていたミイミが、エマが走り去るのを窓
から見ていて裏庭に戻
って来ました。

「モモとエマが、お人形を取り合って……」

「おかあさあんっ！」

その9 わがままエマ(3)

お母さんの顔を見てほっとしたモモは、お人形を持ったままミイミに抱き着いて泣き出しました。

「まあまあ、喧嘩しちゃったのね？」

「モモが悪いんじゃないよ、お姉さん」

ハナハナはミイミにいきさつを話しました。

「……それで、ハナハナがエマを叩いたのね？」

「うん。いけないと思ったんだけど……、あのままじゃお人形が壊れちゃうと思って……」

「そう。でもね、人を叩くことはよくないわ。ハナハナは分かっているからいいけど、今度は

絶対ダメよ？」

「はい、ごめんなさい」

「謝る相手が違うわ。エマに謝らなきゃ」

そう言つと、ミイミはモモを抱き上げました。

「とにかく家へ戻りましょう。エマのところには、それから行きましょうか」

ところが、ハナハナ達が家へ入って間もなく、マーマおばさんが来てしまいました。

「ミイミ、この間のワッフルの作り方、教えてもらいたんだけど、久し振りに旦那さんが帰って来たというので、マーマおばさんは美味しかったミイミの

ワッフルをふるまって上げたんです。

用事があるから後で、という訳には行かなくなったミイミは、
「ごめんねハナハナ、一人で行ける？」

ハナハナは「うん」と頷きました。

元はと言えば自分が捲いた種です。エマの家へは、なるべくなら行きたくありませんが、

覚悟を決めて、椅子から立ち上がりました。

「じゃあ、行って来ます」

ハナハナが玄関から出ようとした時、突然扉を叩く音がしました。
「ミイミさんっ？ ミイミさんっ！」

エマのお母さんのナニイの声です。ミイミはハナハナに奥に戻るようと言うと、ドアを開けました。

「こんにちは」

「こんにちはじゃないでしょうっ？」

ナニイは挨拶もせずに、いきなり家の中へ入って来ました。

「あなたは、一体子供達にどういうしつけをなさってるのっ？」

強く言うと、夏だというのに肩に掛けたレースのショールの方端を引き上げました。

「ハナハナが、エマちゃんを叩いてしまった事かしら？」

「そうよっ！ エマは痛い痛いって、それはもう可哀想なくらいに泣いて帰って来たのよ

っ！ あんな可愛い子を、どうして叩いたり出来るのっ！」

「それはっ！」部屋の奥に居たハナハナは、ナニイの言い方にかっとなって言い返しました。

た。

「エマがモモのお人形を無理矢理取ろうとしたからよっ！」

「そんなはずありませんっ！」

ナニイは、猫というより狐の妖魔のような鋭い目つきで、ハナハナを睨みました。

「エマはとってもおっとりした子なんですっ。人のものを欲しがるなんてそんなはしたな

い事、する子じゃありませんっ！ それに、エマには宅の主人が、

この村のどの子よりた

あくさんおもちゃやお洋服を与えていますっ」

「でもっ、エマはモモのお人形が可愛いから欲しいって、無理矢理引っ張って取るうとしたのよっ！」

「あり得ないわっ！」

「ナニイ」ミイミが静かに言いました。

「確かにハナハナがエマを叩いたのはいけないこと、謝ります。でも、エマがモモのお人

形を欲しがって引っ張ったのも事実よ。それは、エマとモモの両方が悪いわ」

「どうしてうちの子が悪いの？ 大体、ハナハナはリック達いたずら兄弟やら、ニニイの

子供達とも仲が良かったんでしょ？ そんなだもの、乱暴な筈だわ」

それにはマーマおばさんが怒りました。

「ちよつとナニイっ！ うちの子供達の何処がいたずら小僧の乱暴者だっというのっ？」

ナニイは小柄なマーマおばさんを、横柄な態度で見下ろしました。

「あつちこつちでいたずらをしてくして、村中迷惑してるのはみんな知ってると思うけど

？ もしマーマがご存じないなら、それは親としては全く目が届いてないということねえ」

「言わせておけば……っ！ あなたの家のわがまま娘の方が、よっぽど村の人達に迷惑掛け

てるんじゃないのっ！」

「まあっ！ あんな大人しくて可愛いエマの、何処がわがままだっというのよっ！」

その9 わがままエマ(4)

「自分のおもちやだけじゃ足りなくて、人のものまで無理に取ろうとするの、何処がわ

がままじゃないって言うのっ？」

「あなたのとこの悪ガキじゃあないのよっ！ エマはそんなことしませんっ！」

放っておくと何処までも言い募りそうな勢いの二人を、ミイミが止めました。

「二人ともっ、こんなところで言い合いしても仕方ないでしょう？」

「だって悔しいじゃないっ！」

マーマおばさんは涙声で言いました。

「うちの子達、そりや確かに少し腕白だけどっ、そんな、人に嫌われるような事はしてな

いわっ、それを……」

「それが分かってないって言うの。うちのエマはそれこそ虫も殺さないおっとりなのに、

それをわがままで迷惑な娘のように言うなんてっ！ それより、そもそもはミイミ、あな

たの妹がうちのエマを殴ったのが原因じゃあないのっ！」

「それは、だから申し訳ないと……」

「いいえっ、そんな誤り方じゃあ納得出来ませんっ！」

ナニイは、今にも火を吹きそうな形相でミイミを見詰めました。

「私、ここでこんな侮蔑的な言葉を浴びせられるなんて思ってもみませんでしたわっ！

それも含めて、もう絶対にあなた達を許せませんっ！ こうなったら、長老に全て申し上げて、

妖精の長からあなた達をきつく、きつくお叱り頂きますっ！」

怪気炎を上げるだけあげて捲し立てると、ナニイは入って来た時同様、挨拶もしないで

ミイミの家を出て行きました。

乱暴にドアが閉められるのを、ミイミとマーマおばさん、それにハナハナは呆氣に取られて見送りました。

「で、これからどうしたらいいの？」

こじれてしまったエマとハナハナとの問題を、なんとかするのが先です。

ハナハナに聞かれて、ミイミは「そうね」と、ちょっと考える仕種をしました。

「まずは、ナニイがああ言ってるし、こちらも長老に一応事の次第を話しておきましょうか？」

「そうね、それがいいわ」

ワッフルどころではなくなったマーマおばさんは、お昼が済んだら長老を訪ねることを

ミイミと約束して、家へ帰りました。

「さて、それまで時間もあるし。とにかくお昼ご飯を作って食べてしましましょう」

ミイミはいつもと変わらない様子で、よいしょと椅子から立ち上がると、台所へ立ちました。

玄関扉の近くの箆からじゃがいもと玉ねぎを取り、いつもと同じに皮を剥き始めます。

こんな大変な事態でも、ご飯の支度を変わず出来るなんて。

普段通りのミイミの後姿に、ハナハナは自分のお姉さんは大した人だと、改めて尊敬の眼差しを送りました。

お昼が済んで、マーマおばさんが再びミイミとハナハナの家へやって来ました。

その少し前まで、お母さんが自分の事でエマのお母さんと喧嘩してしまったと知ったモ

モが、大泣きに泣いていました。

それをハナハナが宥めて、漸くモはお昼寝に入りました。

モモとフレイが眠ったのを見計らって、ミイミはハナハナを連れマーマおばさんと一緒に、長老の家へ行きました。

新しくなった玄関を叩くと、中からニーニヤが出て来ました。

三人が中へ入ると、ニーニヤは小声でハナハナに言いました。

「来てるよ、エマとお母さん」

「えっ？ もう？」

ニーニヤは真顔でこっくり頷きました。それからいつと笑いしました。

「なんか、いいことしちゃったんだって？」

ハナハナはこそつと答えました。

「エマの事、叩いちゃった」

ニーニヤはうふつ、と笑いました。

「いい気味。あの子しょっちゅうみんなにわがまま言ってる、そのくせ大人とかお母さん

の前ではいい子ぶってて、可愛くないもん」

今二階に居るから、と言うと、ニーニヤは一階の集会所の椅子を三つ揃え、三人に勧めました。

「……何話してんのかな」

呟いたハナハナに、マーマおばさんが、

「どうせ嘘八百よ」

「マーマ」ミイミが苦笑しながら嗜めました。

程なくして、二階の長老の部屋の扉が開く音がしました。

女の人の甲高い声が二階の廊下をこつちへ近付いて来ます。まだ興奮したようにしゃべ

り続けているのは、きつとエマのお母さんナニイでしょう。

果たして、ナニイとエマ、それに長老が、しゃべりながら階段を降りて来ました。

その9 わがままエマ(5)

「ですので長老、何とぞあの人達にきつくおっしゃって下さい。もう酷い嘘でうちの子をいじめないように……」

一階に降りたナニイは、そこにハナハナ達が居るのを見た途端、今までしゃべっていた

口を、まるでクルミ割り人形のようにぱくんと閉じました。

長老はミイミとナニイを交互に見ると、静かに言いました。

「まあ、とにかく両方の話を聞かんとな。……ナニイ、悪いがミイミ達の話が終わるまで、ここで待ってて貰えんかの？」

「あ??はい」

ナニイは、先程とは打って変わった大人しさと頷くと、エマと共にニニヤの用意した椅子に腰掛けました。

長老は二人が落ち着くのを見計らって、三人の方へと寄りまして。「さて。ナニイから事のいきさつは粗方聞いた。で、おまえさん方が言いたいのは？」

促されて、えへん、とマーマおばさんが咳払いをしました。

「お人形を壊したのは、聞いたところエマの方です」

「そんなつ！」ナニイがまた、金切り声を上げた。

「まだそんな嘘を言うのっ? うちの子は……」

「黙らっしやいっ」

長老のひと声で、ナニイは黙りました。ハナハナは、長老がこんな大きな声を出したのを初めて聞いて、びっくりしました。

「あんたの話はさっき聞いた。今はこっちの話を聞いておる。心を落ち着けて、人の話を」

聞いておりなされ」

ナニイが、恥じ入ったように俯きました。

お母さんが萎れたようになったのを、エマは不安そうに見ています。

「ハナハナ」

突然、長老が声を掛けて来ました。

「はい」

「マーマさんの言う通り、かの？」

「あ、ええと……。はい、大体はそうです」

「大体、とは？」

「うん、と……」

ハナハナは少し考えてから、言いました。

「初めは、エマがモモのお人形を欲しがって、自分の持って来たおもちゃと交換してって

言ってました。でもどうしてもモモがやだって言って、エマが無理にお人形を取ってしま

って、それをモモが取り返そうとして引っ張りっこになって。そのままじゃお人形が壊れ

ちゃうって思っ、私がエマの手を叩きました」

「ごめんなさい、と、ハナハナは小さな声で言いました。

長老はふむ、と白い顎鬚を撫でました。

「なるほどの。と、いうことは、エマはモモのお人形が何としても欲しかったんじゃない？」

長老は、な？ とエマを見ました。

「そんなこと……」

お母さんのナニイが言い掛けるのを手を挙げて止めると、長老は「ん？ どうじゃ？」

と、もう一度エマに問いました。

エマは、長老に嘘や言い訳は通じないと思ったようです。ゆっくり俯くと、小さな声で

「はい」と言いました。

人の物を欲しがった事を認めた娘を、ナニイは驚いた顔で見ました。

「まあエマっ！ どうしてっ？ あんなたくさん父様からお人形も頂いてるでしょう？」

お母さんに詰られて、エマはますます下を向きます。

「なんで、モモちゃんのお人形なんか……」

「だって……」

「父様が人間の街で、あなたが気に入るだろうって、可愛いきれいなお人形、この間も一杯持って帰って下さったじゃない」

「だってっ！」エマは、我慢出来ないという風に、大声で言いました。

「だってっ！ モモのお人形は猫の妖精だったんだものっ！ 私とおんなじ姿をしたお人

形だったんだものっ！ 人間のお人形じゃなかったんだものっ！」

ハナハナは、それでどうしてエマがみんなのものを欲しがるのが、やっと納得出来ました。

エマのお父さんは、人間の大勢住む大きな街で、ずっと商売をしています。妖精は人間の街の中では必ず、魔法で人間と同じ姿になります。

そうやって長く人間の姿をしているエマのお父さんは、きつとすっかりそっちの姿に慣

れてしまって、むしろ本来の猫の妖精の姿の方が不思議に思えるようになってしまっていたのでしよう。

だから、娘にも人間のお人形を買ってあげて、それが普通だと思っ

てしまったのです。でも、パッセルベルで暮らしているエマは子猫の妖精の姿です。

人間の子供のお人形は、確かにきれいだけれども、それは自分と同じではありません。

エマは、自分と似た姿のお人形が欲しかったのです。

その9 わがままエマ(6)

それと同時に、他の子供達が持っているような、お父さんお母さんが一生懸命子供達の

事を思つて作つてくれた、手作りのおもちゃが欲しかったのです。

モモのお人形は、ミイミがモモに似せて、クリーム色の毛並みが可愛く揃えられていました。

エマも、自分に似せた銀のふわふわの毛並みの、子猫のお人形が欲しかったのです。

「エマ……」

ハナハナは立ち上がると、泣き出していたエマの前へ立ちました。

「手を叩いたりして、ごめんね」

「ハナハナ……」

「あのね、今度一緒にお人形作らない？ ミイミお姉さん、作るの上手だから、一緒に教わろうよ？」

エマは不思議そうな表情でハナハナを見上げました。そして「うん」と泣き笑いの顔で頷きました。

「よかったの」

長老が、黙つて二人を見ていた大人三人に、にっこり笑いました。

翌日。

村長の家でハナハナ達が勉強していると、ひょいと長老が覗きに来ました。

「あ、長老さま」

気が付いたリックが声を掛けると、長老はにっこり笑って教室に

なっている居間へ、入って来ました。

「ちよつといいかの？ アルベルト先生」

文字を教えていたふくろうの妖精のアルベルト先生は、「いいですよ」と長老に教壇を譲りました。

「ありがとう。??さて。昨日この村でちょっとした出来事があったのは、知ってるかの？」

長老の言葉に、ハナハナと、お母さんのマーマおばさんから聞いて知っていたリックとニックが顔を見合わせました。

エマは来ていません。彼女はナニイの方針で、パッセルトーンから特別に家庭教師を呼んで家で勉強しているからです。

長老は、話が分からない大半の子供が「何だろう？」とざわめくのを、

「まあまあ、知らんならよい」と静めました。

「その事は、まあ別にいいんじゃない。わしが話したいのは、その出来事についてじゃないで

な。……なんで、猫の妖精がこの世界におるか、という事なんじゃない。ハナハナは、長老の不思議な言葉にどきどきしました。

どうして、この世界に自分達猫の妖精がいるのか？ そんなこと、今まで一度も考えた事はありません。

どうしてだろう？ なんで、私達はここにいるの？

長老は続けました。

「……もつずっと、ずつと大昔の話じゃ。この世界には他の世界からの出入り口が、幾

つも開いておった。元々、この世界に先に住んでおったのは、四体

の龍王と人間だけじゃ

った。そこへ、開いた出入り口から他の世界の人々が、来たりまた出て行ったりしておっ

た。その中に、わしら猫の妖精や木ねずみやシマリスの妖精達がおった。

最初、わしらはこういう外見はしておらなかった。もつと違った……、人間から見たら、

得体の知れない形をしておったそうじゃ。そう、人間が悲鳴を上げるやも知れん、途轍も無く奇妙な」

それはどんな姿なんだろう？ ハナハナは想像もつかないそれを、一生懸命考えました。

「じゃが、それでは人間を怖がらせてしまう。それで、わしらのご先祖は得意の魔法で、

この猫の妖精の姿に変わったんじゃ。これなら、びつくりはされても人間に物凄く怖がら

れたりはせんからの。……まあ、魔法で姿を変えられるなら、人間そつくりに変えてもよ

かったんじゃが、それだと仲間同士の見分けがつかなくなるので、猫やシマリスや木ねず

みにした、とも、伝えられたおる。して、何代も何代もこの姿を継続していくうちに、い

つしかこれが本来の姿になった。

わしらのご先祖は、そうやってこの世界へ住み着いた。何でかと言えば、ご先祖がこち

らへ来る直前、『大いなる予言者』がひとつの予言をしたからじゃ。それは、この世界に

別の場所から魔王がやって来て、全てを破壊してしまうという」

子供達は、またざわめきました。

魔王の話は、村の大人達から断片的にですが聞かされて、みんな

大体は知っています。

特に猫の妖精の子供達は、親やその兄弟が魔王と戦った経験を持つている人が多いので、

みんな緊張してぴん、と耳を立てました。

ハナハナも、ミイミからお母さんとお父さんが魔王と戦って死んだと聞いているので、

長老の言葉にはどきっとしました。

「……予言は、二千年前にされたものじゃ。ご先祖が住み着いてすぐに、魔王は手下をこ

の世界へ寄越した。ご先祖はすぐにその魔物達を退治したんじゃ。

じゃが、全部手下を殺

すのではなく、改心して悪さをしないと誓った魔物は許して住み着く許可を与えた。それが、今日居る妖魔達じゃ。

そのうち、ハイエルフや他の妖精族もやって来て、皆協力して魔王に対抗することになった。

ハイエルフが加わった事はとても大きかった。彼等は魔力も武力も、他のどの種族より優れていたからの。

その9 わがままエマ(7)

それから、人間。わしらのご先祖はある程度力を持っている人間にも協力を仰いだ。もちろん龍王にも。

だから、予言から五百年後、本格的に魔王が攻めて来た時には、一致団結して早い時期に魔王を撃退出来た、ということじゃ」

長老は、そこで一度口を閉じました。

リックが「はい」と手を挙げました。

「一度撃退したのに、どうして魔王はまたやって来たんですか？」

「ふむ、よい質問じゃ」長老は微笑みました。

「撃退は出来たのじゃが、魔王を殺してしまうことは出来なかった。なので、魔王は一度

自分の世界に戻り、再び力をつけてこの世界へやって来た。それが、この間の戦いじゃ。

この間の戦いの前、また『大いなる予言者』が予言をした。それは、今度こそ魔王を消滅

させる力を持った者が、この世界に生まれるというものだった。予言では、それは猫の妖

精の子供として生まれる、とされた。その事を知った魔王が猫の妖精達を殺そうとしたん

じゃが、またしてもハイエルフを主力とするこの世界の者達によって撃退された」

「じゃ、また追い払われただけなんですか？」

小ねずみのチャーリーが聞きました。

「そう、追い払われただけじゃ。」

魔王は、従ってまたすぐこの世界にやって来よう。その時のために、わしら妖精族は自

分達の力を蓄えて強くしておかねばならん。それには、どんなことをすればよいと思うかの？」

ハナハナ、と長老に聞かれ、ハナハナは考え考え言いました。

「魔法が……、ちゃんと使えるようにしておく、とか？」

「それもある。では、魔法はどうやって使うのかの？」

小さな子供でも、妖精の子ならちょっとした魔法は使えます。例えば、お菓子を宙に浮かせたり、飛ばせたり。

けれど、それは『どうやって』やっているのか、ハナハナ達は知りません。

長老は「ちょっと難しいかの」と、ずっと教室の隅で黙って長老の話を聞いていたアルベルト先生を振り返りました。

先生はにっこり笑うと、

「『心』です。僕達妖精は、心でこうと思ったことを、現実にする力が生まれながらに備

わっています。でも、心が曇ってしまったたり、歪んでしまったたりすると、その力は弱って

しまい、魔法は使えなくなってしまう」

「そうその通り。実際には魔法だけでは無くて、自分の命まで危うくなる。それくらい、

妖精族にとって『心』は大切なんじや。

その心は、ではどんなことをしたら曇ったり歪んだりするのか？」

リックが、弟の顔をちらっと見ました。ニックは兄の顔を見ながら、手を挙げました。

「ほい、ニック」

「あの、昨日の夜僕ら兄弟で話してたんですけど、もしかしたら、心が曇るのは、人のものを欲しがったり、恨んだり憎んだりすると、じゃないですか？」

「うむ。その通りじゃ」

長老は、白い鬚を振って頷きました。

「それで最初の話じゃが……。昨日起きたちよつとした出来事は、まさにその心の曇りに関係あるんじゃ。」

ある女の子が、友達のおもちゃをどうしても欲しくなり無理矢理取り上げようとした。

友達は、お母さんが作ってくれた大切なおもちゃを取られたくなくて、とうとうその子と喧嘩してしまうんじゃ。

単純に考えれば、無理に友達からおもちゃを取ろうとした子の方が悪いと思えるの？
じゃが、心は違う。

実はどちらもよくないんじゃ。人の物を欲しがる心も、人に下さいと言われて上げない心も、どっちもよくないんじゃ。おもちゃは、もし取られてしまっても事情を話してお母さんに作って貰えればそれで済む。じゃが、喧嘩して壊れてしまった友情という心は、中々直す事は難しい。

妖精族にとって、友情や家族や恋人への愛情は、すぐに自分の命の力となる。これが、
わしらが魔王に打ち勝つ唯一の武器じゃ。だから、無闇に喧嘩して一生心に傷を残すような事をしてはいかん。少しでも自分に非があるなら、素直に謝って大切な友達を大事にするんじゃ」

長老はよつこらしよ、と立ち上がりました。

「やれ、長くなってしまつて、悪い事をしたの。わしの話はこれで終いじゃ」

みんな、しつかり勉強せいよ、と、長老は部屋を出て行きました。
ドアを閉める寸前、長老はハナハナに向かって手招きしました。
ハナハナは何だろう、

と思いながら廊下へ出ました。

「長老さま」静かにドアを閉めて、ハナハナは廊下の窓の下に立っている長老のところへ

行きました。

「さつき、ナニイとエマに会って来たんじゃない」

「……はい」

「今みんなにした話を、エマにも聞かせて来た。ナニイには、欲張りほどほどにせいと、

言っておいた。二人とも、至極反省しておった」

「そうですか」

神妙な表情のハナハナに、長老はにっこり笑いました。

「これからは、モモも含めて、仲良う遊べるな？」

問われて、ハナハナは満面の笑顔で答えました。

「はいっ」

うんうん、と嬉しそうに長老は頷くと、「ではな」と片手を挙げて村長の家を出て行きました。

帰ってから、ハナハナは長老から聞いた話をミイミにしました。

フレイのチョッキの繕いをしながら聞いていたミイミは、ハナハナが話し終えると、

「そうね」と溜め息をつきました。

「確かに、長老のおっしゃる通りよ。でもね、いくら妖精でも人を憎まないのって難しい

わ。だから、そうね……、喧嘩してしまったらなるべく早く仲直りする方法を探す事が、

一番いいことかもしれないわね」

ふうん、そっか、とハナハナは思いました。

喧嘩はいけない。自分達妖精は、『心』で生きているから。

そこでハナハナはふと、最初にエマが失礼なことを言った時、怒ったハナハナをミイミ

が止めた時の言葉を思い出しました。

「ねえお姉さん、エマが私にお母さんがいない子は大変って言った時、私がエマをひっぱ

たこうと思って怒り掛けたら、『笑って「そうね」って言うておきなさい』って言ったよ

ね？ あれも、喧嘩しない工夫？」

「そうよ」ミイミは、小さな妹に、まるで女神様のように微笑みま

した。

「エマが言った事は、つまらない人が言うつまらない言葉。そんなことをいちいち気に掛

けて喧嘩していたんじゃないあ、自分の命が縮んでしまうもの。だから、ああいう言葉は聞き

流してしまうのが一番なのよ」

「……そっか」

隣室でお昼寝していたモモとフレイが、起きて来ました。

ミイミはお水を欲しがる下の子を膝に乗せて、カップを支えて水を飲ませてやります。

ハナハナは、モモにお水を汲んでやりながら、やっぱり自分のお姉さんは凄い、とまた

また改めて尊敬の気持ちを強くしました。

その9 わがままエマ 完

その9 わがままエマ(7)(後書き)

その9 わがままエマは、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

次のお話は、「赤い帽子青い帽子」です。

ミイミの幼馴染みのレニアには、リンドンという弟がいます。

猫の妖精には珍しい、画家のリンドンは、しかし姉が嫁いでは
絵に夢中で家事がろくにできていません。

心配したレニアは、なんとかリンドンにお嫁さんを、とミイミに相
談しますが……

どうなりますことやら。

お楽しみに。

その10 赤い帽子青い帽子(1) (前書き)

秋が訪れるパッセルベル。

これから寒い季節ですが、なぜかハナハナがあつたかい天使に？

その10 赤い帽子青い帽子(1)

トネリコの枝7丁目に、猫の妖精リンドンさんが住んでいます。今年で23歳のリンドン

さんは一人暮らし。二年前に一緒に暮らしていたお姉さんのレニアさんが、パッセルトー

ンの材木商の若旦那のところへお嫁に行きました。

リンドンさんの職業は、妖精の仕事にしてはちょっと珍しい画家です。子供の頃、画家

になりたいと言ったリンドンさんの絵を旅芸一座のトーベルさんが見て、以来画家になる応援をしてくれていました。

去年トーベルさんの知り合いの人間の画商に見せたところ、絶対売れると絶賛、すぐに

街で買い手がつかしました。それから、リンドンさんは画商と手紙でやり取りしながらせっ

せと注文をこなしています。

しかし、忙しくなり始めたリンドンさん、一人暮らしのせいで、家事がおろそかになりがちです。

ともすれば食事も忘れて絵に没頭するリンドンさんに、レニアさんは心配でならないようです。

「どこかにいい人がいないかしら」

久し振りにパッセルベルへ帰って来たレニアさんは、幼馴染みのミイミの家へとやって来ました。

「もう、リンドンったら、洗濯は籠に入れっぱなしだし、お台所は片付けてないし。一日

中絵ばかりで。しかも使い終わった絵の具のチューブがあつちこつちに落つちてるのよつ。やんなっちゃう」

台所で、ミイミが勧めたお茶を飲みながら、レニアさんは溜め息をつきました。

「弟があんなになるんなら、私、お嫁に行かなきゃよかった……」

「あら、それはダメよ。レニア」ミイミが笑いながら言いました。

「亡くなったご両親の代わりに、あなたずっとリンダンの面倒をみて来たじゃない？　お

陰で結婚するのが遅くなつたんだから。それを一番気にしてたのはリンダンでしょ」

「それは、そうだけど。でも、兄妹の面倒を見てるって言ったら、ミイミだって同じでしょ？」

ハナハナは、二人のお茶を煎れ替えながら、そう言えば、リンダンさんってよくマーフ

の泉の側で絵を描いてるな、と思いました。

お姉さんのレニアさんにそっくりな、薄灰青の毛並みをした青年で、黙々とキャンバス

に向かって筆を動かしている姿は、知的でちょっとかっこよかったります。

「誰かい人、いないかしら」

また、レニアさんが溜め息をつきました。

「いないかって……。一人いるんじゃないの？　ほら」

ミイミは、手振りでレニアさんに言いました。ハナハナは誰だろう、とちよつと首を捻

りました。

「ああ、アマダね。……うーん、いい娘なんだけどねえ」

アマダさんは、リンダンの家の隣に住んでいる、猫の妖精の娘さんです。

一昨年一緒に住んでいたおじいさんが亡くなり、今は一人暮らし。おじいさんの仕事だ

った帽子作りを引き継いで、作った帽子をパッセルトーンの洋品店に納めています。

とても大人しい人で、しかも容姿も地味。赤茶の毛並みに、いつも焦げ茶のワンピース

ドレスで、出掛ける時は日傘を差して俯いて歩いています。

「アマンダ、いくつになったのかしら？」ミイミはお茶うけのクッキーを、ぱり、と割りました。

「確か、今年で22歳よ。でもあの娘、大人し過ぎて、ねえ……」うーん、とレニアさんは難しい顔をしました。

「大人しいのは悪い事じゃないわよ。跳ねっ返りよりはいいでしょう？ それに、あれで

結構気さくよ」

「そうなんだけどねえ……。暗いのが気になって」

「それは……」ミイミは、言い掛けて口を噤みました。

ハナハナは、何だろう、とお姉さんの顔を見ました。

「……まあ、ハナハナも知らない訳じゃないから。アマンダのご両親も、レニアや私達の

両親と同じように、魔王と戦って亡くなったの。それから、アマンダはおじいさんとずっと二人暮らしだったのよ」

「両親が亡くなってショックだったのは、彼女だけじゃないんだけどね」

レニアさんが言いました。

「あの娘は、元々内気な子だったから。ご両親の死を聞いて、余計内向的になっちゃったのね」

「そうなんだ」ハナハナは小さく頷きました。

「でも、リンドンとアマンダのこと、悪い話じゃないと思うけど？」
ミイミの言葉に、レニアさんはまたうーん、と唸りました。

「まあ、確かに。でも、アマンダもなんだけど、リンドンも大人しいから困るのよ。とい

うより、あの子ったら、今は絵に夢中で、きっと女の子の事なんか頭にないわ」

「どうにか、気を向かせるように考えないとねえ」

レニアさんとミイミは、同時に溜め息をつきました。

大人の事情って難しい、と、ハナハナはお茶を飲みながら思いました。

その10 赤い帽子青い帽子(2)

翌日。

ハナハナはミイミに頼まれ、7丁目のワトソンさんの奥さんに届けものをしに出掛けました。

朝から風が強く、トネリコの枝がわさわさと揺れています。枯れた葉が二、三枚飛んできて、ハナハナは思わず顔を背けました。

「うっわっ」風にあおられたエプロンを押さえた時、風上から帽子が二個、飛んで来ました。

咄嗟に、ハナハナはエプロンを離して帽子を押さえました。

ひとつは赤い帽子で、脇に赤い木の実と葉っぱのコサージュが飾られていました。もう

ひとつは青い帽子で、そちらは男物のつば広のものでした。

ハナハナが綺麗な二つの帽子に見惚れていると、風上から帽子の持ち主が駆けて来ました。

「ありがとう」

にっこり笑ってそう言ったのは、アマンダさんでした。アマンダさんは、風に飛ばした

帽子の他に、もう五個くらい、帽子を持っていました。

「はい。……あの、これ全部パッセルトーンまで持って行くんですか？」

一人で大変なのは、と、ハナハナは帽子を渡しながら聞きました。

アマンダさんは微笑んだまま、こっくりと頷きました。

「ええそうよ」

「あの、よかつたらお手伝いしましょうか？」

「ありがとう、大丈夫よ。慣れているから」

アマンドさんは、またにつこり笑いました。その笑顔は、まるで満開の金木犀の花のようでした。

小振りながら艶やかな匂いを放つ、愛らしい金木犀の花。

ハナハナがアマンドさんの笑顔に驚いている間に、帽子を受け取ったアマンドさんは、

大きな綿の布で、手早く帽子を包みました。

「じゃあ」

幹の方へ歩いて行くアマンドさんを、ハナハナは黙って見送りしました。

「綺麗なひと……」

ワトソンさんの家への届けものを済ませ家へ帰ったハナハナは、その話をミイミにしました。

「びっくりした。アマンドさんて、ほんとに綺麗な人なのね」

「そお？ そうだったかしら」

そうだよ、というハナハナに、ミイミは小首を傾げます。

「目立たない容姿の娘だと思ってたけれどね。ハナハナがそう言うのなら、そうなのかしら」

「うん、とっても綺麗に笑う人よ。それに、優しいし」

「そうね。優しい人ね。……ああ、だからハナハナは綺麗だと思ったのね」

「え？」お姉さんの不思議な言葉に、ハナハナはきょとんしました。

「優しいと、綺麗なの？」

「そうよ。私達妖精は、心の形がそのままその人の印象になるの。だから、心が綺麗だっ

たり、優しい人は、とっても素敵に見えるのよ」

「そうなんだ」

「アマンドは、物凄く美人ではないけれど、心が綺麗だから、ハナにはとっても美人

に思えたのよ。……いい人ね」

うん、とハナハナは頷きました。

「リンドンさんと、ほんとにお似合いだと思うけどなあ」

ハナハナは、よくマーフの泉で絵を描いているリンドンさんを思い出しました。

とてもハンサムなあの絵書きさんとアマンドさんは、とってもいいお嬢さんお嫁さんになるように思いました。

「ねえお姉さん、リンドンさんとアマンドさん、何とかくつつかないかなあ？」

「まあハナハナ、くつつくなんて、ちょっと乱暴な言い方よ？」

「ごめんなさい。でも、この間レニアさんとお姉さん、話してたでしょ？ アマンドさん

がリンドンさんのお嫁さんになればって」

「そうね……。けど、二人が親くなる切っ掛けが、ないものねえ」

「お隣同士なのに？」ハナハナは首を傾げました。

「アマンドさんがリンドンさんに、お料理のお裾分けをしたり、お庭掃除のお手伝いをし

たり、しないのかなあ？」

ハナハナの家のご近所では、みんなよくやっていることです。

「それをしていてくれれば、話は早いんだけど。アマンドは帽子作りに夢中、リンドンは

絵を描くのに夢中、じゃあね」

小さく溜め息をついて、ミイミはお昼の支度をするために立ち上がりました。

「そっかあ……」ハナハナも、姉に釣られて溜め息を漏らしました。

台所の桶に水を汲む姉の後ろ姿を見ながら、ハナハナはふと、ある事を思い付きました。

「ねえお姉さん、ダンスパーティーって、どう？」

「え？」いきなりの妹の言葉に、ミイミは思わず振り返りました。

ハナハナは、ぴよんと椅子からと飛び下りると、ミイミの隣へ行きました。

「ね？　ダンスパーティー。秋のお月見のパーティーって事で、村の人達に協力してもらえば」

「パーティーねえ。……うん、いいかも知れないわねっ」

午後早速、みんなに話してみましよう、とミイミは微笑みました。

その10 赤い帽子青い帽子(3)

次の日早速、ミイミはネービルさんの家の集まりで、奥さん達にその話をしました。マ

ーマおばさんを始め、マラーニヤやネービルさんまで大賛成でした。「ああ、ダンスパーティーなんて、若い頃を思い出すわ。よく、パッセルトーンの春祭りに、主人と踊りに行ったのよ」

と、ネービルさん。

それを聞いて、マーマおばさんが言いました。

「そういえば、パッセルベルでは、何時の間にか春祭りをやらなくなつてましたねえ？」

「魔王との戦いがあつたから。あの頃、みんな戦場へ行つた人達の事を考えて、お祭りな

んかは自粛していたでしょ。それがそのままになったのよ」

ワトソンさんの奥さんのリーリアさんが、声を落としました。

奥さん達は、みんな表情を曇らせました。

「……でも、もうあれから十年も経っているのだから、そろそろお祭りもいいでしょう。

ね？」

マーマおばさんが、苦笑という感じで笑いました。

「そうよね……」

「楽しい事を、子供達にも教えてあげないと」

奥さん達は、また元気を取り戻して頷き合いました。

「でも、春祭りじゃあ随分先よね？」

「秋祭りつて事で、どお？」

「お月見ダンスパーティーは？」

ミイミが、ここぞとばかり言いました。

「それ、いいわねっ」奥さん達がみんな賛成しました。

「じゃあ、それで長老にお話ししよう」

掛け合う役をミイミがかって出ました。

ミイミは、ネービルさんの家の集まりから帰ってすぐに、長老の家へ行きました。

事情を話すと、長老は、

「ふむ、それはよい案じゃ。春の旅芸一座が居なくなってから、村のものには楽しみが無

い。サウルにはわしから言っておくから、ミイミ達かみさん会で、話をどんどん進めなさい」

その話を、ミイミが帰って聞いたハナハナは、嬉しくて、台所で小さく跳ねてしまいました。

「ダンスパーティーっ！」

「さあ大変、どんどん準備しなくっちゃ」

「何を着て行けばいいの？」

「そうねえ」

二人が楽しそうに話していると、子供部屋からモモがやって来ました。

「ずるーいつ、お母さんとお姉ちゃん、二人だけで楽しそうなお話してる」

「あのねえ、村でダンスパーティーをやるの」

「ダンス、パーティー？」よく意味がわからなくてきょとんとするモモに、二人はあははと

笑いました。

さて。

長老の承諾も得たので、ミイミ達奥さん会は、村中にパーティーの話を伝えました。

もちろん、リンドンさんとアマンダさんにもその話は伝わりました。

「やっぱり、パーティには踊る人と一緒に行かなきゃならないのよね……」

この間の風の強い日、ハナハナが大事な売り物の帽子拾ってくれたお礼を言い、アマ

ンダさんがミイミの家へやって来ました。

ちょうどその時、トッドさんの奥さん、新婚のミントさんが遊びに来ていました。

ちよつと話していけば、というミントさんとミイミの誘いに、アマンダさんは、

「じゃあ、お茶だけ」と台所へ入りました。

話は自然とパーティのことになり、ミントさんは旦那さんと踊るのを楽しみにしている

ことを、嬉しそうに言いました。

「アマンダは、誰か好きな人はいないの？」

「えっ？」

ミイミの質問に、アマンダさんは急いで首を振りました。けれど、顔は真っ赤です。

「そんな人、いないわ」

「そう……。だったら、お隣の画家さんに行けば？」

突然ミントさんにリンドンさんのことを言われて、アマンダさんはますます真っ赤になりました。

「だって……。リンドンさんには、別に好きな人がいるかもしれないし……。私みたいな、目立たない女じゃ……」

台所の端っこで、自分の椅子を引き寄せて座っていたハナハナは、なるほどと思いました。

アマンダさんは知らないのです。

その10 赤い帽子青い帽子(4)

自分がどんなに綺麗な心の持ち主なのかを。

リンドンさんがそれを知っていれば、絶対アマンダさんを好きになるはず。

そう、ハナハナが言おうかどうかと思うと、ミイミが口を開きました。

「そんな事ないわ。あなたはとっても素敵よ。妖精なら、心が綺麗な人は姿も綺麗だって、

絶対知ってるもの、リndonは必ずあなたを誘うわ」

「そう……、かな？」半信半疑なアマンダさんに、ミントさんが力強く頷きました。

「絶対よっ」

二人が帰ってから、ミイミがハナハナに言いました。

「ハナハナは、アマンダさんの応援をしたいような顔、してたものね」

「え？　じゃあお姉さん、私の心を読んだの？」

ミイミが魔法を使ったのかとびっくりしたハナハナに、ミイミはくすつと笑いました。

「顔に描いてあったのよ。……それにしても、アマンダ、やっぱりリndonが気になって

たのね。さて、これからどうやったら、二人をくつつけられるかしら？」

「あーっ、お姉さんだって、くつつけるなんて言ってるう」

自分を注意しといて、とハナハナはわざと頬を膨らませました。

ミイミは肩を竦めてペ
ろつと舌を出しました。

「けどほんと、どうやったらあの二人の仲を取り持てるかしらね？」

「お姉さん、帽子は？」

「帽子？」

「うん。男の人に、自分が一番いいと思う帽子を被ってパーティに来てもらうの」

だめかな、と、ハナハナはミイミの顔を見ました。

ミイミにちよつと考えてから、「うん、そうね」と頷きました。

「そう言えば、パッセルベルの男衆は、みんなお気に入り帽子を、ここぞつて時には被

つて来るわ。アマンドがリンドンに帽子を送れば……」

「ね？ いいアイデアでしょ」

「じゃあ、みんなにそれを話してみしよう」

奥さん会で帽子の話をしたところ、では男だけでなく女の人達も自慢の帽子を被って踊

ろつ、という事になりました。

そうになると、さあ大変です。女の人達は帽子を新調しようと、こぞつてパッセルトーンの

洋品店に出掛けました。

パッセルトーンのお店でも、パッセルベルの奥さん達が大挙して帽子やらドレス生地や

らを買うので、おおわらわになってしまいました。

特に帽子は、男性用も売れて、お店は急いで職人さん達に発注を掛けました。

当然アマンドさんのところにも、大量の発注が来ました。

パーティまであと一月とちよつと。アマンドさんは自分のドレスを新調するどころではなくなっていました。

「困ったわね。これじゃ逆効果だわ」

心配して様子を見に行ったマーマおばさんが、食事もそこそこに針仕事を続けるアマンド

ダさんの様子を奥さん達に伝えました。

「みんなで、何とか手伝えなにかしら？」

「アマンダに聞いてみるしかないわね」

発案者のミイミも、責任を感じて言いました。

そもその言い出しっぺのハナハナも、これは大変な事になったと、ミイミと一緒に手

伝うつもりでアマンダさんの家へ行きました。

しかし。

「大丈夫ですよ。みなさんにご心配お掛けして、すみません」

アマンダさんは、明らかに寝不足だと分かる疲れた顔で、笑って申し出を断りました。

「無理しないで。私達に出来る事なら、何でも手伝うんだから」

「そうよ。そもそもパーティの計画をしたのは、私達なんだし」

口々に言う奥さん達に、アマンダは微笑んで首を振ります。

「ほんとに、お気持ちだけで。これは私の仕事ですし、他所様のお手を煩わせる訳にはいきません」

きつぱりと断られて、ミイミもマーマおばさんも、他の奥さん達も、手が貸せないもど

かしさを抱えたまま、家へ戻りました。

でも、ハナハナは一度戻ってから、またアマンダさんの家へ行きました。

「すいません」

戸を叩いたハナハナに、アマンダさんは「どうぞ」と中から声だけ答えました。

「あの……、ハナハナです。やっぱり何かお手伝いさせて下さい」
戸を開けて、奥の作業室のアマンダさんに、ハナハナは言いました。

「そのつ、帽子をパーティで、みんなに被って来てもらおうって言い出したの、私なんで

す。みんな、大事にしているご自慢の帽子を持つてゐるからって……。それが、こんな事になつて、ごめんなさい」

アマンダさんが、ゆっくり作業室から出て来ました。

ハナハナは、怒られるかと思い、身を縮めて待ちました。

けれど、アマンダさんは優しい声で「そう」と言いました。

「いきなり忙しくなつたから、どうしてかしらと思つていたけど。でも、こういう忙しさ

は、私、嬉しいの」

その10 赤い帽子青い帽子(5)

「え……？」

「だて、大好きな帽子作り没頭していられるんですもの」

そう言つて、アマンドさんは笑いました。でも、その顔は疲れて力がありません。

「けど、本当に忙しくて大変。……じゃあ、やっぱりハナハナに手伝つてもらおうかしら？」

ハナハナは喜んで「はいっ」と返事しました。

初めてアマンドさんの仕事室に入ったハナハナは、びっくりしました。

まず目に入つたのが、壁に幾段にも並んだ長い棚でした。棚の上には色々な型の帽子が、赤青黄と色分けされて所狭しと並んでいます。

窓際には大きな裁縫用の机、そして、部屋の真ん中に色とりどりのリボンや造花の乗った作業机がありました。

「ハナハナは、そこへ座つて」

アマンドさんに勧められたのは、作業机の前の椅子でした。ハナハナは赤いリボンが綺麗に並べられた机の前に、ちょこんと腰掛けました。

「出来た帽子にリボンを巻くの。簡単だから、すぐに出来るわ」アマンドさんは、赤い帽子を二つ手に取ると、ひとつをハナハナに渡しました。

残ったひとつを持って、「ゆっくりやるから見ててね」と言いました。

ハナハナは、アマンドさんが綺麗にリボンを帽子に回していくのを、真剣に見詰めてい

ました。

そして、今度は自分がりボンを持って、掛けてみました。帽子の生地が固く滑り易いの
で、最初は苦労しましたが、何度かやり直すうちに綺麗に掛けられるようになりました。

「そう、上手よ」

出来たものを見て、アマンドさんが微笑みました。

ハナハナは、次々に帽子にリボンを掛けて行きました。くるりと回して、ちょう結び。

その後、アマンドさんがリボンを糸で軽く止めます。

二、三時間で、ハナハナはすっかりリボン掛けに慣れました。

「じゃあ、次は造花を付けてみましょう」

アマンドさんのやり方を手本に、ハナハナもリボンの結び目に造花を飾りました。

今は秋の赤い実や、綺麗な紅葉が主役です。それを組み合わせ、形よく帽子に飾るのは、とっても楽しい仕事でした。

時間が経つのも忘れてお手伝いをしていたハナハナは、作業場の棚の隅に置かれた小さな

置き時計の音で、はっと時間を思い出しました。

「ああ、もう夕方ね。……今日はこれくらいにしましょう。ハナハナもお家へ帰らないと」

「あ、はい……」

微笑んで、アマンドさんはハナハナから帽子を受け取りました。

「あの、明日また来ていいですか？」

帰り際、ハナハナが聞くと、アマンドさんは笑って「いいわよ」と言ってくれました。

次の日も、ハナハナは朝のお手伝いが済むと、急いでアマンドさ

んの家へと行きました。

作業室へ入ると、昨日とは違って、作業台には男物の帽子が並んでいました。

男物にはリボン掛けはありません。

「あの……？」

「ああ、今日は、女物の帽子をパッセルトーンのお店に届けようと思うの。ハナハナも一

緒に来る？」

「はいっ」

パッセルトーンには、年に数回ミイミと買い物に行くくらいしか、ハナハナは行った事
がありません。

パッセルベルより全然お店の多いパッセルトーンへ行くのは、とつても楽しみです。

「あ、でも……」遠出をするなら、ミイミに言っておかなければなりません。それを話すと、アマンダさんは、

「いいわよ。待ってるから言ってらっしゃい」
と、優しく言ってくれました。

ハナハナは急いでアマンダさんの家を出ました。リンondonさんの家の前を通り過ぎようとした時。

急に家から出て来たリンondonさんとぶつかってしまいました。

「きゃあっ！」

「あっ！ ごめんっ！」

転んだハナハナを、リンondonさんはすぐに立ち上がらせてくれました。

「ごめんね。大丈夫？ 怪我はないかい？」

「はい」どこも、痛いところはないので、ハナハナは素直に頷きました。

と。リンドんさんは、はっとしたように水色の目を見開きました。
「きみ、ミィミのころのハナハナ、だよね？」

その10 赤い帽子青い帽子(6)

お姉さんのレニアさんは知っていますが、リンドンさんとは全く話をした事の無かった

ハナハナは、リンドンさんが自分の名前を知っているのに驚きました。

さらに。

「昨日から、アマンダの仕事の手伝いに来ているだろう？ アマンダ、ちゃんと食事してる？」

急がしそうだから、とリンドンさんは頭を掻きました。

ハナハナは、ああそうか、と気が付きました。

リンドンさんは、アマンダさんが好きなんだ。だから、アマンダさんの事をよく知ってるんだ。

ハナハナはにっこり笑っていました。

「アマンダさんはお元気です。今日、出来上がった帽子を、パッセルトーンのお店に持つ

て行かれるそうです。私も一緒について言われたんですけど、お姉さんがダメって言うんです。

でも、荷物は一杯あるんです」

「……え？」

「リンドンさん、私の代わりにアマンダさんの荷物を持ってあげて下さい」

お願いします、と、ハナハナは深々と頭を下げました。

リンドンさんは、ハナハナが顔を上げると、ちよっと困ったという表情をしていました。

が、すぐに「分かった」と言いました。

「じゃあ、僕が代わりに行くよ」

「ありがとうございますっ」

ハナハナはお礼を言うと、真直ぐに家へ帰りました。

「お姉さんっ！」家に帰るとすぐに、ハナハナはミイミに事の次第を話しました。

「ええっ？　じゃあアマンドとリンドン、一緒にパッセルトーンへ行っただの？」

「うん、多分」

「そう。それは良かったわ。……ハナハナ、ご苦労さま」

その日の午後、ハナハナはアマンドさんに急に行けなくなった事を謝りに行きました。

「今日はごめんなさい。急に行けなくなってしまいました」

ハナハナが頭を下げると、アマンドさんはくすっ、と笑いました。「いいわよ。お姉さんに怒られちゃったら、仕方ないものね」

「……」ハナハナは、アマンドさんがハナハナの嘘を絶対知っているとと思いました。

素直に謝った方がいいのかな、と考えていると、アマンドさんがお茶を出しながら先にお茶を開きました。

「リンドンが代わりに行ってくれたけど、その方が良かったわ。思ったより品物の数が多

くて重かったから。もしハナハナだったら、きっと持てなかったと思うわ」

「そうですか」ハナハナは、わざとアマンドさんがそう言ってくれているのが分かりました。

でも、それはアマンドさんにとっても、とても嬉しい事だったのです。

「それからね」と、アマンドさんは、まるで小さな女の子が秘密を友達に教えるような顔で、言いました。

「パーティに、リンドンと行く事になったの」

「えっ、本当ですか？」

ハナハナは、こっくり頷いたアマンドさんの、ちょっと恥ずかしそうな表情に、とても

嬉しくなりました。

あと少しだからお手伝いはいいと言われアマンドさんの家を後にしたハナハナは、家へ

帰るなり、ミイミにその話をしました。

「まあ、じゃあリンドンとアマンド、上手く行きそうなのね？」

「うん。作戦成功っ」

ハナハナは、ミイミと手を叩きあって喜びました。

秋は更に深まり、トネリコの葉もすっかり色付いたその日。

パッセルベルの村人みんなが、待ちに待ったお月見ダンスパーティーが開かれました。

会場の南の大枝には、奥さん会の面々が持ち寄った、腕によりを掛けた料理が並び、ま

た音楽は、村長が緑龍溪谷一と言われるカールベルの街の楽団を頼みました。

村の人達は奥さん会が呼び掛けた通り、みんなご自慢の帽子を被ってやって来ました。

踊り始めた人の波を縫って、アマンドさんがリンドンさんと共にハナハナとミイミのと

ころへやって来ました。

「遅くなったんだけど、これ、お礼です」

綺麗な袋に入ったものを渡されて、ハナハナはびっくりして二人を交互に見ました。

「ええと、私、大したお手伝いは……」

「いいの。貰ってちょうだい。これは、私とリンドンの気持ち」

その10 赤い帽子青い帽子(7)

ハナハナは困って、ミイミを見ました。ミイミは隣のティーヴをちよつと見ました。

ティーヴは、笑って頷きました。

「いいんじゃないのかい、ハナハナ。気持ちよくもらっておきなさい」

「はいっ」

袋の中は、開けてみるとピンク色の造花のついた、可愛い帽子でした。

ハナハナは早速帽子を被ってみました。

長老や魔法自慢の人達がいくつも浮かせた魔法の明かりに、新品の帽子がとてもよく映

えて、ハナハナはますます嬉しくなりました。

「ありがとう、アマンダさん」

何度もお礼を言うハナハナに、アマンダさんはちよつと照れくさそうに言いました。

「そんなにいいのよ。ほんとにお礼を言いたいのは、私達の方なんだから」

「そうなんですか？」

「今リンドンが被ってる帽子、これ、私が作ったの」

それを聞いて、ミイミもハナハナも事情が分かりました。

「もしかして、約束したの？ アマンダ」

アマンダさんはリンドンさんの顔を見ました。リンドンさんは幸せそうに微笑むと、

「ええ」とミイミに言いました。

「姉には、明日にでも会って伝える積もりです」

「おめでとうつ。リンドン、アマンダっ」

ミイミは自分の事のように喜ぶと、大声で周囲の人達に言いまし

た。

「みなさん、聞いて下さい。リンドンとアマンドが結婚の約束をしましたっ」

わっと歓声が上がりました。みんな手にしたぶどう酒のグラスを高く上げて、おめでとうと言いました。

その晩のパーティは、パッセルベルの人々にとって、一番楽しいパーティになりました。

飲めや踊れの楽しいひとときに、みんな昨日の仕事の疲れを忘れてはしゃぎました。

ハナハナ達子供も、この日ばかりは夜遅くまで起きていても叱られない嬉しさに、みんな友達と騒いだり食べたりしていました。

晴れた夜空には、月見の宴に誘われ満月が、淡い黄色い光を煌々と放っていました。

宴も終わりに近付いた頃、ハナハナは大枝の先の方で二人きりで寄り添い月を見ている

リンドンさんとアマンドさんを見ました。

アマンドさんが作ったリンドンさんの青い鳥打ち帽が、二人が何か話す度につばを内側にそっと向けます。

アマンドさんの赤い帽子が、それに答えるように揺れていました。やがて、赤い帽子は大きく傾いて、リンドンさんの肩へもたれ掛かりました。

それを見て、ハナハナはそっとその場を離れました。

その晩、ハナハナはとっても幸せな気分でベッドへ入りました。

冬の色がちらほらと出て来た頃。

リンドンさんとアマンドさんは結婚式を挙げました。

ドレスは例によって、マーマおばさんと奥さん会の手作りです。しかし、帽子型の変わ

ったベールは、アマンドさんが自分で作りました。

雪のようなトネリコの花を造花にした帽子のベールの綺麗さに、パッセルベルの女の子

達は、みんな素敵、と目を輝かせました。

リンドンさんのお姉さんのレニアさんは、式の間中おんおん泣いていました。

「こんなに早く、お嫁さんが決まってっ。しかも一番いい人が来てくれてっ」

感激して泣くレニアさんの肩を、ミイミがずっと抱いていました。長老が祝辞を言い終え式が終わり、披露パーティになりました。ハナハナはニーニヤやエマと一緒に、花嫁さんに花束を渡しました。

「ありがとうハナハナ。あなたは私達の幸運の天使よ」

「え、そんな……」

照れるハナハナに、二人は微笑み合いました。

そして冬も盛りの季節。

リンドンさんは遠い人間の街で開かれる自分の絵の展覧会のために、せっせと絵を描いていました。

遊びに行ったハナハナが見せてもらったのは、マーフの泉の前に立つアマンドさんの絵でした。

「前は風景ばかりだったんだけどね、最近は風景にアマンドを入れて描いてるんだ。と、

いうより、アマンドのバックに好きな風景を入れてる、かな？」

リンドンさんは、嬉しそうに話してくれました。

アマンドさんはお茶を煎れながら、にっこり笑って旦那様の話を聞いていました。

「アマンドの帽子のデザインも手伝ってるんだ。季節の花の絵を描いたり。アマンドは造

花を作るのも上手なんだよ。あ、ハナハナは知ってるよね？」

ハナハナは、幸せそうな二人と少し話して、それから帰りました。トネリコの木はすっかり葉を散らし、幹や枝にはうつすらと雪が積もっています。

冷たい雪なのに、ハナハナには何故かあたたかな綿のように見えました。

家へ帰ってミイミにその話をすると、

「そうね。寒い冬にひとりは辛いけど、リンドンもアマンドも、今年の冬はあったかいわね」と笑いました。

お昼寝から起きたモモが二人の話を端で聞いていて、

「なにはなしてるのー？」と興味津々で寄って来ました。

ハナハナはわざと意味ありげに笑って言いました。

「いいの、大人の話」

「あーっ、ずるーいっ！ お姉ちゃんだってまだ十歳じゃないっ！」

モモが、いつものようにまたぐずぐすと文句を言い始めました。

ミイミが「あとでね」とごまかします。

その様子を見ながら、家族が居るっていいことだな、とハナハナは思いました。

？？私も、いつかお姉さんやアマンドさんみたいに、素敵な人や家族と暮らせるかな。

窓の外は、また雪が降り出しました。

きっと、大丈夫だよ、と呟いて、ハナハナはふわり、と微笑みました。

その10 赤い帽子青い帽子 完

その10 赤い帽子青い帽子(7) (後書き)

その10 赤い帽子青い帽子は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

次は、ちよつと息抜きの2回目。
『エトセトラ2』です。

今回は、妖精や妖魔の、持って生まれた能力のお話です。
特別な能力は『星』と呼ばれています。

さて、ハナハナの星は？

お楽しみに！

その11 エトセトラ2(1)(前書き)

今回は、エトセトラ2です。

妖精と、持つて生まれた能力『星』のお話です。

その11 エトセトラ2(1)

ミイミの旦那様ティーヴは、妖精には珍しい仕事、猟師です。

何故珍しいかと言うと、妖精は皆生まれながらに穢れに弱い星を持っています。だから、

普通は動物を殺したり、それを食べたりは出来ないのです。

しかし稀に、もうひとつ別の星を持って生まれる者がいます。テイーヴもそのひとりで、

彼は『死せるものを生かす星』を持っています。

これは、殺したものを自分の糧として生かすのであれば、穢れを免れるというものです。

もちろん、妖精の本性である穢れを嫌う星がありますから、捕った獲物を食べたりは出来ません。

テイーヴは獲物の毛皮や肉を人間の商人に売り、そのお金で村に必要な品物を買っています。

緑龍溪谷の獣の毛皮は上質でとても高く売れるので、テイーヴが猟をして戻ると、村では

はたくさんの小麦やじゃがいもが手に入ります。

村長はそれをパッセルトーンで少し売り、妖精のお金を村の資金として使っています。

テイーヴはそのお金をまた少し貰って、ミイミやハナハナ、そして子供達の暮らしのみに当てています。

〃
〃
〃
〃
〃

ある日、子供達は長老の家で、妖精の星について聞きました。

「そうさな、妖精が妖精としていられるのは、この穢れに弱いという星を持つておるから」

「じゃ。人間や妖魔は、この星を持つておらんで、平気で動物を殺生し食うてしまう。その

ため、身に穢れが溜まって重くなるんじや。だから、トネリコの木に住むことが出来ん」

「へえ。じゃあ、なんでモルガナ婆さんはトネリコに住めるの？蛇の妖魔なのに」

リックの質問に、長老は長い鬚を撫でながら答えました。

「モルガナ婆さんは妖魔じやが、特別な星を持つておるんじや。それは、『死せるものの

穢れを払う』という星じや。妖魔の持つ特別な星は総じて強力でな、モルガナ婆さんはこ

の星のお陰で、動物を食う妖魔であつても妖精と同じように、軽いんじや」

へえ、と子供達はお互いの顔を見合わせました。

）　　）　　）　　）　　）

「長老さまには、誰がどんな星を持つているか、お分かりになるんですか？」

木ねずみのチャーリーが聞きました。

「いやいや、わしには分からんよ」

長老は笑いました。

「じゃあ、誰がそれをお分かりになるんですか？」

「カールベルにリリア婆さんという猫の妖精の長老がおつてな、その方なら、分かるがな」

「顔を見ただけで分かるの？」

孫娘ニーニヤの質問に、長老は、

「うむ、何でもその妖精が生まれる時に、お告げがあるそうじや。」

詳しく聞いた訳ではな

いのじゃが、天から声が降って来ると、そんな事を言っておったの」

「お告げがなければ、星は持っていないんだ……」

ぼそりと呟いたリックに、ニックが聞きました。

「何の星を持ってるって思ったの？ 兄ちゃん」

「そりゃ、『大工が上手くなる星』に決まってるんだろ？」

「ある訳ないじゃない、そんな星っ」

すかさず言ったエマに、みんな思わず吹き出しました。

）
）
）
）
）

その11 エトセトラ2(2)

けど、リックが言ったような、『大工が上手くなる星』のような星が本当にあるなら、

ちよつと自分にもあればいいな、とハナハナは思いました。

それをニーニヤに言うと、

「そうだね。私も『お裁縫が上手に出来る星』を持って生まれたかったなあ。もう、どう

やってもきれいにブラウスが仕上がらないっ」

「ねえ、ママおばさんはもしかしたら、『お裁縫が上手に出来る星』を持ってるのかもよ」

きつとそうだ、とハナハナは思いました。

だからあんなに素敵なドレスを次々と作る事が出来るのだ、と。

二人のおしゃべりを聞いていた長老が、「そうかもしれんの」と微笑みました。

「リリア婆さんは、命に関わる星の予言しかせんからの。もしかしたら、それぞれが天か

ら賜った得意なものの星は、また別にあるのかもしれん。じゃがそれは、自分で見つけ出

してこそ力を発揮するものなのじゃ」

「じゃあ、私にはお裁縫じゃあなくって、他に得意なものの星が、生まれながらにあるってこと？」

首を傾げたニーニヤに、長老は頷きました。

「そうじゃ。それを一生掛けて見付けるのが、人生の意味というものじゃ」

「本当に、私の得意なことって何だと思う？」

）
）
）
）
）

家へ戻り、夕御飯の支度を手伝いながらハナハナはミイミに言いました。

「私、ニ―ニヤほどお裁縫は不得意じゃないけど、うんと得意ってこともないし。じゃあ

お料理はどうかって言うと、それも普通だし。木登りも駆け足も普通。うんと得意なもの
って、思い付かないなあ」

じゃがいものゆで具合をみながら、ミイミはそうね、と微笑みま
した。

「でもね、ハナハナ」

お鍋の中身をざるに上げ、ミイミは言いました。

「何でもそれなりに出来るっていうのも、ひとつの特技よ？ 普通
に暮らしていくために

は、これひとつだけ得意っていうのもいいけど、全部そこそこ、何
とか出来る方が助かる

時はあるわ。私もそうだし」

「そっかー。そう言えば、お姉さん、お料理はうんと得意じゃない
けど、そこそこおいし
いものね」

ゆで上がった小さいものをひとつ摘まみ上げて、ハナハナはぽいつ、
と口の中へ放り込みま
した。

「あつ、言ったなこら。そんなこと言ってつまみ食いする人には、
お夕飯食べさせません
よっ？」

ふざけ半分に叱られて、ハナハナは「ごめんなさい」と舌を出し
ました。

）
）
）
）
）

その
1
1 エトセトラ
2 完

その11 エトセトラ2（2）（後書き）

その11 エトセトラ2は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

次は『冬の王』です。

雪の日の外遊びは、ハナハナもモモも大好きです。

けれど、雪と一緒に近付いてくる、小さな女の子の姿をした雪の精霊は、冷たい手で勝手に触ってくるので大嫌いつ！ な、ハナハナ。

さて、どんな騒動になるのやら……？

お楽しみに。

その12 冬の王(1) (前書き)

パッセルベルにも、本格的な冬がやってきました。
雪を降らすかわいらしい精霊。『雪の精』。

でも、冷たいのが嫌いなハナハナ達妖精の子供は、雪の精に触れるのが大嫌いです。

さてさて、どうなりますことか？

その12 冬の王(1)

リンドンさん達の結婚式が済んだ七日後、本格的に雪が降り出しました。

「今年も来たわねえ」

洗濯物を部屋の中に張ったロープに掛けながら、ミイミは窓の外を見ました。

「今年は、去年より雪の精霊の数が多いのかしら。よく降るわね」
窓から見えるトネリコの小枝は、すっかり白いお化粧をしています。

アルベルト先生から借りて来た本から目を上げたハナハナは、むっとした顔で言いました。

「私、雪の精霊大嫌いっ。冷たい手で顔を触って来たり、勝手に手を掴んだりするんだもの」

雪の精霊は、冬を迎えた土地に冬の王と共にやって来ます。王がその土地から次へ動くまで、その地域の中を好き勝手に遊び回ります。

人間には見えませんが、妖精であるパッセルベルの人々には、雪の精霊が十歳前後の透

き通った少女の姿で見えます。

目を三角にして怒る妹に、ミイミはくすつと笑いました。

「ハナハナに遊んで欲しいのかもね？」

「やあだっ。あんな冷たい子達、いやっ」

雪を降らせる精霊は、もちろん人でも妖精でもありませんから、眠ったり何かを食べたりもしません。

疲れ知らずに飛び回り、雲の上の王の城から降りて来てはまた飛

び上がって戻って行き
ます。

季節の精霊達は、どれもそうですが、勝手気ままに妖精の村や町
の中をうろつきまゝ。

「春のお花の精霊は好き。とつてもいい匂いで、時々花びらを蒔い
ていってくれるもの」

長い髪、若い娘の姿をした花の精霊達を思い出してにっこり笑
ったハナハナに、

「そうね」とミイミは微笑みました。

「でも、雪の精霊も可愛いわよ？」

「かわいくないっ。来るといつつもまとわりついて、邪魔なもの」
ハナハナがぱんつ、と大きな本を閉じた時、隣の部屋からモモが
入って来ました。

「おかあさあん、お外に遊びに行ってもいい？」

「ダメよ。お外は大雪。出て行ったら、また風邪を引くわ」

モモはぷうつ、と膨れました。

「えー、だって昨日もお外に出られなかったもん」

「昨日も雪がたくさん降ってました。今日もダメです」

ミイミは洗濯籠を台所の隅に置くと、食卓の上のタオルを畳み始
めました。ハナハナも
手伝います。

その側に寄って来たモモは、ミイミのエプロンを引っ張りながら、
また駄々をこねまし
た。

「行きたいっ。お外行きたいっ」

「ダメですったら」

「お姉ちゃん、外行きたいの？」

何時の間にかお昼寝から起きた弟のフレイが、言いました。

「フレイは関係ないのっ」

モモは、隣室の入り口に毛布を引き摺ったまま立っている弟を、

きつと睨みました。

「でもおかあさん、ダメって言ってるよ?」

「フレイはダメなの。でも私はいいのっ」

「なんで僕はダメなの? 僕も行きたいっ」

四歳のフレイも一緒に駄々を言い始めました。ミイミは困り顔で、腰に手をあてました。

「しょうがないわねえ」

「ちよつとだけならいいんじゃない?」

ハナハナの言葉に、小さな姪と甥は、うんうん、と頷きました。

「ハナハナ……」

ミイミは、横目で妹を睨みました。

モモとフレイは、お母さんに手を合わせてお願いします。

「お家の前だけっ」

「すぐ帰るからっ」

「じゃあ、ちよつとよ? これ以上雪の精霊が集まって来るようなら、すぐにお家に入りなさいね?」

子供達はわあい、と歓声を上げると、支度をしに部屋へと戻りました。

「あなたも付いて行ってくれる?」

ミイミは渋い顔でハナハナに言いました。

「モモもフレイも、多分夢中になって遊んでると、雪の精霊が近くに來ても分からないと思うから」

「うん、分かった。……私が言っちゃったんだしね」

「そうよ。よろしくね」

はあい、と返事をして、ハナハナも本を持って部屋へ戻りました。

その12 冬の王(2)

外は、本当に凄い雪でした。長靴の半分以上まで埋まってしまう程積もった雪は、冬に

は葉が無い落葉樹のトネリコの小枝達を重くたわませています。

それでも駆け出す小さい子達の後から出て、扉を後ろ手で閉めたハナハナは、細かい雪

が降って来る空を見上げました。

上の方の枝の間から、雪の精霊がふわふわと遊んでいるのが見えます。

「結構いるなあ……」

心配になったハナハナの耳に、モモとフレイの嬉しそうな声が聞こえて来ました。

「もーっ！ 雪ぶつけたら冷たいでしょっ、フレイはっ！」

「お姉ちゃんだって、雪掛けたっ！」

口喧嘩しながら、二人はハナハナの目の前で転げ回ります。雪まみれになってふざける

姉弟に、ハナハナもふふっ、と笑いました。

と、フレイの、手の大きさに合わせた小さな雪玉が、ハナハナの顔を直撃しました。

「きゃっ！」

「わあいつ、当たったっ！」

「こらあ、やったなっ！」

ハナハナはすぐに雪玉を作り、フレイに向かって投げました。雪玉は、逃げ回るフレイ

のお尻に命中しました。

と、今度はモモが、ハナハナに雪玉を投げて来ました。

ハナハナも投げ返し、たちまち二人対一人の雪合戦になりました。「きゃーっ、冷たいっ！」

「それっ！ もつと当てるよっ」

「お姉ちゃん早いーっ！」

騒いでいるうちに、三人はいつの間にか家から少し離れて、幹近くのオットーさんの家の方まで来ていました。

ハナハナは、フレイの背中にオットーさんの家の黒っぽい壁を見付けて、初めて家から離れてしまったのに気がつきました。

「あつ、いけない。お家から離れちゃった」

ハナハナは慌てて、モモとフレイに声を掛けました。

「戻るよっ、こっちおいでっ！」

しかしふざけている二人には聞こえていません。

「モモっ、フレイっ！」

呼んでも返事をしない二人を連れ戻しに、ハナハナが近付こうと歩き始めた時。

突然冷たい風が上の方から吹いて来ました。驚いて上を見たハナハナの目の前に、雪の

精霊が何人も舞い降りて来ました。

みんなおんなじように短かめに髪を切り揃え、白いスカートを履いた、小さな人間の女

の子に似た姿をした雪の精霊は、楽しそうに騒いでいるモモとフレイをぐるっ取り囲みます。

その時になって、ようやくモモ達は自分の周りが凄く寒くなっているのに気がつきました。

精霊達は、自分と同じくらいの背のモモに、次々と近寄って行きます。声のない口で笑

いながら、モモの頬や腕に、冷たい手を伸べて来ました。

モモは、真っ白な精霊に取り囲まれて、寒いのと恐いので真っ青

になりながら、大声で

ハナハナを呼びました。

「いやあっ！ ハナお姉ちゃんっ！」

同じように精霊に囲まれてフレイも、恐くてその場にしゃがみ込んでしまいました。

「ハナお姉ちゃあんっ！ 助けてえっ！」

「こらあっ！」

ハナハナは、怒って猛然と走り出しました。

「モモとフレイに触らないでっ！ どっか行きなさいっ！」

囲んでいる精霊達の冷たい身体に手を掛けて、ハナハナは二人の周りから女の子達を無理矢理退けました。

「あっちへ行きなさいっ！ あっちっ！」

ハナハナの、凄まじい剣幕に押されて、雪の精霊はきょとんとながらもみんな場所を開けました。

ハナハナは精霊の輪の中に入ると、泣いている姪と甥を抱きかかえました。

「もう大丈夫よ、お家へ帰ろう」

二人を立たせ、ハナハナは歩き出しました。そこへ、また雪の精霊達が「遊ぼう」というように手を伸ばして来ました。

「止めてっ！」

ハナハナは女の子達の手を乱暴に振り払うと、睨みました。

「あんた達は近付かないでっ。言う通りにしないと、酷いよっ？」

脅かしに、でも「それがなに？」という顔で、また精霊達は手を伸ばして来ます。

ハナハナはひとつ深呼吸すると、小さく息を吹き出しました。

妖精は、十歳くらいになると徐々に魔法が使えるようになります。村にいる時はそんな

に使いませんが、外で危険があれば、ハナハナでも身を守るための攻撃魔法を使えます。

ハナハナは、龍のように吐いた息を炎に変えました。雪達にとって火は大敵です。

その12 冬の王(3)

精霊達は、驚いた様子でみんな空中に飛び上がりました。

ハナハナは、今度は光の魔法を使いました。くるりと人さし指を頭上で回すと、そこに

小さな光の玉が出来ました。それを、精霊達に向かって投げたのです。

火と同じく、太陽も苦手な雪達は、熱くはないけれどもお日さまのように明るい光にびつくりして、皆一斉に上空の雲に戻って行きました。

「……ふんっ」

慌てて飛んで行く雪の精霊を見ながら、ハナハナはほっと肩の力を抜きました。

「もう大丈夫。お家へ帰ろうね」

こわごわ上を見ていたモモとフレイに、ハナハナはにっこり笑いました。

何とか雪の精霊を追い払って家へ戻って来たハナハナ達ですが、恐かった緊張と、冷た

い精霊に触られたせいで、モモは熱を出してしまいました。

「だから言ったのに」

ぐったりしたモモをすぐに寝かし付けて、ミイミは溜め息をつきました。

「雪の精霊に寄られたら、きっと寒さでまた風邪を引くと思ったわ」

「ごめん、なさい……」

出してあげればと言って、二人を外で遊ばせたハナハナは、反省してミイミに謝りました。

「私が、もつとよく注意してなかったから」

「ハナハナのせいじゃないわ」

しかし、ミイミは首を振りました。

「モモが行きたいって言い張ったんだもの。モモが悪いのよ」

「でも……」

「ハナハナは、雪の精霊が降りて来た時、すぐにモモ達を呼んでくれたんでしょ？」

「うん……」

それは、確かに呼びました。けれどあの時、呼ぶだけでなくすぐに側に行っていたれば、

モモとフレイに精霊達が触らなかったかもしれません。

俯いたハナハナの頭を、ミイミの柔らかい手がそつと撫でました。

「いいのよ。ハナハナが気にしなくっても……さて、おばかさんに熱冷ましを飲ませま

しょうね」

ミイミは台所の食器棚の上に置いた箆の中から、小さな薬瓶を取り出しました。

「……と。あらあら、熱冷ましが無くなってるわ。どうしよう」

ハナハナは顔を上げました。困った様子の姉に、言いました。

「私っ、お薬貰って来るっ」

ミイミはびっくりした顔で、小さな妹を見ました。

「さつき戻って来たばかりでしょ。また雪の中を出掛けたりしたら、今度はハナハナが風

邪を引くわよ？」

「私は大丈夫っ。丈夫だもん」

ハナハナは、赤ちゃんの頃から病気をした事がほとんどありません。その事は、育てた

ミイミが一番よく知っています。

「でもね」

「行かせてっ。私なら雪でも駆けられるし。すぐにモルガナさんの

ところへ行つて歸つて
来られるからっ」

お願い、というハナハナに、ミイミは根負けした顔で微笑みま
した。

「じゃあ、お願いするわね。ただし、用心して行く事。急いで思い
切り駆けたりしちゃダ

メよ？」

「はいっ」

「あー、お姉ちゃんまたお外行くの？」

食卓で、ブランケットを被つて熱いお茶を飲んでいたフレイが、
うらやましそうに言い
ました。

「僕も行くっ」

「ダメよ。ハナお姉ちゃんはお遣いに行くの。フレイはお留守番」

「やだっ。僕もお遣いくらい出来るもんっ」

むっとして言い返す甥っ子に、ハナハナはめっ、と睨みました。

「ダメメっ。今度はフレイが風邪引くよ。あんたまで風邪引いたら、
おかあさん困っちゃ

うでしょ？」

「ハナお姉ちゃんだって、風邪引くよっ」

「私は大丈夫なの。……じゃ行つて来ます」

言いながら手早く支度を終えたハナハナは、ミイミから銀貨を受
け取り、戸口へ向かい
ました。

「くれぐれも、気を付けて」

「はあい」

勢い良く飛び出した外は、さつきより幾分雪が上がっていました。
今のうち、と、ハナハナは雪の積もったトネリコの枝を、モルガ
ナ婆さんの家のある西
の下枝まで、思い切りよく駆け出しました。

その12 冬の王(4)

モルガナ婆さんの家から戻る途中、ハナハナはマーフの泉の周りに雪の精霊が集まっているのを見ました。

「そう言えば、去年の冬は泉は凍ってたよね」

今年は、泉は全く凍っていません。マーマおばさんやボツへさん達は、マーフが泉に居るから、冬の王の冷気も水を凍らせる事が出来ないんだろう、と話していました。

本当にそうなのかな、と思いながら、幹の道に戻ろうとした時、突然泉全体が光り始めました。

それまで泉の上や周りを飛んでいた雪の精霊が、急いで上空に飛び立ちます。

何が起こきたのだろうと、ハナハナは急ぐのも忘れて泉へ降りて行きました。

ハナハナが泉のほとりまで来た時、水の中からマーフが出て来ました。

「マーフ」

「ああ、ハナハナ」

かつて魔王の配下だったという黒い水の妖精は、ハナハナを見てにっこり笑いました。

「どうしたの？ 今、泉が物凄く光ったけど」

「水を浄化したんだよ。放っておくと、真冬の間は冬の王の力で水は凍ってしまう。そうすると私は出られなくなってしまうから」

「あ、そうか」

マーフは、夜は泉の中の洞窟で過ごしていると聞いています。で

も、夜中に雪の精霊や

冬の王が降りて来て雪や冷気を撒き散らせば、たちまち泉の水は凍ってしまいます。

「天井を塞がれないように、水をいつも綺麗にしておくんだ。そうすれば、温度も一定になるし、何より凍らないから」

「もしかして、それ、夜中もやってるの？」

聞いたハナハナに、マーフは苦笑して、

「たまにね」と言いました。

「大変だね。けど、私達は助かります。朝、お水が凍ってないと、すぐに水汲み出来るもの」

「みんなに感謝してもらえるのが、何よりだよ。……それはそうと、どうしてこんな大雪

の時に、下まで降りて来たんだい？」

まさか、今から水汲みでもないだろうに、と心配するマーフに、今度はハナハナが苦笑

しました。

「うん。モモがね、お熱を出しちゃって。熱冷ましを飲ませようとしたら、切れてたの。」

だから、モルガナさんのところで分けてもらったの」

「そうか。……あ、そうだ」

ちよつと待ってて、と言って、マーフはぱしゃん、と泉に潜って行きました。

何だろう、とハナハナが待っていると、マーフは白い二枚貝のようなものを持って戻っ

て来ました。

「これは、この泉の底に住んでる貝の貝殻なんだ。この中に私が作った薬が入っている。」

この泉の水で作った薬で、身体を丈夫にするんだ。良かったら、モ

モちゃんに少し飲ませ

るといい」

「うわあ、ありがとうっ」

ハナハナは喜んで受け取ると、じゃあね、と手を上げて幹へ戻りました。

後で長老に聞いたところ、この薬は水の妖精秘伝の薬で、作るのに大変魔力が要るものだということでした。

モルガナ婆さんの熱冷ましと、マーフの薬を大事に上着の内ポケットに入れたハナハナ

は、急いで幹の道を駆け上がりました。

あと少して我が家というところで、また突風が吹いて来ました。しかも、今度の風は前にも増して冷たい風です。

「きゃっ！」飛ばされて、危うく幹から転がり落ちそうになり、ハナハナは必死で近くの枝に飛びつきました。

その頭上に、大勢の雪の精霊が降りて来ました。

精霊達は皆、愛らしい顔を恐ろしい形相に変え、ハナハナを鋭く見下ろしています。

一瞬、その恐ろしさに、ハナハナは身が竦みました。

多分、さっきの出来事で、精霊達は怒っているのです。

でも、私は悪い事はしていない。そう思い直して、ハナハナは勇気を振るって起き上がりました。

突然、精霊達が左右に別れ、その上から真っ白な冷氣と共に誰かが降りて来ました。

ハナハナは首を上げて、きつ、とそちらを見ました。

降りて来たのは、真っ白なローブを来た、若い男でした。銀色の長い髪の前には、やは

り銀に輝く王冠が乗っています。

冬の王は、顔をこわばらせてじっと睨んでいるハナハナに、静かに言いました。

「おまえが、我が眷属を脅したのか？」

低い、地吹雪のような声に、ハナハナは思わず目を瞑り掛けます。でも必死で見開き、

言いました。

「先に私の姪を脅かしたのは、雪の精霊達です。みんなで囲んで触ろうとしましたっ」

「触るのが悪いのか？ 我が眷属達は、ただおまえやおまえの小さな姪と遊びたかっただけだ」

その12 冬の王(5)

「精霊達が遊びたかったって言いますけど、小さな子を大勢で囲めば、絶対に怖がります」

「雪の精霊達はその事も知らないのですか?」

冬の王は、ちょっと目を細めました。

「さて、な。我らはおまえ達妖精や、人間どもとは違う存在だ。おまえ達がどんな風に感

じているのか、分からない時もある」

「だったら、そんなんで遊びたいなんて近付かないで下さいっ」

ハナハナはきっぱり言いました。

「精霊達は悪いと思っていなくても、私達や人間は、雪の精霊に触られたり側に来られた

りするの嫌なんです。何でなら、冷たいからです。私達はあったかいのは大丈夫で

も、冷たかったり熱かったりすれば病気になるます。今も、私の姪は雪の精霊に触られ

て病気になるてしまつて寝ています。私はモモの……、姪の病気の薬を分けて貰いに、

薬師のお婆さんのところへ行つて来たんです。モモは身体が弱いんです、そういう子もい

るんです。だから、次からは絶対、私や姪や甥に、いいえ、他の妖精の子供達にも、近

付かないで下さいっ!」

ハナハナの必死の抗議を、冬の王は黙って聞いていました。

ハナハナは、じつと自分を見詰める王の銀の目を、ずっと睨んでいました。

やがて、王が口を開きました。

「そうか……。妖精や人間どもは、我が眷属が嫌いか」

「嫌いですっ。空を飛んでいたりと、雪を降らせたりしている時は、そうは思いませんけど。」

嫌だって言ってるのに無視して、勝手に手や顔を触って来るのは、そういうところは太っ

嫌いですっ」

「……そうか」呟くように言うと、王はすつつ、と上空へ上がって行きました。

上空には、王の城のある厚い雲が、まるで空に浮かぶ巨大な船のように浮いています。

王は雪の精霊を連れて、ゆつくりとその雲の中に入って行きました。

「……何よ」ハナハナは小さくなった王や精霊の姿を見上げながら、ぷうつ、と頬を膨らませました。

「なんにも答えないで帰っちゃって……」

『光の子よ』不意に頭のすぐ上で王の声がして、ハナハナはびっくりしました。

「えっ？」

『おまえの意見、しかと胸に納めた。今後、我が眷属達には、無闇におまえ達や人間に近付かないよう、言い聞かせよう』

「ほんとですかっ？」

思わず言った言葉に、返事はありませんでした。けれど、雲から大きな綿雪がひとひら、

ふわふわとハナハナの上へ落ちて来ました。

ハナハナは、その綿雪を手に取りました。綺麗な結晶が見える雪は、まるで約束の証のように、ハナハナの手の下にしばらくとどまり、そして消えました。

雪が消えたハナハナの手の下に、酷く暖かい感触が残りました。

家に帰ったハナハナは、すぐにミイミに熱冷ましの薬を渡しました。

「よかったわ。これでモモもすぐに良くなるわ」

ほっとした顔で眠るモモを見下ろすミイミに、ハナハナもほっとしました。

「あ、そだ」ハナハナは、ポケットに入れて来たもうひとつの薬を思い出して、脱いだ上着を探りました。

「これ、マーフから貰ったの。丈夫になって、元気になる薬だって」
「まあ」

ミイミは白い貝の入れ物を手に取って、しげしげと見ました。

「モモにあげて」

「マーフにお礼を言わなければね」
ミイミは貝殻を両手のひらに包むと、とてもありがたそうに拝みました。

突然、こんこんつ、とドアを叩く音がしました。

何だろうと、ハナハナが玄関へ行きました。開けると、誰も居ません。

「何かなあ？」

首を傾げつつ、雪の景色を見回します。と、扉の真ん前の雪の中に、透明な塊がひとつ、置かれていました。

「……？」ハナハナは側に行つて、雪を掻き分けてみました。

「氷？」

「どうしたの？」

中々戻って来ない妹を心配して、ミイミがドアから顔を出しました。

「お姉さんっ、氷が置いてあるのっ」

ミイミも驚いて、ハナハナの側へ来ました。

「まあ、珍しい」

『光の子よ』

また突然、冬の王の声がしました。

声は、ハナハナだけでなくミイミにも聞こえました。

『私に意見をする者はそう多くない。冬を司る者は恐ろしいと、誰もが思うからだ。それ

をおまえは、全く頓着なく意見してくれた。それは礼だ、取っっておけ』

その12 冬の王(6)

「……どういうこと？」

よく意味が分からなくて首を傾げたハナハナに、ミイミは苦笑しました。

「ありがとうって、ことよ」

「ふうん」ハナハナは、顔を空に向けると大きな声で、

「どういたしましてっ」と言いました。

二人は、ミイミが家から持って来たバケツに氷を入れると、よいしょ、と掛け声を掛け

合いながらそれ家へと入れました。

氷を細かく砕き、水枕に入れ、モモの熱を冷やしました。

氷と薬が効いたのか、モモは翌日にはすっかり元気になりました。ミイミは、それでも念のためにと、マーフに貰った丈夫になる薬をモモに飲ませました。

そんな事があってから、雪の日に外に出ても、もう雪の精霊達はパッセルベルの子供達

に勝手に近付いたり触って来たりしなくなりました。

「みんなよかつたって言うてくれてるの。でもね」

しばらく振りに晴れた日。ミイミとハナハナは久々に外へ洗濯物を干しました。

一杯溜まってしまったティーヴのシャツや子供達の服をトネリコの枝に掛けながらミイ

ミはハナハナに微笑みました。

「何か、困った事でもあるの？」

聞かれて、ハナハナは靴下を小さな枝に干しながら、ちょっと俯きました。

「うん……。私、冬の王にとっても怒っちゃったんだけど、ほんによかったのかなあ」

「どうして？」

「だって、あのあと、雪の精霊に出会って、困ったような顔をしてみんなすうつと上へ

消えて行っちゃうんだもの。……本当に精霊達は、自分達が嫌がらせをしているんじゃないかな

くって、ただ遊びたかっただけだったのかなあって」

「そうね……。本当はそうだったかもしれないわね。でもね」

ミイミは、雪の精霊に悪い事をしてしまったんじゃないかと思っている妹の、ふわふわ

と白い毛が遊ぶ頭をそつと撫でました。

「悪気は無くても、人に迷惑を掛けてしまうのだったら、やっぱりそれはしてはいけない

の。ハナハナが言った事は正しいわ。だって、私達妖精や人間は、雪の精霊の冷たい手に

触られるのは我慢出来ないもの。それを、精霊達も気付かなくてはいけなかったのよ」

「……そうなの？」

そうよ、と、ミイミは微笑みました。

お姉さんの優しい笑顔に、ハナハナはやっぱり良かったんだ、と思いを直しました。

冷たい、緩い冬の風が、二人の頬をふわっ、撫でて過ぎました。

ふと、ハナハナが目を上げると、小さな雪がひとひら、干したシヤツの上に落ちて来ました。

冬はまだまだ続きます。

ハナハナはミイミにつこり笑い返すと、残りの洗濯物を手早く干し始めました。

その
1
2
冬の王
完

その12 冬の王(6) (後書き)

その12 冬の王は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

次は『その13 星祭』です。

獵師をしているティーヴは、獵の途中で様々な人を助けます。今回は、なんと人間の子供を助けて連れてきました。

でも、人間は普通ならトネリコの木には登れないはずですが、果たして、この子は一体……？

優しくて、ちょっと悲しいお話です。

楽しみに！

その13 星祭(1)(前書き)

今回のお話は、星祭です。

パッセルベルの、お盆のような行事です。

でも、お祭り前にひとつ、ハナハナには衝撃的な事がありました。

その13 星祭(1)

冬も盛りになる頃。

パッセルベルでは『星祭』というお祭りが行われます。

妖精は、死ぬと身体は大気に還りなくなります。でも魂は消えずに、太母と呼ばれる天

の神様の元へと戻ります。

そして真冬、太母のところからもう一度、魂は星となって地上に戻って来るのです。

その魂を迎えるお祭りが、『星祭』です。

お祭りには、様々な食べ物が用意されます。パン、野菜の煮物、木の実のお菓子、果物

のパイ、などなど。すべて、星となって戻って来る人々のための食べ物です。

もちろん、生きている人々も、その御相伴に預かります。特に子供達は、果物のパイと

木の実のお菓子は大好物。星祭りが楽しみでなりません。

「ねえお姉さん、今年は何のパイを作るの？」

台所で、かまどの調子を見ていたミイミに、ハナハナはうきうきと聞きました。

「去年は梨のパイだったでしょ？ 今年は何？」

「今年は、秋に野ブドウを一杯貰ったから、そのパイにしようと思うの」

そう言えば、風が北風に変わった頃、コウノトリの妖精の郵便屋さん大きな箱を家に

配達に来ました。

「あの箱の中に、野ブドウが入ってたの？」

「ええ。赤龍山脈の村のミミスクの妖精スミスさんから、ティーヴ宛に届いたの」

「赤龍山脈って、随分遠いんでしょう？ そんなに遠くの人から？」

「以前、緑龍溪谷の狩り場で、旅の途中で怪我をして動けなくなっていたスミスさん達を、

ティーヴが助けたのよ。そのお礼につて」

「ふうん……」

そんな話は、全然知りませんでした。ハナハナは初めて聞く話に、耳をぴくぴくつと動かしました。

「知らなかった」

「そうね。ティーヴは獵の途中に、よくそういう人を助けるし。だから別に珍しい事じゃ

あなかったから、ハナハナ達には話さなかったかもね」

野ブドウが来なかったら、ハナハナもモモとフレイも、ティーヴの人助けの話は知らないままだったかもしれません。

ハナハナは、それはちょっと嫌だな、と思い、ミイミに言いました。

「ねえ、今度からは、お義兄さんの人助けのお話、聞かせて？」

「分かったわ」ミイミは微笑んで頷きました。

「さて。かまどの調子もいいようだから、パイを作る前にお昼を作ってしましましょう」

ミイミは、豆のスープの材料が入った鍋を、かまどの上に乗せました。

ハナハナは、お玉を持ってスープの番を、ミイミは棚の上のパンを下ろして切り分け始めました。

と、いきなり玄関の扉が開きました。

「あら、ティーヴ」

今朝早く狩りに出掛けたティーヴが、戻って来ました。

「お帰りなさい。今日は随分早いのね？」

ティーヴは「うん」と頷くと、くるりと外を向きました。そして「おいで」と何かに手招きします。

「？」ハナハナもミイミも何だろうと首を傾げた時。戸の陰から男の子が現れました。

「まあ」

男の子には、尖った耳も尻尾も、ふさふさの毛並みありません。トーベルさんと同じ

ような真直ぐな金色の髪が、頭の上から肩の辺りまで垂れています。

「この子、妖精？」

「いや、人間の子供だ」

「えっ？」二人は驚いて、まじまじと子供を見ました。フレイと同じくらいの背丈の男の

子は、ミイミとハナハナに見詰められて、にっこりと笑いました。

「アー……？」

「どうして、人間の子が緑龍溪谷に？」

「どうやら、親に捨てられたらしい。??とにかく中へ入れてやってくれ」

ミイミはティーヴに言われて、男の子の手を取り中へと入れました。

ハナハナは、黙って男の子を見ていましたが、入って来た時初めて、その子が裸足なのに気が付きました。

「お姉さん……」

先に気が付いていたらしいミイミは、何も言わずに頷きました。

とにかく男の子を椅子に座らせ、ミイミは狩りの道具を隣の部屋に片付けて戻ったティーヴに尋ねました。

「何処であの子を？」

「リリクの滝の少し先だ。……実は、先に見付けたのは俺じゃない

んだ。コウノトリの郵便

便屋が、あの子が熊に襲われているのを助けたんだ」

その13 星祭(2)

郵便屋さんの話はこうでした。

パッセルトーンへ郵便物を届けた帰り、リリクの滝の先にあるストーン村に郵便の受け

取りがあつたので、滝の上を飛んでいたら、大きな熊が小さな動物を襲っているのを見かけました。

うさぎやタヌキにしては大きいな、と思いながらぼんやり上から見てみると、熊の身体

の陰からひよいと白い腕が見えました。

もしや妖精の子が襲われたのか、と、郵便屋さんは驚いて、急いで急降下しました。け

たたましい声を上げて熊を威嚇し、怯んだ隙に子供を銜えて飛び上がりました。

間一髪。子供が軽かったので、郵便屋さんは難無く振るわれた熊の爪をひよいと避け近

くの大楠の枝の上に着地出来ました。

しばらく熊と睨み合っていました。やがて諦めたらしく、熊は森の奥へ去っていきま

した。

「やれやれと、ようやく安心して子供を見てびっくりしたらしい。

とても軽かったから間

違い無く妖精だと思っていたら、人間の子供だった。でも、軽い訳もすぐに分かった。こ

の子は、天使の卵だった」

「天使の、卵？」初めて聞く言葉に、ハナハナは目を丸くして、思わずティーヴに聞き返しました。

「天使の卵というのは、人間の言葉で言えば、精神遅滞という、普通の子より知恵の発達が遅い子供のことだ。俺達妖精は、そういう人間の子供を『天使の卵』と呼んでいる」

「へえ？ どうして？」

興味を引かれて、さらに訊ねるハナハナに、ミイミが微笑みながら、説明しました。

「知恵の発達の遅い人間の子は、みんな軽い魂を持っているの。だからトネリコにも登れるのよ。で、死ぬと太母様の元へは行かず、そのまま魂に羽が生えて天使になるの」

「えー、そうなんだ」

ハナハナが感心した時、ばたんと扉が開いて、モモとフレイが外遊びから戻って来ました。

「お母さんっ、お腹空いたっ。……あれ、この子、だれ？」

モモは、台所の自分の椅子に座っている人間の子を、不思議な顔で見ました。

「あ、お父さんお帰りなさい。??この子、耳短いよ?」

「毛えなあいつ!」

フレイも、好奇心いっぱい顔で男の子を見ます。覗き込んで来る二人に、男の子はにっこり笑いました。

「……ア？」

「こんにちわ」

「ア??」

「こんにちわって、言えないの？」

「この子は言葉が分らないのよ」

ミイミに言われ、モモとフレイはますます不思議そうな顔で男の子を見ました。

「妖精なのにな？」

「妖精じゃないの。人間よ」

ハナハナが言いました。

「へえ。人間は言葉が分からないの？」

「人間はしゃべれるわ。でも、この子は分からないの」

「へんなの？ 何で？」

「この子は『天使の卵』だからよ」

「『天使の卵』？」さっきの自分と同じ反応をしたモモに、ハナハナは聞いたばかりの話をしました。

小さいフレイはさっぱり分からないようですが、モモは「ふうん」と相槌を打ちました。

「じゃあ、天使になったら言葉がわかるようになるのかな？」

「そうかもしれないな」

小さな娘に、ティーヴは微笑みました。

「取りあえず、長老のところへこの子の報告に行つて来る。『天使の卵』とはいえ人間の

子だ、騒ぎになるとまずい」

「そうね、行つてらっしゃい」

お昼は帰ったら食べると言つて、ティーヴは雪の中をもう一度、長老の家へと出て行きました。

ハナハナとミイミは、お昼の支度に戻りました。

「モモはその子を見ててあげてね」

うん、とモモは頷きました。

「あ、でも、ここに一緒に居てもいい？」

一人で人間の子の面倒をみるのは心配なのか、モモは恐る恐るという顔でミイミに言いました。

「いいわよ。じゃお母さんとハナハナも、ご飯の用意をしながら一

緒に見ててあげるわね」

うん、と、モモは安心したように笑いました。

何しようかな、と、男の子と向かい合ったモモの側に、寝室からぬいぐるみを持ってフ

レイが寄って行きました。

「こーぐまのポンちゃん、こーきげーんさーん」

その13 星祭(3)

猫の妖精のぬいぐるみを振り回して歌い出したのは、パッセルベルの子供達ならみんな知っている童謡でした。

男の子は、びっくりした顔でフレイを見ました。が、すぐに楽しそうに手を叩き始めました。

「アーツ、アーツ？」

「お歌が好きなのね？」

モモが言くと、男の子はますます嬉しそうに手を叩きました。

「じゃあ、一緒に歌いましょう」

モモも、フレイと声を合わせて『こぐまのポンちゃん』という歌を歌いました。

楽しそうな三人の様子を横目で見ながら、ミイミとハナハナはこっそり顔を見合わせて

笑いました。

支度が出来て、ハナハナはモモにも手伝ってもらいテーブルにお皿を並べました。

ミイミは、隣室からお客さま用の椅子を一脚台所に運び、そこに男の子を座らせました。

「嫌いなものは、無いかしらね？」

豆のスープを入れるため、男の子の前のお皿を取った時。

急に男の子がテーブルの上に頭を置いてしまいました。

「どうしたの？」ハナハナは慌てて男の子の肩を触りました。

ミイミも驚いて、お皿を置いて側に来ました。

「具合が悪いの？」

でも、男の子には言葉は分かりません。ミイミはそっと、男の子の頭を持ち上げました。

額に手を当て、顔を顰めました。

「まあ、酷い熱」

「えっ？ この子、病気なの？」

驚くモモに、ミイミは頷きました。

「どうやらそうみたいね。口がきけないから分からなかったけど…」

…」

と、玄関の扉が開いて、ティーヴが帰って来ました。

「長老に話して来た。？？どうした？」

「この子、病気だったみたい。熱があるの」

「何だって？」

ティーヴは足早に、テーブルを回って来ました。そしてミイミが押さえていた男の子の身体を、ひょいと抱き上げました。

「……これは酷いな。ミイミ、毛布を取って来てくれ」

はい、と、ミイミは小走りに寝室へ行きました。すぐに毛布を持って、ティーヴの側へ戻りました。

ティーヴは毛布に子供をくるむと、もう一度抱き直しました。

「この子を長老のところへ連れて行く」

「様子を？」

「ああ」

歩き出したティーヴに、ハナハナは、「私も行くっ」と言いました。

ティーヴは足を止め、ちょっとハナハナを見ました。

「……そうだな、ハナハナ、一緒に来てくれ」

「はいっ」

「あーっ、じゃあモモもっ！」

負けん気の姪っ子が、すぐにハナハナの真似をして言いました。

「ダメだ。モモは家にいなさい」

「だあって、ハナお姉ちゃんが行くのにっ」

「ハナハナは、もしかしたら大事な役目が出て来るかもしれないけど、おまえはまだ小

さいからダメだ」

「ずるーいっ！」

文句を言う娘を一度睨み付けて、ティーヴは外へと出て行きました。その後を、ハナハナも上着を手早く着て付いて行きました。

ハナハナが冬の王と話をしてから、ここのところ雪はあまり多く降ってはいません。それでも十センチは積もっているトネリコの枝の道を、ハナハナはティーヴの後に続いて歩きました。

「あの、お義兄さん？」

ハナハナは、さっきティーヴがモモに言っていた事が気になって、ふと、声を掛けました。

「私には大事な役目が出て来るかもしれないって、どういうこと？もしかしたら、冬の王にも、それに前に長老やトーベルさんにも言われた『光の子』と
いうのに関係があるのではないのかと思って聞いたのですが、ティーヴは何も答えずに歩
き続けました。

「……お義兄さん？」

答えてくれないのを訝って、ハナハナはもう一度声を掛けました。
「……その事は、長老の家へ行ったら、多分わかる」

その13 星祭(4)

それきり、ティーヴは何も話ませんでした。元々無口な人なので、ハナハナもそれ以上は聞きませんでした。

程なくして、二人はトネリコの梢の長老の家へ着きました。

「ごめんください」玄関で声を掛けると、すぐに扉が開きました。開けたのは、村長のサウルでした。

「こつちへ」村長は、ハナハナ達を一階の小さい方の部屋へ招きました。

そこは、村の人が集会に借りる大部屋の左側にある部屋で、ハナハナは初めて入りました。

扉を開けると右に暖炉があり、その前に長老が椅子に腰掛けて待っていました。

「子供が熱を出しました」

ティーヴは、肩に担いでいた男の子を、長老のすぐ後ろの大きな長椅子の上に下ろしました。

長老は「ふむ」と白いひげを撫でると、立ち上がって毛布にくるまれた男の子を見ました。

男の子は、目を閉じて苦しそうに息を継いでいます。長老はその額に手を当て、じっと目を閉じました。

「……なるほどの」

長老は、ゆっくりと男の子から手を離すと、ティーヴとハナハナの方へ向き直りました。

「どうやら、この子は寿命が尽きておるようじゃ」

「えっ？」ハナハナは驚いて声を上げました。

「じゃあ、死んじゃうのっ？」

「残念じゃがの。重い病を抱えておるようじゃ。それに併せて、『
天使の卵』……」

「では、やはりこの子は緑龍溪谷に捨てられたのでしょうか」

ティーヴの言葉に、ハナハナは更に驚きました。

「捨てられたって……、本当のお父さんお母さんが、子共を捨てる
の？」

「ハナハナや」長老は、静かに言いました。

「人間というのは、時として残酷な行為をする者がおるのじゃ。妖
精のわしらには、まず

考えられんがの。この子のように、育たない、育てるのが難しいと
思われた子供は、人間の
親は、たまに捨ててしまう事もある」

「だって……、だって、生きてるのに……」

どうして、そんな事が出来るのでしょうか？ どんな子供にも、親
に愛されて生きる権利

がある筈です。もちろん、不慮の事故や病気で両親を失ってしまった
場合は仕方ないです

が、そうでなければ、親は大事に子供を育てるのが、愛するのが普
通な筈です。

「この子が、『天使の卵』だから、捨ててしまったの？ それとも
病気だから？ それと

もその両方だから？ もしかして、病気が治れば迎えに来てくれる
んじゃ……」

「それは、あるかもしれんがのお」

長老は、ふっ、と天井を仰ぎました。

「病気は、どうやっても治らないんですか？」

ハナハナは、長老とティーヴを交互に見ました。

「あのっ、私……」ハナハナは、思い切って聞いてみようと思いま

した。

『光の子』ってなんなのだろう。もし、自分がそれで、『光の子』に人を治す力があるなら、やってみたい。

「長老さまっ、その……、『光の子』って何ですか？」

長老は、ちよつと驚いた顔でハナハナを見返しました。

「前にトーベルさんがマーフに、『光の子が居るから安心だ』っておっしゃってましたよ

ね。あれって、光の子が、悪いものを排除出来るからなんですか？もしそうなら、その

……、私が、光の子なら……」

「……病気を治す事は、出来んよ、ハナハナ」

長老は、優しい声で言いました。

「確かに、光の子は魔を退ける星を持つておる。なるほど、ちよつとやそつとの病なら、

その力で治す事も出来るかもしれん。じゃがの、それにも限界がある。まして、この子の、

この、『天使の卵』の病は重病じゃ、それにもつ、命数が尽きておる。これは、いくら光

の子の力でも、覆す事は出来ん」

「ハナハナ」ティーヴが厳しい声で言いました。

「おまえの気持ちは分かる。子を捨てるなど、理不尽極まりない話だ。親としても、生き

るものとしても、してはならない行為だ。だが、現実人間はそういう者も居る。それを、

俺達はどうする事も出来ないし、する権利もない。……辛いが、この子の死を、俺達は受

け入れなければならない」

「……だって……」ハナハナは、朦朧と目を開けた男の子を見下ろして、涙が溢れて来ま

した。

「こんなので、あんまり可哀想過ぎるよ……」

その13 星祭(5)

「……アー……？」

男の子が、毛布の中から手を伸ばして、ハナハナの白い頬に触れました。

泣いているハナハナに「大丈夫だよ」と言っているように、淡く笑いました。

ハナハナは自分の頬に触れる小さな手を握り締めると、目を閉じて泣きました。

「ごめんね……、何もしてあげられなくて……」

不意に、男の子の手から力が抜けました。驚いたハナハナは、目を開けて男の子を見ました。

すると、目を閉じた男の子の額の辺りから、白い光の玉がふわり、と浮き上がって来ました。

「え……？」びつくりして光を見詰めるハナハナに、それまで黙っていた村長のサウルが、静かな声で言いました。

「これは、この子の魂だよ。『天使の卵』は死ぬと一度星になる。それから、天使に変わるんだ」

光は、きらきらと輝きながら天井近くまで上りました。しばらくほんものの星のように辺りに淡い光を投げ掛けていましたが、突然、ぱんっ、と弾けてしまいました。

眩い閃光に、ハナハナもティーヴも、みんな一瞬目を閉じました。両手で目を被ったハナハナの耳に、可愛い声が聞こえて来ました。

『ありがとう、妖精のお姉さん』

ハナハナは、慌てて目を開けました。すると、男の子の星があったところに、小さな羽

をつけた天使が浮いていました。

『僕のために泣いてくれて。僕は、お父さんお母さんに捨てられたけど、最後にお姉さん

のような優しい人に出会えて嬉しかった。ただ、お父さんお母さんの事も誤解しないでね。

二人は僕を本当に愛してくれていたんだ。でも、とっても貧しくて、身体の弱かった僕を

育てられなかったんだ。』

「でも、だからって大事な子を捨てるなんて……」

ハナハナは涙声で、小さな天使に言いました。小さな天使は笑うように、小さく羽を動かしました。

『うん。でも、僕を緑龍溪谷に捨てたのは、ここに妖精が住んでいて聞いたからなんだ。捨てられた僕を妖精が見付けたら、きっと悪いようにはしない

だろうって。本当だったでしょ？

お姉さんも、助けてくれた狩人のおじさんも、みんないい人だった』

「おまえさんのご両親は、おまえさんがもう長く生きられないのを知っておられたんじゃない」

長老の言葉に、天使は『はい』と頷きました。

『家で僕が死んだら、お葬式を出さなければなりません。でも、お父さんお母さんには、

お葬式を出すお金が無かったんです。だから、ここへ僕を置いていたんです。……別れ

る時、お母さんは「ごめんね」って、僕を抱き締めてくれました。

僕は、もうそれだけで何もいらなんです」

ハナハナはまた泣きました。

優しい天使は、『泣かないで』と小さな小さな手で、ハナハナの頬に触れました。

『僕はもう行くけれど、みんな元気でいて下さい。本当に、ありがとうございました』

その声が消えないうちに、小さな天使はまた光になり、消えました。

魂は天使になって何処かへ消えても、人間は妖精とは違います。

魂の抜けた男の子の身体は、そこに残りました。

「さて、墓を作る場所も無いしのお」

長老は、眠るような男の子の亡骸を見下ろして、顎鬚を撫でました。

「『龍の墓場』なら、人間を埋葬する事も出来るでしょう。ですが、我々はあそこには立ち入れない」

村長の言葉に、ティーヴも頷きました。

「あの、『龍の墓場』って……？」

知らない場所の名前に、ハナハナはティーヴを見上げました。

「緑龍溪谷の一番奥、龍王の山脈の中に、古代の龍達の亡骸が葬られている場所がある。」

それが『龍の墓場』だ」

「そうなんだ……」

「だが、そこは強い結界と障気に満ちていて、我々妖精は入れない。入れるのは、人間と、

強い魔力を持つハイエルフ、それに高位の妖魔だけだ」

「じゃあ、この子の身体は？」

ハナハナの問いに、大人三人は顔を見合わせました。

「パッセルベルから離れた場所なら、埋葬出来るが……」

「その前に、我々ではそもそもこの子の遺体には触れられませんよ？ お父さん」

村長の意見に、長老は「ふむ……」と唸りました。

「運ぶのは、俺が出来ます」ティーヴが言いました。

「しかし、埋葬は……。あれは穢れの行為ですから。いくら俺でも無理です」

「清めの儀式が出来るのは、人間かハイエルフのみじゃしのお」

難しい顔をして、三人は黙ってしまいました。

その13 星祭(6)

全然聞いた事もない言葉ばかりで、しかも、長老も思案顔になってしまい、ハナハナはどうなるのだろうと不安になりました。

と、村長が突然ばんつ、と手を打ちました。

「モルガナ婆さんに聞いてみましょう。あの人は『死せるものの穢れを払う』星ですから」

「おおそうじゃった。モルガナなら、何かいい方法を知つとるかもしれん」

「じゃ私が早速」

そう言つて、村長は上着を手早く着ると、外へ飛び出して行きました。

「さて、ではとりあえず」村長が出て行くのを見送つて、長老はティーヴに言いました。

「この子をマーフに預けに行ってくれるかの。このままでは穢れが酷くなり、村の者に影響が出て来る」

「はい。分かりました」

ティーヴは男の子の身体を毛布に包み直し、来た時と同じように肩に担ぎ上げました。

「まだ、暖かい……」

ふと聞こえたティーヴの呟きに、ハナハナは「え？」と顔を上げました。

「どうやらこの子は、俺達が遺体を上手く片付けるまで、穢れが集まらないようにしているらしいな」

「それって？」ハナハナは、またまた分からない話に、首を傾げました。

「穢れというのは、動物の遺体に好んで集まって来る、魔の気の種類じゃ。遺体は、冷たくなればなる程、穢れが溜まる。この身体がまだ暖かいという事は、さっきの天使が、何処かでこの身体が冷えきらないよう、力を使っているからかもしれない」

最後まで、みんなの迷惑にならないように。

あの子の必死の気持ちに、ハナハナはまた目頭が熱くなって来ました。

「じゃあ、早いとこ泉に持って行ってあげよう」

ティーヴは黙って頷き、長老に一礼すると歩き出しました。ハナも長老に挨拶して、ティーヴの後を追いました。

男の子の遺体は、マーフの泉に下ろされました。事情を聞いたマーフは、一時泉の底に

埋葬すると言ってくれました。

そして村長が聞いて来たモルガナ婆さんの意見は、結局そのままマーフに任せるのがいと言う話でした。水の妖精は、高位の者はハイエルフと同じような力を持っています。

マーフなら、子供の遺体の穢れを押さえ込んだまま、浄化出来る筈だと、モルガナ婆さんは言っていたそうです。

その夜。

パッセルベルでは星祭が行われました。先祖の妖精の星達が、宵の星の輝く中、紺色の中空にひとつ、またひとつ、と現れました。小さな淡い光の星は、ゆっくりと村の降り注

ぎます。

ミイミの家はもちろん、村中の家々が、トネリコの枝に積もる雪の上を滑るように移動する星を迎えるために、窓を大きく開け放っています。

窓辺には、奥さん達が腕によりを掛けて作ったごちそうが並べられて、星達はその近くまで寄せて来ます。

次々と窓辺に来る星を見ながら、ハナハナは小さな声で言いました。

「あの子は、天使になっちゃったから、ここには来ないんだね……」
「ごちそうも一杯用意したのに。」

「少しでも、食べさせてあげたかったなあ」
妹の呟きに、ミイミは優しく微笑みました。

「そうね。でもきつと、あの子にはハナハナの気持ちは通じているわよ。ここには来ない」

けど、あの子の分までお迎えしましょう」

うん、と頷いて、ハナハナは静かに動く無数の星々に目を戻しました。

波のように、窓辺に寄せては外へと戻る光を見ながら、ハナハナはふと、思い出しました。

??そう言えば、『光の子』の事をまた長老に尋ねそびれたな。

結局、自分は『光の子』なのだろうか……?

ハナハナが、「私がそうならば、この子を治したい」と言った時、長老も村長も、否定しませんでした。

という事は、ハナハナは『光の子』なのでしょうか?

長老は、「光の子は魔を退ける」と言っていました。もし本当に自分がそうなら、自分にそんな力があるのでしょうか。

ハナハナは、隣で星を眺めているミイミに、そつと聞きました。
「ねえお姉さん、私、『光の子』なの？」

ミイミは、驚いたように妹を見返しました。しかし、何も言わずに、片手でハナハナの頭をそつと抱きました。

「ねえ？」もう一度訊いたハナハナに、ミイミは小さく「さあ？」と言いました。

「そのうち、長老さまが教えて下さるわ」

「……何時頃？」

気になって仕方ないのに、とハナハナは思いました。

「時期が来たらよ」

さあ、そのお話はお終い、と、ミイミはハナハナを離しました。これ以上は、多分答えてくれないな、とハナハナは思い、諦めました。

隣の部屋の窓から星を眺めていたティーヴと子供達に、ミイミは、
「そろそろ御相伴にしましょう」と声を掛けました。

「ハナハナ、テーブルの支度をしてちょうだい」

「……はあい」

ハナハナは窓辺を離れ、食卓の支度に掛かりました。

窓の外には、まだたくさんの星が雪の上を飛んでいます。

お供えのごちそうを取り分けながら、ハナハナは今度こそ長老にちゃんと聞こう、と心に決めました。

その13 星祭(6) (後書き)

その13 星祭は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

ハナハナ、またも『光の子』の真のお話を聞けずじまいでしたが……
どうなりましょうか？

次は『その14 レスワの壺』です。
毎月一日にパッセルベルに立つ市場では、食料品からアクセサリー
まで、いろいろなものが売られます。

普通の人たちが日常に使う品々もあれば、実は、ちょっと危ない品
物も、こつそり売られていたりします。

そんな品物と遭遇してしまったモモとフレイ。
さて、どうなりますか……？

お楽しみに。

その14 レスワの壺(1) (前書き)

さて。

今回のお話は「レスワの壺」です。

パッセルベルの月一の市場で起こった、珍騒動。

何があつたのやら？

その14 レスワの壺(1)

パッセルベルでは、毎月一日に行商の人達が来て、市場が立ちます。

市場は旅芸一座がテントを張っていた、あの南の一番下の大枝に出来ます。

雪が止み、青空が覗いた冬の日を、妖精達は『冬の王の休息日』と呼びますが、そんな

久々に晴れた日に、市場が立ちました。

この日はいつもの市より行商人が多く、食料品は元より、衣服やアクセサリーなど、普段はパッセルトーンまで出さなければ買えないような品物も、並んでいました。

冬の柔らかい日射しを受けてきらきら輝く貝殻のネックレスや指輪は、女の子達の気を、大いに引きまします。

「ねえねえ、このイヤリング可愛いっ」

「あつ、こっちのネックレス、ピンク貝の殻をハートに削ってあるっ」

ハナハナとニーニヤ、そしてエマも、綺麗な洋服やアクセサリーを、あっちこっちと見回します。

「私、お姉さんからリックル硬貨を三枚貰ったんだけど、これでお買い物出来るかなあ」

リックル硬貨は、妖精の社会での通貨です。主に大きな街で使われていますが、物々交換の多いパッセルベルのような田舎では、あまり見かけません。

ハナハナの手の中のリックル硬貨を見詰めて、エマとニーニヤは感嘆の声を上げました。

「うわあ、すごいっ。私、リックル硬貨見るの初めてっ」と、ニーヤ。

いつもは、何でも持ってるわ、と威張るエマも、
「私はお父さんから貰った事はあるけど……。三枚なんて、持った事ないわ」

ハナハナが照れくさそうに微笑んでポケットに硬貨を終った時。

「ハナハナ」後ろからミイミが呼びました。

「お姉さん」

「モモとフレイを見かけなかった？ 私が八百屋さんへ寄ってる間に、どうやらはぐれてしまったみたいなのよ」

ハナハナは、最初ミイミと姪のモモ、そして甥のフレイと一緒に市場に来たのですが、

途中で友達のニーヤとエマに会って、ミイミ達と別れたのです。

それでも、ミイミ達とそんなに離れていた訳ではなく、ハナハナ達が居るアクセサリー

の屋台とミイミが行っていた八百屋の屋台は、通りを挟んですぐ近くでした。

「えっ？ さっきまで隣の帽子屋さんで、子供用の帽子を見てたけど……」

みんな一斉に、帽子屋の方を向きました。

「いないわ。きっと面白いものを見付けて、また先へ行ってしまったのね」

ミイミは困った顔で辺りを見回しました。

「大変っ。探さなきゃ」

ここは何と言ってもトネリコの一番下の枝です。その下はすぐに地面。その先はパッセ

ルの森です。森には幼い動物や妖精の子を狙う、獰猛な獣もいます。まだ小さなモモとフレイがすっかり枝を降りてしまったら、大変な事になります。

「私っ、枝元の方を探して来るっ」

買い物物楽しい気分も何処へやら、慌てて駆け出そうとするハナハナに、友達二人が言いました。

「待って、私も行くわっ」

「私もっ」

「ごめん、じゃあ手伝って」

「じゃ私は枝先の方に行くわね」

わかった、と頷いて、ハナハナとニーニヤ、エマの三人は、人混みを分けて駆け出しました。

その頃。

自分達が居なくなっただために、お母さんやハナハナが心配しているのも全く気にしていないモモとフレイは、枝先に近い屋台の近くにいました。

そこは、幾つもの枝が上下左右に別れているところで、屋台によつては上の枝に黒い天

幕を掛けすっぽり覆っているところがあります。

全体的に黒っぽい店が多く、そのせいか、葉のない季節なのにその道だけ何となく薄暗

い感じでした。

「何だか、気味悪いとこに来ちゃったね……」

黒いテントの側を通りながら、モモはフレイに小さな声で言いました。

お姉さんの右側を歩いていたフレイは、ぷつと頬を膨らませました。

「ぼく、恐くはないもんっ」

大きな声で言うなり、フレイはたたっ、と斜め左の店へと駆け出

しました。

「あっ、フレイっ！」

後を追ってその店に近寄ったモモは、店の台に乗っているものを見てびっくりしました。

大きなトカゲの干物です。

「ひっ……」

その他にも、乾燥したオオグモや、大きなガラス瓶に入ったナマズ、乾かしたイラクサ、

首と胴が切り離された、干涸びたマンドラゴラ、などなどが、所狭しと並んでいました。

その14 レスワの壺(2)

モモは恐くなってその場を離れようと後ずさりしました。

引き返そうと振り返った時、側に弟がいないのに気が付きました。

「フレイ？」きよろきよろと、辺りを見回します。でも、薄暗い通りにフレイの姿はありません。

「フレイっ！」

「何大声だしてるんだい？ お嬢ちゃん」

突然声を掛けられてびっくりして振り向くと、先程の店の奥からお婆さんが出て来ました。

お婆さんは、枯れ枝のような手に一杯持った乾物を、他の品で埋め尽くされている台の上

に更に並べます。ぎゅうぎゅうと干涸びたマンドラゴラを押しやる手には、指にも甲に

もぶつぶつと青黒いイボが出来ていました。

よく見ると、お婆さんの皺くちやの顔も、手と同じようなイボがたくさん出来ています。

鼻は潰れて低く、毒ガマガエルそっくりです。でも、垂れた目蓋の下

の赤い目は、生氣のない見かけとは逆に、ぎらぎらと陰険に光っています。

「あの……、私……」

モモはすっかり怯えて、その場に釘付けになってしまいました。

お婆さんはそんなモモを、さも不愉快そうに睨付けました。

「ここではそんな大きな声を出しちゃいけない。『ネビル・キャラバン』にやって来るお

客は、人に知られたくない買い物をするめに来るんだ。大声を出し

たら、みんなびっくり

して帰ってしまう。それに第一、ここはあんたみたいなちっちゃな子供が来る場所じゃない。とつととお帰り」

「でも……」

「それとも、何かい？ 『子猫の肝』をあたしに売ってくれるって言うのかい？」

「『子猫の肝』……？」

モモは、初めて聞く言葉に、恐る恐る聞き返しました。

お婆さんは目を細め、枯れ木が裂けたようににいつ、と口の端を釣り上げました。

「猫の妖精の子供の肝は、そりゃあ高価な薬になるのさ。生で食べれば不老不死になるし、

乾燥させて粉末にしたものは、どんな病でもたちどころに治す。まさに万能の薬。生を食

べるには生きたまま肝を引っこ抜かなきゃならない。けど、子猫でも猫の妖精は魔力が強

いから、なまなかでは出来ないけどね」

聞いた途端、モモは全身がぶるぶると震えてしまいました。

ここに居たら殺される。早く帰らなきゃ。

「わっ、私っ、きも、なんて、売らないっ！」

渾身の勇気を振り絞って叫んだ時。

お婆さんの真後ろで、クリーム色の小さな毛玉がもぞもぞと動いたのに気が付きました。

毛玉は、小さな尻尾を上にして、何か覗いています。

「フレイっ！」何時の間にか、フレイがお婆さんのテントに入り込んでいました。フレイ

は、お婆さんの後ろにある色々な壺を、次々そつと覗いて遊んでいたのです。

モモの声に気付いてお婆さんが振り返った時、フレイは丁度お婆

さんの真後ろの、茶色

い壺の蓋を開けたところでした。

開けた途端、ぼんっ、という小気味良い音がして、中から何かが飛び出しました。

「あっ！」

「えっ？」

お婆さんが、酷く慌てた表情で叫びました。

フレイは、その声に驚いて蓋を取り落としました。

陶器の蓋が、固いトネリコの枝の上に落ちて、がちゃん、と割れました。

「ああっ！　なんて事を……」

お婆さんがフレイに掴み掛かります。フレイが慌てて逃げようとしたその時。

目の前に黄色いウサギが現れました。

「よおっ、出してくれてありがとっ！　お礼にこれ、あげるっ！」
小さなフレイの、さらに半分程の背丈のちっちゃなウサギは、悪戯っぽく大きな赤い目

でウインクをすると、持っていた黒い杖をぱつと振りしました。

「レスワっ！」

その途端、ウサギの杖から真っ赤な光が飛び出しました。光はまっすぐにフレイに当たり、次にお婆さんの方へと向かいます。

しかし、光が当たる前に、お婆さんは呪文を唱えました。

「デイモオっ！」

お婆さんの指先から青い光が飛び、赤い光を消しました。

「ちいっ！」ウサギは光が消されたのを見ると、一目散で台を飛び越えテントから遠ざかりました。

「待てっ！」

お婆さんも、急いでテントから飛び出します。

蹴飛ばされた台から、トカゲとマンドラゴラが転がり落ち、モモの前に散らばりました。

その14 レスワの壺(3)

「全くっ！ ろくでもない事をしてくれたよっ！ 絶対おまえと弟の肝を食ってやるっ！」

恐ろしい言葉を吐いてモモを睨み付けると、お婆さんはウサギが飛んで行った方へと走り出しました。

騒ぎに、何かと幾人かの人が通りへ出て来ました。それを突き飛ばすようにして、お婆さんは走って行きました。

お婆さんが見えなくなると、モモは漸くテントの中へ入りました。フレイは、赤い光を浴びてその場に気を失っていました。

「フレイっ！」モモは、弟の肩を掴んで揺さぶりました。と、フレイが目を覚めました。

「あ、おねえちゃん……？ も、ごはん出来た？」

「違うわっ、ここはお家じゃないのっ。早く起きてっ」

「え？ 僕お家にいたあよ？ 朝ごはん、まあだ食べてないもんっ」
ぷつと頬を膨らませたフレイに、モモは怒りました。

「何言つてんのっ！ もうお昼なのっ！ フレイ、忘れちゃったの？ 一緒に市場に来てたでしょ？」

「……いちば？」フレイは、きよろきよろとテントの中を見回します。そして、きよとんとした顔で言いました。

「ここどこ？」

「なによっ。さっきここでお婆さんの壺を開けちゃったの、覚えてないの？ 怒られたじゃないっ」

「僕、そんなことしてないっ！」

手を振り回して主張する弟に、モモは呆れた顔をしました。

「なによっ！ 自分の悪戯はさっさと忘れちゃうわけっ？」

「そりゃあ違うよ、嬢ちゃん」

突然響いた低い男の声に、モモはぎょっとして振り向きしました。

大きな熊の妖精のおじさんが、台の方から中を覗いていました。

「弟坊主が開けたのは、レスワの壺だ。あのウサギに魔法を掛けられると、ちよつと前の

事はみんな忘れてしまうんだ」

「レスワ、の壺？」

目をぱくりさせたモモに、おじさんは「そうだ」と頷きました。

「壺のウサギは、蓋が割れたんで喜んで飛び出して行っちゃった。

??大変だな、これか

らあっちこつちで物忘れの人が出るよ」

ウサギは南の大枝から飛ぶように上へと上がって行きました。

熊の妖精のおじさんが言っていたように、ウサギは会おう人みんなに忘れ魔法を掛けて

回りました。

十六丁目の木ねずみの妖精ルーラさんは、夕飯にと採って来た野

菜の泥を雪水で洗って

いる時に、ウサギにばったり会ってしまいました。

お陰で野菜を採ったのを忘れ、大事なラディッシュをウサギに持

って行かれてしまいました

した。

シマリスの妖精ラッセさんは、柱時計を直している最中にウサギが家に入って来ました。

時計を持ち上げているのを忘れて、床に落として壊してしまいました。

猿の妖精アンソニーさんは、お昼の買い物の道で魔法を掛けられ、

市場で買ったリンゴ

やイチゴを、全部ウサギに盗られてしまいました。

魔法で悪戯して、人のものを盗り放題のウサギは、いい気になって更に上の枝へと逃げて行きました。

七丁目の枝へ来た時。

木ねずみの妖精ワトソンさんの家の屋根を、丁度ボツへ親方とトツドさんが直していました。

「おいトツド。その材木を持ち上げてくれ」

ボツへ親方に言われて、下で材料を切っていたトツドさんは、雪の重みで折れてしまっ

た古い屋根の支えの代わりの材木を持ち上げました。

その時、その材木の上にレスワウサギが飛び乗りました。

「わっ？　なんだこいつっ？」

びっくりしてトツドさんが材木を振ると、ウサギはそのままぴよーんと屋根へと飛び乗りました。

招かれざる珍客の登場に、ボツへ親方は驚いて釘を打つ手を止めました。

「なんだい、あんた？」

ウサギはいじわるな表情でにやりと笑うと、杖を振り上げました。

「レス???！」

ところが、屋根はまだ修理中で、ウサギの足下も受け板が張ってなくて穴が開いていました。気付かずに思い切り杖を振ったウサギは、そのままバランスを崩して穴に落ちそうになりました。

「わーっわわっ！」

手をぐるぐる回して、ウサギは何とか落ちないようにと踏ん張り

ます。しかし、何度も

手を回した事で、魔法が何回もボツへ親方に当たってしまいました。

「あ???.....」

その14 レスワの壺(4)

ボツへ親方は、今やっていた仕事だけではなく、大工の技のほとんども、いつぺんに忘れてしまいました。

「……あれ？ 僕は何でこんなところにいるのかな？」

呟いて、ボツへさんは下を見ました。

「わーっ！ たつ、高いっ！ たつ、助けてくれーっ！」

「お、親方っ？」

上で急に喚き出したボツへ親方に、トッドさんは驚いて材木を投げ出して上がって行き
ました。

「どうしたんですっ、親方っ？」

「たつ、助けて下さいっ！ 僕はこんな高い所、まだ恐いですっ！
完全に様子のおかしいボツへ親方を、トッドさんは困惑しながら
ゆっくり下へと下ろし

てあげました。

「一体、何があっただんですか？」

尋ねても、ボツへ親方は真っ青な顔を「わかりません」と振るばかりです。

「僕はまだ見習いなんです。なのに、あんな高い所で仕事なんて……」

「えっ……？ 何を言ってるんですか親方」

「親方？ 僕がですか？」

そこで漸く、トッドさんはボツへ親方が修行時代から後の事をすっかり忘れているのに
気が付きました。

「思い出して下さいっ！ ボツへ親方は、パッセルベルで一番の大工の棟梁なんですよっ

？」

「そんな事言われても……」

「親方……っ！」

全く思い出す気配の無いボツへ親方に、トッドさんは半分泣き顔になりました。

屋根から落っこちそうになり危ない所で踏み止まったウサギは、トッドさんの慌てぶりを

を横目で笑いながら、屋根からまたびょーん、と飛び下りました。

「さて、次は何処へ行こうかな？」

トネリコの幹の方へと走りかけ、ウサギはふと立ち止まりました。くんくん、と上の方から匂って来る、いいにおいを嗅ぎました。

「おや、誰かがお昼の支度をしている。キャベツのシチューだ。いいにおい」

よし、これを失敬してやろう、と、ウサギは上の枝へと駆け出しました。

お昼にキャベツのシチューを作っていたのは、ネービルさんでした。

今日は大きな市場が立ったので、奥様達がまた買い物を持ってネービルさんの家へ集まっていました。

買い物をしてくれたお礼にと、ネービルさんは得意のキャベツのシチューを、みんなに

振る舞うために作っていたのです。

マーマおばさんが、足の悪いネービルさんを手伝って台所に立っていました。

と、誰かが戸口を叩きました。

「どなた？」ネービルさんの問いに、答えたのは長老でした。

「わしじゃよ。入ってもいいかの？」

「まあ長老。どうぞどうぞ」

「マーマおばさんが戸を開けると、長老が嬉しそうな顔で入って来ました。」

「市場からの帰りじゃったのだが、四丁目の側まで来たらあんまりにいい匂いがするもんでな。ちと寄ってみたくなったんじゃ」

「まあ。長老もキャベツのシチューがお好きですか？」

「うむ。好物でな」

更に顔を嬉し気に崩した長老に、ネービルさんもマーマおばさんも笑いました。

と、その時。

台所の窓の外で何か音がしました。何でしょう、と、マーマおばさんが窓を開けました。

その途端、レスワウサギが窓に飛びつきました。

「レスワっ！」

ひゅん、とウサギが杖を振ります。杖の先から飛び出した細い真っ赤な光がマーマおば

さんに当たる寸前。

「デイオモっ！」

長老が魔法を唱えました。金色の大きな光が、赤い光を飲み込み、更に先へと走って行きます。

「うわあああっ！」

金色の光は、もろにウサギに当たり、ウサギは窓から転がり落ちました。

それを見た長老は、いつもの居眠りばかりしている姿からは考えられない素早さで、家の外へと飛び出しました。

「待てっ！」窓から雪の上に転がり落ちたウサギが、逃げようと枝の端まで走って行くの

を追いつけた長老は、もう一度魔法を唱えました。

「ロープっ！」

今度は長老の手の先から、金色のロープがしゅるっ、と現れました。

真直ぐに自分に向かって来るロープを、ウサギは慌てて避けました。

その14 レスワの壺(5)

「ひょいっ！」

しかし、身体を一回転した拍子によろけて、側の雪の塊の中へ突っ込んでしまいました。

ウサギの入った雪の塊を、長老の魔法のロープが叩きました。と、塊はつるつると滑っ

て、四丁目の枝から真直ぐ下へと落ちてしまいました。

「あゝれゝっ！」

雪の塊は空中で解け、ウサギは真っ逆さまにマーフの泉へと落ちて行きました。

その同じ頃。

ハナハナとニーニヤ、エマの三人は、南の大枝の枝元にいました。はぐれたモモとフレイをようやく見付けたハナハナ達は、モモから何があつたか聞いて、

すぐにお婆さんに謝りました。

そして、ハナハナと友達二人は、お婆さんを手伝ってウサギ探しを始めました。

しかし、市場の中をくまなく探しても、ウサギは見つかりませんでした。三人はくたび

れて、枝元で一度休憩していました。

「どうしよう、何処にもいないね」

「困ったねえ……」

ニーニヤもエマも、困った顔で溜め息をつきました。

「ごめんね、モモ達の失敗なのに、付き合わせて……」

ハナハナは、しょんぼりと友達に謝りました。

「うつん、いいよ。……でも、ほんとにそのウサギ、何処に行っ

やったのかなあ」

「ねえ、一度家に帰らない？　もしかしたら、ウサギは上の方へ行っちゃってるかもよ。」

家に帰って、おかあさん達に話した方がいいよ」

「そうだね……」

エマの提案に、ハナハナは頷きました。

記憶を無くしたフレイと、泣きじゃくってしまったモモはミイミが家へ連れて帰っていません。

「誰か大人に……、長老さまに相談した方がいいかもね」

「長老に相談っ？　冗談じゃないよっ！」

不意に大きな声で怒られて、ハナハナ達は驚いて振り向きました。壺の持ち主のお婆さんが、恐ろしい形相でこちらに近付いて来ました。

「大体、あんたの甥っこが悪ささえしなけりや、こんな大事にならなかったんだっ！　それ

を忘れて、長老に相談だなんてっ！」

「だ……、だって、このままじゃ捜せません。他にも誰かに手伝ってもらわないと……」

おずおずとハナハナが言うと、お婆さんはふん、と鼻を鳴らしました。

「面倒臭くなっただらう。全く、近ごろの小娘共はっ。すぐに誰かに責任を押し付け

ようとしてっ！」

「そっ、そんなんじゃありませんっ。私達は……」

「だったらとっとお探しよっ！」

お婆さんはつんけんと言うと、三人をじろりと睨み回しました。

「……ウサギは、多分上の枝の方へ行っちゃったんだわ」

エマが、睨み返して言いました。

「何だって？」お婆さんが、ぎよっとした顔をしました。

「上の枝だつてっ？ ……それはまずい。わたしや、これ以上上には登れないんだ…。あ
あ、どうしよう」

「あの」

ニーニヤが聞きました。

「どうして、上に行かれないんですか？」

お婆さんは、きつ、と目を釣り上げました。

「そつ、そんな事つ、あんた達に言う事じゃないよつ！ ……ああでも、あいつが上に逃

げちまつたかもしれないなんて……」

「何を、そんなところで集まっているんだい？」

突然後ろから声がして、お婆さんは驚いて振り向きました。

ゆるゆると身体を左右にくねらせて近付いてくる薬師の蛇の妖魔のお婆さんに、ハナハ

ナは、につこりと笑いました。

「こんにちは。モルガナさんもお買い物ですか？」

「ああ、眠り薬に入れる光茸と心臓の薬の材料を買いにね。？？おや、そこにいるのは、

誰かと思えば……」

モルガナ婆さんは、顔を伏せてこそそと自分から離れようとしていた壺の持ち主のお

婆さんの顔を、回り込んで覗きました。

「やつぱり。パメラじゃあないかえ」

「あ……、ひ、久し振りだね、モルガナ」

「あんた、こんなところで何してるんだい？ さてはまた良からぬ事をしでかそうとして
いるんじゃないかな？」

「え？」

その14 レスワの壺(6)

モルガナ婆さんの言葉に、ハナハナ達は目を丸くしました。

「良からぬ事って?」

「この人はね、ガマガエルの妖魔であたしとおんなじ特別な星を持つてるんだ。『身が正

しければ穢れが落ちる』っていうね。けれど、妖魔の性なのかねえ、しよっちゅうここに

そ悪さをするんで、ちつとも星が生きない。そうだろ?」

え?、と、モルガナ婆さんに睨まれて、ガマガエルのパメラ婆さんはおどおどと目を逸らしました。

「公爵にも言われただろ? あんたは重要な星を持つてるんだから、きつと精進潔斎しな

いとダメだって。それを……。今日も、この子達をこんなところに呼び止めて、どうせる

くでもない事をそそのかそうとしたんだろうが」

「それは違いますっ」ハナハナは思わず声を上げてしまいました。

「私の甥のフレイが、お婆さ……。パメラさんの壺を開けてしまつて、その蓋を落として

壊しちゃったんです。そうしたら、壺の中からウサギが飛び出して、逃げてしまつて」

「ウサギ?」モルガナ婆さんが、細い眉をぴくりと上げました。

「もしかして、あんた、レスワウサギをまだ持って歩いてるのかい?」

「あ、えー……。えーと……」

「レスワウサギって?」エマの問いに、モルガナ婆さんは呆れたという顔で答えてくれました。

「ろくでもない小妖魔だよ。物忘れ魔法のレスワしか使えないんだけど、あっちこっち

駆け回って、人に魔法で悪戯を仕掛けて。物を盗んだり、酷い時には家も忘れてしまった

人を全然知らない土地へ連れて行って置き去りにしたり。……

全く、あんなものをまだ

後生大事に抱えてたのかい？」

「い、いえね……」

「でも、妖魔なら、トネリコの木には登れないんじゃない？」

ハナハナの言葉に、モルガナ婆さんは首を振りました。

「いや。妖魔と言っても、レスワウサギみたいな小妖魔は軽いのさ。頭の中身も無いから、

大した悪事はしないんでね」

「そうなんだ」

「それでも、悪意が無いからって人を困らせていい訳じゃあないよ。とにかく、逃げたん

ならとつと見付けて捕まえて、処分してしまわないと??」

モルガナ婆さんの言葉が終わらないうちに、泉の方から何かが落ちた大きな音がしました。

「何だい、今度は？」

ハナハナ達は、急いで泉へと行きました。

市場に居た人達も、一斉に泉へと行きました。

と、泉の真ん中に、マーフに抱えられたレスワウサギがいました。ウサギは、落ちた時のショックでか、ぐったりとしています。

「あっ、あのウサギっ！」エマが指差して叫ぶと、モルガナ婆さん大声で言いました。

「マーフっ、そいつはレスワウサギだ。そのまま沈めてしまっておくれっ！」

「まっ、待っておくれっ！」

パメラ婆さんが必死に叫びました。

「そいつはあたしのだっ！ 頼むから返しておくれっ！」

「何をお言いだいっ！」モルガナ婆さんが目を剥きました。

「あんなろくでもない悪戯小妖魔っ。あんたは何時まであんなものを後生大事にしている

気だえっ？ いい加減におしっ！」

パメラ婆さんは、きっ、とモルガナ婆さんを見返しました。

「たっ、確かにあんたの言う通り、レスワウサギなんてろくなもんじゃあないさ。けどね

っ、あんなものでも役に立つ時も、あっ……、あるんだよっ。

世の中の連中は、みんなあんたみたいに強く無いのさ。どうしても過去を忘れたいって

奴だっ居る。そういう奴には、あのウサギでも、必要なんだよ……

……」

モルガナ婆さんは、しばし、パメラ婆さんのイボだらけの顔を見詰めました。

マーフが、泉から静かに声を掛けました。

「モルガナさん、助けてあげましょう。小妖魔でも、生きているのですから」

モルガナ婆さんは、ふう、と溜め息をつきました。

「しょうがないね。けどパメラ、あんたあいつを持って歩くんなら、二度とここに来ちゃなんないよ。いいね？」

「……分かってるよ」

マーフが、ウサギをほとりまで運んで来ました。パメラ婆さんは気絶しているウサギを

そつと壺に戻すと、小さく呪文を唱えました。

「???封印せよ」

すると、割れたはずの壺の蓋が、何処からともなく現れて、ぽんっ、と壺の上に被さり

ました。

パメラ婆さんはウサギを元に戻し終えると、見物人が黙って見送る中を、自分の店へと戻って行きました。

「さて、あたしも家へ帰るとするかね」

買い物籠を抱え直すと、モルガナ婆さんがよっこいしょ、と蛇体を動かしました。

その14 レスワの壺(7)

その時。

「モルガナ婆さんいるかいっ?」

木ねずみの妖精ワトソンさんが、息せき切って駆けて来ました。

「長老が……、お呼びなんだ……。ボツへ親方が大変なんだっ!」

モルガナ婆さんは、急いで長老の家へと行きました。ハナハナ達も、何事かと一緒に付いて行きました。

長老の家には、村の人が大勢来ていました。

「はい、ちよつとごめんなさい」

モルガナ婆さんは、人を掻き分けて中へと入りました。

一階の会議室には、長老とボツへ親方、そして娘婿のトッドさん、マーマおばさん、ワ

トソンさん、ミイミが来ていました。

「おお、すまんのモルガナ。ボツへさんが、レスワの魔法で記憶が無くなってしまったの」

「ウサギでしょ? さっき泉で捕まえましたよ」

「うむ。わしが、上から落としたんじゃ」

「そうだったんですか」

モルガナ婆さんは、ボツへ親方の側へ寄り、顔を覗き込みました。ボツへ親方は極まり悪そうに、下を向きました。

「……なる程ねえ。けど、レスワウサギの魔法なら、一時間程で効果は切れるんじやありませんか?」

「それがじゃ」

長老はふう、と息を吐きました。

「レスワという魔法は、強さによって忘れる内容の時間の長さが決まる。ウサギの魔法は、

大体杖ひと振りで十五分程度、効果が切れるのに三十分から一時間もあれば十分じゃ。

しかし、このボツへさんの場合、少し忘れが酷いんじゃない？」

「忘れが酷い？」聞き返したモルガナ婆さんに、長老は「うむ」と頷きました。

「トッドの話を聞いたところ、どうもウサギが何かに慌てて、続けたまに何度もボツへさ

んに魔法を掛けたようなんじゃない。お陰で、ボツへさんは自分が大工の見習いになった時から

現在までの記憶を、全部忘れてしまったようじゃ」

「それは、中々……」

「うむ。ここまで酷いと、記憶が戻るのに半年……、いや、下手をすれば一年は掛かるか

も知れん」

「ええっ？ そんなに掛かるんですかっ？」

トッドさんが慌てました。

「そんなんっ、一年も親方に仕事を休まれたら……。俺一人じゃ、仕事をこなせませんっ！」

「どうにかありませんか？ 長老さま」

半泣きのトッドさんを可哀想に思ったマーマおばさんが、言いました。

「どうにかして上げたいのはやまやまんじゃが……。ここまでじやと、わしの魔法でも、

どうにもならん。そこで、モルガナに相談したんじゃが……」

「そうさねえ……。物忘れに一番効くのは、青龍平原にしか咲かない黒竜胆の根なんだけ

れど……。あれはレスワの魔法でさえ打ち消すからね。でも、今は持っていないね」

青龍平原は、パッセルベルのある緑龍溪谷より遙か東の土地です。とても、すぐに行つ

て歸つて来れる場所ではありません。

「それに、今は時期じゃあないしね。行つたとしても、黒竜胆は見つからないさね」

「じゃあ、どうすれば……」トッドさんの困りきつた表情に、長老とモルガナ婆さんは顔を見合わせました。

「……伯爵でも、居てくださればのお……」
「連絡してみたらどうです？」

「あの、長老？」ボツへ親方の様子を心配して集まっていた周囲の人々の後ろから、ふいに声がして、みんなはびっくりして振り返りました。

そこには、泉から上がつて来たマーフが立っていました。

「ハナハナに協力して貰えれば、私が物忘れの解除薬を作れると思いますか……」

「えっ、私？」

みんなに混じつて様子を見ていたハナハナは、突然名前を言われて、びっくりしました。

マーフは、ハナハナの側に来ると、にっこり笑いました。

「泉の一番深い所から湧く水にハナハナの気を込めれば、多分作れると思います」

「そうかつ。光の子じゃ」

長老は立ち上がると、二人に言いました。

「マーフ、すぐに始めてくれ。ハナハナ、ちょっと大変じゃが、マーフに協力してやってくれるかの？」

その14 レスワの壺(8)

ハナハナは、いいのかな、と、ちらりとミイミを見ました。ミイミはそつと頷きました。

「……はいっ、分かりました」

ハナハナはマーフと一緒に、すぐに泉へと降りて行きました。長老達も村の人々も、ハナハナ達の後に続きました。

泉来ると、マーフはすつ、と水に戻りました。少し待っている
と、マーフが掌程の大きさの巻貝を持って上がって来ました。

「この中に、湧き水が入っています。ハナハナ、貝の蓋を開けて……」

マーフが持つ貝殻の蓋を、ハナハナはそつと摘んで開けました。
中を覗くと、透明な水
が一杯、入っていました。

「まず、目を閉じて病気が治りますようにって、お祈りして」
ハナハナは、言われた通り目を閉じると、ボツへ親方の物忘れの
病気が治りますように、
と小さな声で祈りました。

「もつと一生懸命に……。そう、そんな風に……」
ハナハナは三回程、声に出して祈りました。一所懸命、ボツへ親
方の回復を考えました。

と、ハナハナの手から、白い光が出て来ました。
「ハナハナ、目を開けて」

マーフに言われて、ハナハナは目を開けました。

「わ……？」自分の手から光が出ているのに驚いて、ハナハナは目
を丸くしました。

「わっ、私……？」

びつくり顔でマーフを見ると、マーフは薄く笑って頷きました。
「いいから、気にしないで。指を、貝の中に入れてごらん」

どうしたんだろうと思いつながら、ハナハナはマーフの言う通り、
水に指を入れました。

途端。水の中がぱあっと明るく輝きました。透明だった水は虹色
に変わり、僅かに表面
が波打ちました。

「あ……」

「もう、いいよ」

何が起きたのか分からないまま、ハナハナは、指を抜きました。

マーフはハナハナの手

から貝の蓋を受け取ると、虹色の水に蓋をしました。

そして、ゆつくりと呪文を唱えました。

「光の子の力を分け与えられし水よ、全ての者の病を癒せ??」

マーフの手から青い光が現れ、貝殻を包みました。光はすぐに、
貝の中へと吸収されま

した。

「長老」マーフは、側で二人を見守っていた長老に言いました。

「出来ました」

「おお、そうか」

長老は貝殻をマーフから受け取ると、マーマおばさんが持って来
たコップに少しだけ、
中の水を入れました。

「さ、ボツへさん、これを飲むんじゃ」

修行時代に戻ってしまったボツへ親方は、長老からコップを受け
取ると、恐る恐る口に
運びました。

一口、二口と水を飲んで、数分。

「お……、お？」

「おつ、親方っ？」

呼び掛けたトッドさんを、ボツへ親方はゆっくり見ました。

「ああトッド。??わしはどうして、ここに居るんだ？　ワトソンさん家の屋根の修理を

していた筈なのに……？」

「わーっ！　親方の記憶が戻ったあつ！」

トッドさんは大喜びで両手を挙げました。村のみんなも、声を上げて喜びました。

「よかったあつ！」

「やったねえ、ハナハナっ、マーフっ！」

「水の妖精がいてくれて、本当によかったねっ」

ハナハナは、誉められてちよつと嬉しくなりました。マーフを振り向くと、マーフも嬉

しいでしょう、照れたように笑いました。

ボツへ親方を送って村のみんなが上へ引き上げた後。

ハナハナは泉に残っていた長老とミイミに、思い切って聞きました。

「あの、長老……。光の子って、何なんですか？」

長老は驚いたように、長い眉毛の下の目を見開きました。

「前から時々そう言われるし……。前にも、今日みたいに協力してつて言われたし。人間

の男の子が亡くなった時にも、長老は詳しく教えて下さらなかったけれど、私には、特殊

な力があるんですか？」

「ハナハナ、それはね……」

宥めようとしたミイミを、長老が手を上げて止めました。

「いや。そうだの。もう、ハナハナに隠しておくことは、無理かもしれないの」

長老はふうっ、と溜め息をつきました。

「マーフ」

呼ばれて、マーフは「はい」と返事をして、泉から上がって来ました。

「今夜、ハナハナに全部を話そうと思う。悪いが夜、わしの家まで来て貰えるかの？」

「はい、わかりました」

「ハナハナ」ハナハナは、長老を見上げました。

「今夜、ティーヴとミイミと一緒に、わしの家へ来なさい。光の子の事を話してあげよう」

ハナハナはこっくりと頷きました。

しかし、嬉しいという気持ちは湧きませんでした。何か、空恐ろしい事が、これから起こるような気分になりました。

「ではな」と言つて、長老が歩き出しました。

その背中を見ながら、ハナハナはきゅっ、と拳を握りしめました。

その14 レスワの壺 完

その14 レスワの壺(8) (後書き)

その14 レスワの壺は、これで終わりです。
いかがでしたでしょうか？

次は、いよいよ最終話『光の子』です。

ハナハナの特別な星『光の子』とは、いったいどんな星なのか？

本当に、再び魔王との戦いが始まるのか？

ハナハナは、どんな役割があるのか？

お楽しみに！

その15 光の子(1) (前書き)

最終話『光の子』です。

ハナハナの特別な星である、光の子。

一体、どんな意味があり、使命があるのでしょうか？

また、そのために、ハナハナはどんな決断をするのでしょうか？

その15 光の子(1)

その日も、ハナハナはいつものように朝ご飯を食べるとすぐにマ
ーフの泉へ出掛け水を

汲み、ミイミと洗濯を始めました。

箆一杯の洗濯物を持って庭に出ると、トネリコの枝の下、朝の光
を浴びて、解け掛けの

雪がきらきら輝いていました。

ここのところ、冬の王も疲れたのか、あまり雪が降りません。雪
の精霊達も雲の上のお
城から、全然降りて来ていません。

そろそろ春の女神が動き出したからだ、大人達は顔を綻ばせて
います。

春になれば、谷底の荒れ地にもたくさんの花が咲き、薬草も一杯
芽を出します。

鹿やウサギも赤ちゃんが生まれ、ティーヴの仕事も忙しくなりま
す。

みんなが春を待っています。でも、ハナハナは春になるのが憂鬱
でした。

春節祭が終わって年が明ければ、ハナハナは十一歳になります。

それは、カールベルの

リリア婆さんが、ハナハナが生まれた時に予言をした事が始まる歳
です。

市場で大騒ぎがあった日の夜、ハナハナは全てを長老から聞きま
した。

かつてあった魔王との戦いの事、ミイミとハナハナの両親の事、
ティーヴの事、そして、

ハナハナに送られた予言の事??

ハナハナは、よっこいしょ、と箆を乾いている場所に置きました。

物干竿にしている枝の露を雑巾で拭き取り、洗濯物を掛けて行きます。

「今日はこっちの枝も使っわよ」

後の洗濯物を持って来たミイミの声がしました。

「天気、良くてよかったわね」

「……うん」

「ハナハナ」ミイミは、雑巾を取りにハナハナの方へ寄って来ました。

「まだ、気にしてるの？」

「……うん」ハナハナは慌てて首を振りました。

「そんなこと、ないよ」

「まあ……、あんなことを聞いて気にしないようにって言われても、無理よね……」

ミイミはゆっくり妹の前へしゃがむと、優しく笑いました。

「考えなさい、ハナハナ。悩むのは決して悪いことじゃないわ。でも、思い詰めないでね。」

どうしても分からなくなったら、私でもいいしティーズでもいい、もちろん長老さまだっ

て、みんなハナハナの相談に乗ってくれる。ね？」

「うん……」ハナハナは、力無く頷きました。

あの夜。

長老は自分の部屋の肘掛け椅子にゆったりと腰掛け、話を始めました。

「『近い将来、再び魔王が戻って来る』それが、リリア婆さんの予言の最初じゃった。」

『この世界に戻った魔王は、またかつてのように十三の軍団に命令を下し、世界の破壊を』

始める。かつて我々は妖精と人間の中から十五人の英雄を選び戦い、

魔王を退けた。

しかし、今はその英雄達も、いない。彼等の剣は折れ、身体は天へ還った。

彼等に代わる者を、この世界の者達は二度と持たない。唯一の望みは『光の子』。光の

子だけが、この世界を暗黒から救う力を持つ』」

そして長老は静かに、ハナハナの顔を見ました。

「リリア婆さんは、続けてこう言った。『十五人の英雄のうち、ひと組の猫の妖精の夫婦

の間にその子は生まれる。トネリコの木の上に。ミアとパスカルの子ハナハナは、光の子の星を持つ』。??わしは、その予言を聞いた時、正直仰天したのじゃ。そして嘆いた。

パスカルとミアが、戦士として小さなハナハナとミイミを置いて戦いに赴かねばならん

のに、その赤ん坊のハナハナが、また世界の救済という重責を負わされるのか、と……。

ミイミは次々と辛い運命に肉親を取り込まれるのかと。

しかし、それも決められた事なら致し方無いのかもしれない。わしらの出来る事は、ハナ

ハナが無事に育つよう、手助けする事じゃ。そう心に決めて、この十年ハナハナを見守つ

て来たのじゃ」

「長老さま……」ミイミが、うつすら浮かんだ涙を、そつとエプロンの裾で拭きました。

「ただの」

長老が続けました。

「リリア婆さんの予言では、光の子は魔王と戦うとは言っておらんのじゃ。わしは、それ

がずっと気になっておった。戦わんなら、どうやって光の子は世界

を暗黒から救うのか、
との。

じゃが、ハナハナが育つのをずっと見て来て、また子供達が元気に暮らしておるのを見守って来て、わしは思った。この、子供達の元気こそが、世界を救うのではないのかとの。

また、ハナハナはきっと、どうすれば自分の星を生かす事が出来るのか、きつと自分で答を見付けるじやろうとの」

長老はにつこり笑うと、ハナハナに側へ来るよう手招きました。ハナハナは神妙な顔で、長老の前へ立ちました。

「本当に、大きくなったの。ミーマとパスカルが魔王の城への旅に出る時には、まだこんなに小さな赤ん坊じゃった。それが、もう立派な猫の妖精じゃ」

その15 光の子(2)

長老は、ハナハナの、まだ少し小さい手を取りました。

「ミイミ、よく頑張ったの。まだ十五じゃったミイミが、両親から赤ん坊の妹を託されて

途方に暮れておったのが、つい昨日のようじゃ。ティーヴも、よくミイミとハナハナを守

ってくれた。おまえさんが居たから、ミイミはハナハナを育てる事が出来たんじゃ」

「いや……。俺は何も。ミイミがしっかり者だから、ハナハナも病気ひとつせずに育ったんです」

「ティーヴ……」長老は、二人にうんうん、と頷きました。

「十五歳同士の夫婦が大変だったのは、わしがよう知つとる。ほんに、頑張った。じゃが

……」

長老は、ハナハナに目を戻すと、ゆっくりと言いました。

「もう、ハナハナの事は心配いらん。これからは、ハナハナは自分で、どう生きて行くのか、決めねばならんからの」

どう、生きて行くのか。

その長老の言葉は、ハナハナの小さな胸にずしりと重い課題を置きました。

十一歳は独立するには早過ぎる歳です。しかし、『光の子』という稀な星を持つて生まれたハナハナには、時間はもうありません。

いつまでも、姉夫婦に庇われる小さな子供では、いけないのです。
「……………」

あの夜の事を思い出したハナハナの手から、モモの小さなエプロ

ンが落ちました。

それを、ミイミがそつと拾いました。

「ハナハナ」ミイミに呼ばれ、ハナハナははつと我に還りました。

「やっぱりもう一度、長老さまと話してらっしゃい」

「お姉さん……」

「これから、どうするのか、ハナハナはどうしたいのか、ね。今分からなくても、お話を

聞いているうちに、何かいい案が浮かぶかもしれないわ」

「……うん」

そうしよう、とハナハナは思いました。

ここでするぐると悩んでいても仕方ない、とにかく動いてみなくっちゃ。

「分かった。洗濯物ちゃんと干したら、長老さまのところへ行つて来る」

頷くハナハナに、ミイミは微笑んで頷き返しました。

洗濯の手伝いが終わった後、ハナハナはミイミに言った通り、長老にもう一度話を聞くために出掛けました。

けれど、一体どんな事を話せばよいのでしょうか？ 考えながらとぼとぼと歩いていると、

後ろから声を掛けられました。

「ハーナハナっ！」振り返ると、子ねずみ三兄弟のリック、ニック、マック、それにニー

ニヤとエマが上って来ました。

「どこ行くの？」

寒がりのニーニヤは、橙色の毛糸のオーバーをきつちり着て、手には同じ色のミトンの手袋をしています。

リック、ニック、マックは、緑、水色、黄色の色違いのお揃いの厚手の綿の耳つきキャップを被っていました。

おしゃれなエマは、自分の灰色の毛並みによく合う青い絹のシヨールを羽織っています。

ハナハナは、みんなの着ている服の色が、何故かとっても新鮮なものに見えました。

不思議な顔で見詰めているハナハナに、エマは「どうしたの？」の小首を傾げました。

「あ……、ううん、何でもないの。これから長老さまのお家へ行くの。ちよつと、お話があつて……」

「あ、いいなつ。長老さまのお話つて、また新しいおとぎ話？」

「えーつ、だつたら私達も聞きたいつ」

ニーニヤが大きな声で言いました。リック達も「僕もつ」と口々に言います。

「ハナハナにだけつて、どうして？」エマが、口を尖らせました。

「この間も長老さまは、ハナハナにだけいらっしゃいつて、言つてらしたわよね？」

「あ、ウサギが暴れた日でしょ？ あの後、ハナハナ、ミイミおばさんとティーヴおじさ

んと一緒に長老さまのお家へ行つたのよね？」

「あれ、何のお話だつたの？」

ニックに聞かれ、ハナハナは暫し戸惑いました。

大人から、『光の子』の話をみんなにするなどは言われていません。ですが、みんなに

話すのは、何だか自分だけ特別だと言っているように思われそうで、勇気が要りました。

その15 光の子(3)

でも、もうすぐハナハナは決断しなくてはなりません。

『光の子』として、何をするべきか。

もしかしたら、それでパッセルベルを出なくてはならないかも知れないのです。

ハナハナは、気持ちを決めました。

「あのね……、この間長老さまのお家に行ったのは、私の星のお話を聞かためだったの」

「星って、ハナハナはやっぱり星を持ってたんだ？」

リックが目を輝かせて聞きました。

「それってやっぱり『光の子』？」

「……うん」

「『光の子』って、一体何なの？」

何につけても自分が一番でないと本当は気が済まないエマが、目を釣り上げて子ねずみ

達を見ました。

「ずっと、大人の人達が、あのトーベルさんまで『光の子』ってハナハナの事を誉めてた

けど、そもそもそれは何よ？」

「エマっ」きつい言い方を、ニーニヤが嗜めます。

「ハナハナの話を聞こう？」

ね、続けて、とニーニヤに言われ、ハナハナは固い表情で頷きました。

「私の星、ね、みんなの言う通り『光の子』だったの。でも、そんないいじゃない。反

対に、恐いの。長老さまが昔、私が生まれた時に、カールベルのリアさんっていう長老

さまから、私に特別な星があるっていうお告げがあったって、お聞

きになったの。それは、

十一年後、再び魔王がこの世界にやって来て、世界を暗黒にしてしまう。暗黒なにつた世

界を救う事が出来るのは、『光の子』だけだつて……」

ハナハナが話し終えた後、みんなはしばらく呆然としていました。やがて、ニツクが小

さな声で「すつげえ」と言いました。

「ハナハナ、英雄の星を持ってるんだ」

「ううん、違うの。英雄じゃないよ」

「でも世界を救えるんでしょ？」リツクにも言われて、ハナハナはもう一度首を横に振り

ました。

「私になんか、救えないよ。そんな方法、分からないもの」

「そうよね。ハナハナに分かる訳無いわよ」

エマが、つん、と横を向きました。あからさまに「どうして自分じゃないの？」という

態度のエマに、ニーニヤは「もうっ」と溜め息をつきました。

「大体、ハナハナは、ただいい子なだけもの。そんな子が英雄なんて、おかしいわよっ」

「いい子だからいいんじゃない。エマみたいに我がままな子が英雄だったら、それこそ世

界は暗黒のままよ」

「なあによそれっ」

「止めなよっ、エマもニーニヤも」

「……うん、でもエマの言う通りなんだよね」

ハナハナは、ぼつり、と言いました。

「私、ただお姉さんの言い付けを守って来ただけなもの。いい子つて言われるとどうかな

あって思うけど、エマみたいに自分の言いたい事ちゃんと言える方じゃないし、ニーニヤ

みたいに頭良くないし。リックみたいに器用でもないし……。

なのに、どうして私が『光の子』なのかなあ。長老さまがおっしゃるんだから、リリア

さまの予言は正しいんだろうけど、だったらどうして、私にそんな予言があつたんだろう

って、ずっと考えてたの」

「ハナハナ……」ニーニヤが、気の毒そうな顔でハナハナの側に来ました。

「気にする事、ないよ」

「そうなんだけど……。ほんと、エマが『光の子』だったらよかったのに」

ハナハナの言葉に、子ねずみ達が一斉に「止めてよ」という目でエマを見ました。

エマはみんなの嫌そうな顔を見て、わざと胸を反らして言いました。

「そーよあ、私が『光の子』だったら、ハナハナみたいにぐちぐち悩んだりしないわっ。

英雄なんだもの、やりたい事みーんなやつちゃう。好きなお洋服着たり、好きなお花を勝

手に咲かせたりしちゃう。トネリコの花だって、見たい時に咲かせちゃうわっ。人間の街

にだって、行っちゃう」

「だから英雄にはなれないんじゃないのかなあ」

呟いたリックに、エマは「なんか言った？」と凄みました。

「ねえでも、ハナハナは何で悩んでるの？ 世界を救う方法が分からないから？」

エマの大きな目で覗き込まれて、ハナハナは一瞬びっくりしました。

「そうなんだけど……」

「だってそんなの、魔王をやっつけちゃえばいいんじゃないの？」

「長老さまは……。リリアさまの『光の子』の予言には、魔王と戦うという言葉は一言も

無かったとおっしゃるの。だから……」

「ええっ？ 戦わないで、どうして世界を救うの？」

今度はリック達が目を丸くしました。

その15 光子(4)

「そうよねえ、ならどうやって暗黒の世界を救うんだろ?」

「二ー二ヤも首を傾げます。」

「だから、英雄じゃないんだって」

「そうだね、それは英雄じゃないよね」

「それで、ハナハナは悩んでた、と?」

「エマに言われて、ハナハナは頷きました。」

「確かに、それは悩むよねえ」

「戦わないで魔王から暗黒の世界を救うのって、どうやるんだろ?」

「腕を組むリックに、マックが言いました。」

「ねえ兄ちゃん、暗黒って、真っ黒って事?」

「ん? ああ、そうだね」

「じゃあ、真っ黒じゃなきゃいいんでしょ? 黒い所に色んな色を

入れちゃうとか」

「赤とか黄色とか橙色とか?」

「ピンクとか真っ白とか」

「それで暗黒が救えると思ってるの? ばっかじゃない?」

「エマが突っ込みを入れて、兄弟はしゅんとなりました。しかし、

ハナハナはこれは大変

なヒントだと思いました。」

「そっか……、真っ黒じゃなくすればいいのか」

「なあに、ハナハナまで?」

「ううん、そうじゃなくなつて。色って、前に若先生がおっしゃって

たけど、光が当たるか

ら初めて色だつて分かるんだって。暗黒って事は、色が無くなる。

真っ黒になるのは光が

無くなるから。で、私の星は『光子』」

「そっか! 真っ黒に光を当てて色を取り戻すのが『光子』なん

だっ！」

リック、ニック、マックが同時にばんっ、と手を叩きました。ニ
ーヤもなる程と頷き

ました。

エマは、「ほんとにそんな事なの？」と、眉を顰ひそめました。

「分からない。でも、魔王と戦わないで暗黒の世界を救うって言う
んなら、それに近いん

じゃないのかな……」

呆れたという顔で、エマはハナハナを見ました。

「ほんと、どうしてハナハナに『光の子』なんて星があるんだろ」

「とにかく、これから長老さまとお話して来る」

「うん、それがいいよ。長老さまなら、きつといい答えをご存じだ
よ」

リックの言葉に、ハナハナは「うん」と頷きました。

「じゃあ、行って来るね」

ハナハナは、みんなと別れて長老の家へと急ぎました。

急に訪ねたのですが、長老はにこにこしながらハナハナを家へ招
き入れてくれました。

「まだ外は寒いじゃろう、さ、暖炉の側へお行き」

集会所を誰かが使っていないければ、長老はいつも一人で家にいま
す。

「今、ココアを煎れてあげようの」

「あ、私手伝いますっ」

ココアはリック達兄弟のお父さんが働いているベラスの方から持
って来る、とっても貴

重な飲み物です。

ココアを買うお金は、ティーヴが狩りの獲物を売って得たお金で
す。その時々で買える

だけ買い、村のみんなで少しずつ分け合っています。

動物性のものを飲んだり食べたり出来ない妖精は、牛乳の代わりに、サペという豆の汁

からできる豆乳を飲みます。ココアも、たっぷりの湧かした豆乳に、粉をスプーン一杯入

れ、お砂糖を加えてかき混ぜます。

ココアのいい匂いが、ほんのりと長老の家の居間に漂い、ハナハナはちよつとだけほつ

とした気持ちになりました。

掛けなさい、と椅子を勧められて、ハナハナは暖炉の脇の背無しの椅子に腰掛けました。

「さて。今日ハナハナが何で来たのかは分かっておるよ。『光の子』の事じゃろう？」

「はい。……あの」ハナハナはちよつとココアを啜ると、思いきつて言いました。

「私、やっぱり分からなくて。『光の子』って、一体何をどうするんだらうって。でも、

さつきここに来る途中で、友達に会ったんです。ニーニヤやリック達やエマと話をしてい

たら、みんなが色んな事を言ってくれて……。マックが、世界を暗黒から救うのには、真

っ黒になったところに光を当てて、色を取り戻せばいいんじゃないかって……」

「ほお……？」

長老は面白そうに微笑みました。

「色を取り戻す、の」

「はい。『光の子』は光なんだから、色々な色を照らし出すために居るんじゃないかって」

言ってから、ハナハナは、はっとしました。

その15 光の子(5)

さつき、道でみんなに出会った時。

みんなの着ている服の色が、とっても綺麗だと思った事。橙色や黄色や青が、いつもよ

りとっても鮮やかに見えました。

それが、その色こそが、ハナハナ達の世界なのです。

「ハナハナ」長老が、ココアのカップを脇のテーブルに静かに置きました。

「その考えは、きつと当たっておる。世界は華やかな色で出来ておる。その色が、魔王の

出現で真つ黒に塗りつぶされる。それをまた元の色とりどりの世界に戻すのが、きつと

『光の子』の使命なのじやろう」

「……はい」

「しかしそれには、魔王が掛けた、いや、これから仕掛けるであろう様々な悪の魔法を撃

ち破らねばならん。それには、大変な努力と修行が必要じゃ。じゃが、ハナハナには幸い

な事に、その素質がちゃんとある」

「私に、魔法の素質が？」

ハナハナはびっくりしました。魔法なんて、簡単なものを除くと、これまであんまり使

ってきていません。

「そう、ハナハナはもういくつかの魔法を、使っておる。たとえば、命の水じゃ。ボツへ

親方やルウを助けたあの水は、ハナハナの魔法も入っておる」

「でもあれは、マーフの力じゃ……？」

「大半はマーフの魔法じゃ。じゃが、ハナハナの力で更に安定した

命の水になったのじゃ。

その他にも、物忘れの解除薬を作った事じゃ。あれはハナハナの力を、マーフが薬に変えた。

やり方は違うが、命の水とほぼ同じじゃ。『光の子』には、じやから人々を癒す力があるんじゃ」

「私……」

??言われてみれば、そうかも。

ハナハナは誰かが怪我をしたり病気になったりした時、マーフや長老に乞われて協力していました。

思えば、モルガナ婆さんが薬を黙々と調合している姿に、少し憧れたりもしました。自分

分も、誰かの役に立つ仕事がしたいと、ずっと思っていました。

人々を癒し、この世界を暗黒から救う。もしそれが『光の子』の本当の使命なら、自分は進んでやろう??

「長老さま」ハナハナは、しっかりした口調で言いました。

「私、もっと勉強がしたいです。世界の事もそうだし、薬の事とか、その……、魔王との戦いの事とか」

「ふむ」長老は、少し考えるように目を閉じました。

柱時計がボーン、と、11時を打ちました。

「……ダメ、ですか?」

ハナハナは、じっと目を閉じたままの長老に、恐る恐る聞きました。

「……いやいや、ダメではないよ。考えておったのじゃ。ハナハナにとって何処で誰にそれらを教わるのが一番いいのかと、の」

「長老さまや、若先生では、ダメなんですか?」

「ふむ……」長老は、白くて長い顎ひげを二、三回撫でました。

「ダメではないんじゃないか。もったいい先生がおるかと思つてのお。

??カールベルのリリ

ア婆さんの所には、色々な妖精が勉強に来ておるからの。そこならどうかとも、思つての」

「カールベル……」

ハナハナは思わず呟きました。

カールベルは、青龍平原の東の果て、ルットーウツドの広大な森の中の街です。

「わしとリリア婆さんは、魔法の水晶球を使つてちよくちよく話をしておる。トーベル伯

爵とも、緊急の時はその方法で連絡を取り合つておるのじゃ」

どつこいしょ、と長老は立ち上がり、隣の部屋へと入つて行きました。

ややあつて、長老は両掌に丁度包める程の大きさの水晶を持つて来ました。

「これが、その水晶球じゃ」

「すごい……」ハナハナは思わず目を見張りました。

「これに呪文を唱えると、相手の水晶球に自分が映る。相手が応えれば、それで話が出来

るのじゃ。ハナハナが、もしカールベルで勉強したいと言うのなら、わしはこれでリリア

婆さんと話をして、ハナハナをあちらに受け入れてもらうようにするがの」

「いつ、今ですか？」

急な展開に、ハナハナは目を丸くしました。

「どうしよう」とおろおろするハナハナに、長老や「いやいや」と笑いました。

「今すぐではないよ。そんな急には決められんじやろ。第一、ミニとティーヴにちゃん

と話をせんといかんしの。ただ、パッセルベルよりカールベルの方が、リリア婆さんを始め、ハナハナが覚えたいと思う事を教えてくれる先生が、きっとたくさんおると、わしは
思っがの」

その15 光の子(6)

長老の家から帰ったハナハナは、早速ミイミに長老に言われた事を話しました。

お昼の支度をしていたミイミは、手を止めて、妹の話を聞くために食卓へ腰掛けました。

ハナハナが話し終えると、ミイミは小さく頷きました。

「そう……。長老がそうおっしゃったの」

「うん。でも、カールベルって遠いよね」

「そうね、パッセルベルからはかなり離れているわね。……不安？

ハナハナ」

「うーん……」

不安じゃないと言えば嘘になります。もしカールベル行きが決まれば、ハナハナはそれでミイミ達の所から独立する事になるのです。

予言の通り、これから魔王が舞い戻って来るとすれば、もうそれきりミイミ達には会え

なくなるとも考えられます。

「私……。どうしよう……」

「正直に言つとね」ミイミは静かに言いました。

「私、ハナハナが『光の子』なんて事、知らなければいいと思つたの。父さんと母さん

が、やはりリリアさまの予言の英雄だと分かった時、真つ暗闇に突き落とされた気分だつ

た。だって、まだ十五歳だったのよ？ 両親が死ぬかもしれないっ

て分かって、恐くない

子供なんていないわ。でも、その上に、リリアさまはハナハナにも過酷な予言を下された。

私は本当に途方に暮れて……。そんな私を、ティーヴや長老さまが

支えてくださったのよ。

でも、ハナハナが大きくなるにつれて、またあの時の恐怖が訪れるのかと思うと、気が気じゃなくなってきたの」

初めてそんな話をしてくれたミイミを、ハナハナはじつと真剣な顔で見詰めていました。

「??ハナハナが『光の子』として色んな勉強をしたいっていうのは、分かるわ。それは

多分とっても大事な事でしょう。だから……。

だから、私は反対は出来ない。それは、自分の気持ちをハナハナに押し付ける事になる。

何より、自分の我がままで世界を暗闇のままにってしまうような事を、この世界の者なら

してはいけないもの……」

「……お姉さん」ハナハナは、切なくなってミイミに抱き着きました。

「ごめんなさい、辛い思いをさせて」

ミイミは、ぎゅっと妹を抱き締めました。

「ごめんね、ハナハナのせいじゃないのに。私こそこんな話、ハナハナにしてはいけない

と思ってたのに……」

「ううん。してくれてありがとう。だって、今聞いておかなかったら、私、ずっとお姉さ

んの気持ち知らないままだったかも」

「ハナハナ……」

「ごめんなさい、私……、私、カールベルへ行きます」

自分を思い遣ってくれる優しい姉がいるから。

ミイミとティーヴ、そしてモモとフレイ。大事な家族を守りたいから。

「私にしか、暗闇に光を当てられないなら、私がやらなきゃならな

い。誰も代わってくれ

ない、そうでしょ？　だったら、私はカールベルに行って、リリアさまのところでしたくさ

ん勉強します。そして、立派に『光の子』の使命を果たします」

「ハナハナ……」ミイミは、切な気な、それでいて嬉し気な表情で小さな妹を見ました。

「本当に、それでいいの？」

「……うん」ハナハナは、力強く頷きました。

「恐いけど、やらなきゃ。やってみる」

その時、どうしてあんなに清々しく笑えたのか、後から振り返ってもハナハナには分かりませんでした。

ただ、その時にした大きな覚悟が、パッセルベルを、更に世界を、のちに本当に救う事になりました。

一週間後。　ハナハナは十一歳の誕生日を待たずにカールベルへ旅立ちました。

旅立ちの朝、ハナハナは最後の水汲みをするためにマーフの泉へ行きました。

バケツを持って降りて行くと、泉のほとりでマーフが待っていました。

「今日、カールベルへ行ってしまうんですね、ハナハナ」

少し悲しそうな表情で、マーフは言いました。

「うん。色々ありがとう、マーフ」

「ハナハナは『光の子』。世界を暗黒から救うために、多くの事を学ばねばなりません。」

それには、ここよりリリアさまの元へ行った方がいいのは分かります。でも、残念です」

ハナハナは、じつとマーフの声を聞いていました。
マーフは、そつと手を水の中へ浸けました。

その15 光の子(7)

「私は、ハナハナに出会って本来の自分を取り戻しました。水の高位妖精である自分の力

と使命を。だから、ハナハナには『光の子』としてもっと力を伸ばして欲しい。でも……」

「マーフ」自分がパッセルベルから出て行くのを悲しがってくれる人がここにも居る事に、

ハナハナは改めて感謝しました。

「ありがとう」

ハナハナは、そっとマーフの手を取ると、その手の甲にキスをしました。

すると。

それまで魔王の暗黒の魔法に染まったままだったマーフの黒い肌が、みるみる本来の水

の妖精の肌の色に変わりました。

「マーフっ？」

「これは……」

美しい虹色の光沢を放つ薄水色の肌の自分の手を見詰め、マーフは金色の目を驚きに見

開きました。

「元に、戻った……」

「これが、本当のマーフなんだ」

よかった、とハナハナは微笑みました。マーフは、泣き笑いのような顔でお礼を言いました。

「ありがとうハナハナ」

「うっん、私は何も……」

多分自分の力でしょうが、何となく信じられなくてハナハナは大

きく首を横に振りました。

その手を握り、マーフは力強く言いました。

「いえ、これはハナハナの魔力です。出会った頃より、ハナハナは確実に魔力が成長しています。きっと将来は、魔王も凌ぐ魔法使いになります」

「そつ、そんな……」

「そうならなければなりません。ハナハナ、これだけは決して忘れないで下さい。何があ

つても、パッセルベルを忘れてはいけません。ここに住む人々を。

大事な家族を。それこ

そが、魔王と対峙した時に唯一己を保ち、希望を持ち続けられる手段です」

一度魔王に負け、その足下に踏みにじられた経験を持つマーフの言葉は、ハナハナの胸を打ちました。

「分かった。絶対、何があっても忘れない」

大きく頷いたハナハナに、マーフは何度も頷き返しました。

水汲みを終え、ハナハナは家へ戻って旅の支度をしました。

「それじゃ、行って来ます」

「いつてらっしやい」

ミイミは、台所でハナハナを抱き締めました。

モモは、大事にしていた指人形をハナハナにお守りだと言ってくれました。

同行するティーヴの後に続いて家を出て、ハナハナはトネリコの根元まで降りて行きま
した。

根元では、ハナハナを見送る大勢の人が待っていました。

一番前に長老がいました。その脇に、ニーニヤが、涙を浮かべて立っていました。

「ハナハナっ」ニーニヤは、ハナハナを見ると泣きながら抱き着いて来ました。

「本当に行っちゃうんだね？」

「うん」ハナハナは、親友の背中を片手で撫でました。

「元気でね、ニーニヤ」

「ハナハナ……」

「しつかり、勉強しておいで」

長老が言いました。

「わしらは、いつまでもここでハナハナの帰りを待っておるよ」

「はい」

「いつてらっしゃい」マーマおばさんが、わざと元気な声でいいました。

「身体に気をつけるのよっ」

「ハナハナっ！」

おばさんの後ろにいた子ねずみ三兄弟が、たたたつ、と前へ出て来ました。

「これっ」と目の前に手を出したのは、リックでした。

「なあに？」

「持ってって。作ったんだ」

リックがぱつと手を開くと、掌に小さな木彫りの花が一輪、乗っていました。

「トネリコの花。ハナハナが、パッセルベルを思い出せるように思っ……」

「ありがとう」ハナハナは微笑んで、その小さな一輪の花を手に取りました。

「絶対忘れないよ」

いつてらっしゃい、と三兄弟が涙声で言いました。

そして、大勢の人が、ハナハナにいつてらっしゃい、と言いまし

た。

ニーニヤも、涙を拭いて「いつてらっしゃい」と言いました。

「待つてるからね」

「うん、絶対戻って来るから、ニーニヤも待つてて」

うん、とニーニヤが頷いたのを見て、ハナハナは笑顔になりました。

「行つて来ます」

元気な声でそう言うと、ハナハナは歩き出しました。

トネリコの根元を離れ、しばらくして、ハナハナは足を止めました。

そして、大きなトネリコの木??パッセルベルの村を、見上げました。

「どうした?」振り向いたティーヴに、ハナハナは言いました。

「私……、絶対守るから。パッセルベルも、世界も」

「ああ」と頷くティーヴと同調するかのように、トネリコの大きな枝が、雪風に微かに揺れました。

その15 光の子 完

??「パッセルベルの猫の妖精」 完

その15 光子(7) (後書き)

「パッセルベルの猫の妖精」は、これで完結です。

ここまで読んでいただいて、ありがとうございました。

1話目から、最終話まで、時間がかかってしまいましたが、なんとかこぎつけました。

お気に入りにも、35件も登録していただけました。ありがとうございました。

地味なお話でしたので、気に入って下さる方は僅かなあと思っていたので、望外の喜びです。

また、次の作品もファンタジーで頑張りたいと思いますので、よろしければ、ご感想なり、お寄せ下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2318d/>

パッセルベルの猫の妖精

2011年7月12日07時03分発行